女子文壇

明治四十年四月一日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

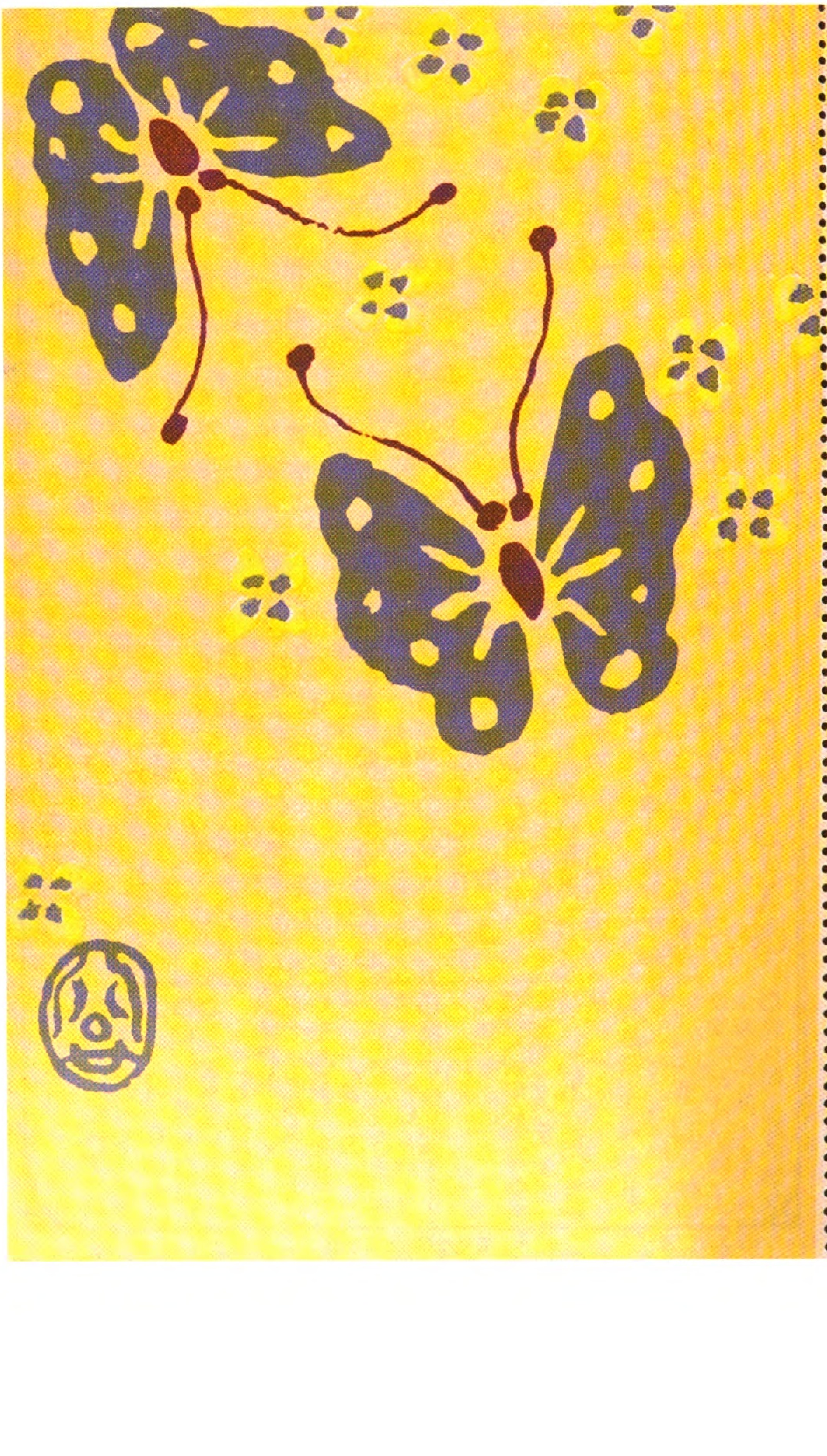
第三巻第五號



春の野



高野巖子筆



村上為俊氏筆

郵便はかき



CARTE POSTALE

女子文壇附録絵葉書

毎號皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第三巻第五號目次

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



四月一日より染織競技會開催仕候

●東京勸業博覽會御土産用として意匠を凝したる紀念品數多發賣仕候

●和洋小間物其他化粧品るいいろ〳〵取揃へ陳列致し置き申候

●今般募集致し候長襦袢並に裾模樣圖案優等の者陳列御觀覽に供候

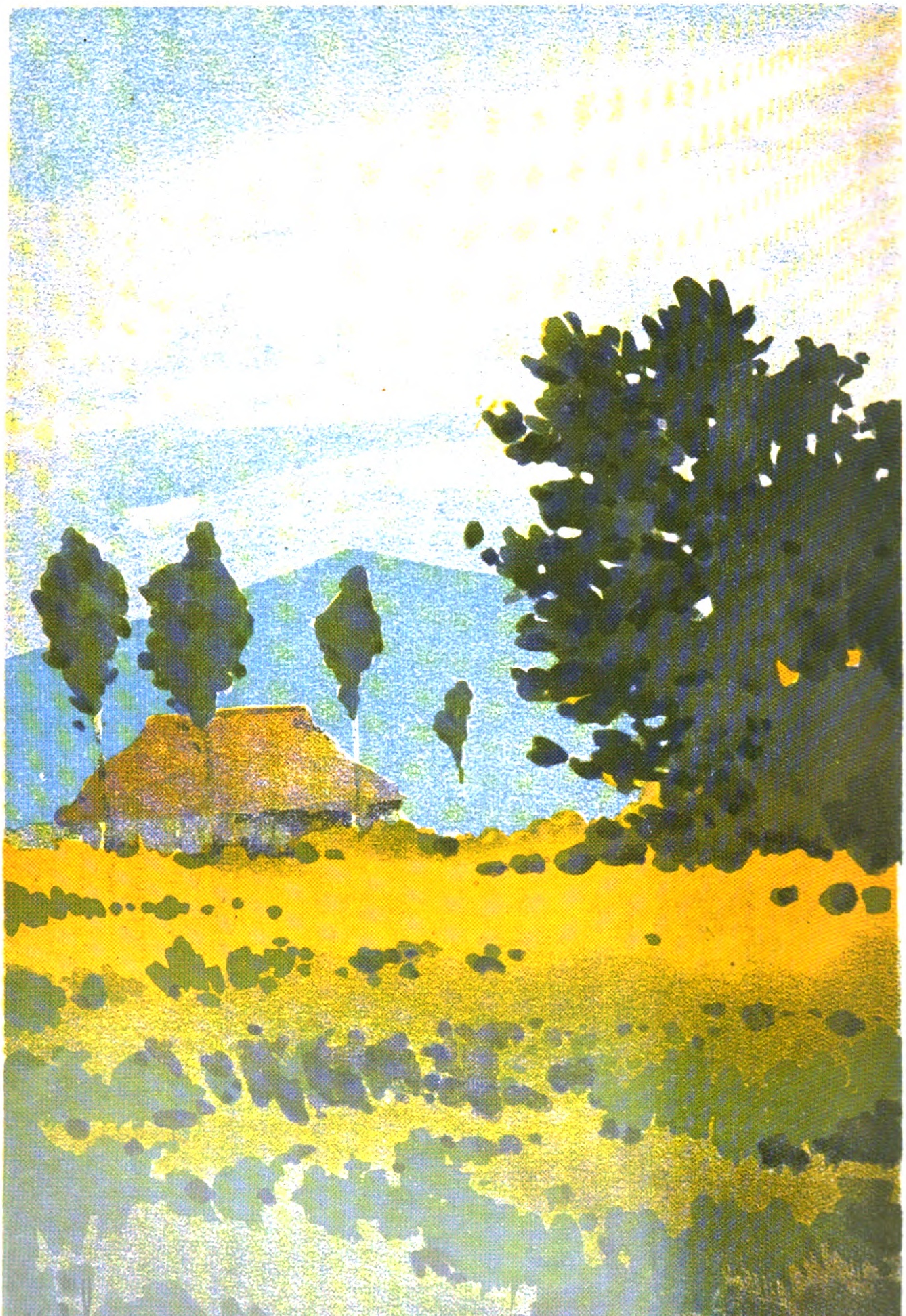
●よせきれ見切反物るいは例の通り日々澤山取揃へ置き申候

東京日本橋

白木屋吳服洋服店

電話本局 八一、八二、八三 (特)四七五番

菜の花



三宅克己先生筆

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゆるムチスカシ的姑息式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固な**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雑多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價)壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新發明 人肉 美容料 體　色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ良に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず經ら**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば中年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**惡血毒血**を一掃するとを確證す但し本劑は其效極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名號に注目し購求あらんとを乞ふ



腋臭 わきが　根治確證 新發見藥

醫療實藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發又は他病に變ずる憂なき斯世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓廿錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**(電話下谷五四六番)

第一輯（三版）賣切　第二輯（新刊）製本出來

沼波文學士。佐々木信綱
巖谷小波。河井醉茗
先生序文

製本發賣

女子懸賞文集

第二

洋裝美本
紙數五百頁餘

正價金三拾錢　郵税六錢（郵券代用必壹割增）

本書第一輯は曩に大好評忽ち數萬部發賣の盛況を呈せしが、今又第二輯成る、滿卷實に奬學五百金余の重賞を懸けて募れる天下女秀才の金篇玉什明治文壇の珍品なり

出版元　東京々橋區大鋸町　電話本局六〇七番（郵便振替貯金口座第一七二九番）　女子文壇社

特約賣捌所　〇東京堂〇東海堂〇北隆館〇前川文榮閣〇上田屋〇良明堂外書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

會員募集
規則書進呈す

第四回新學期開始

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子敎育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲每號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期每に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

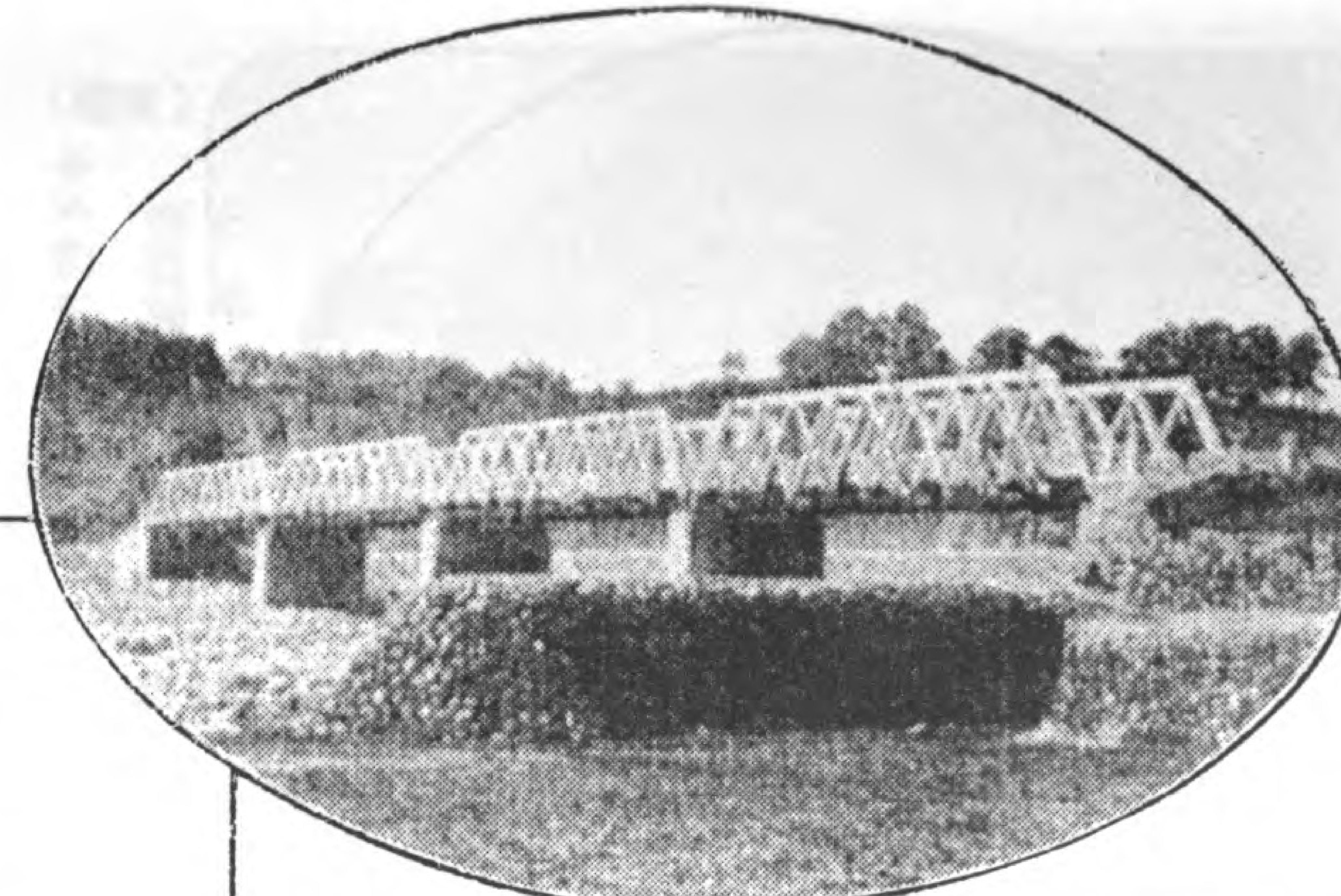
● 博覽會開會中入會金全免す

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り進呈す

● 東京神田南甲賀町 (電話本局三千四番)

大日本淑女學會

▲報知新聞評 本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子敎育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也



信濃上伊那太田切橋（有賀まさ子寄）



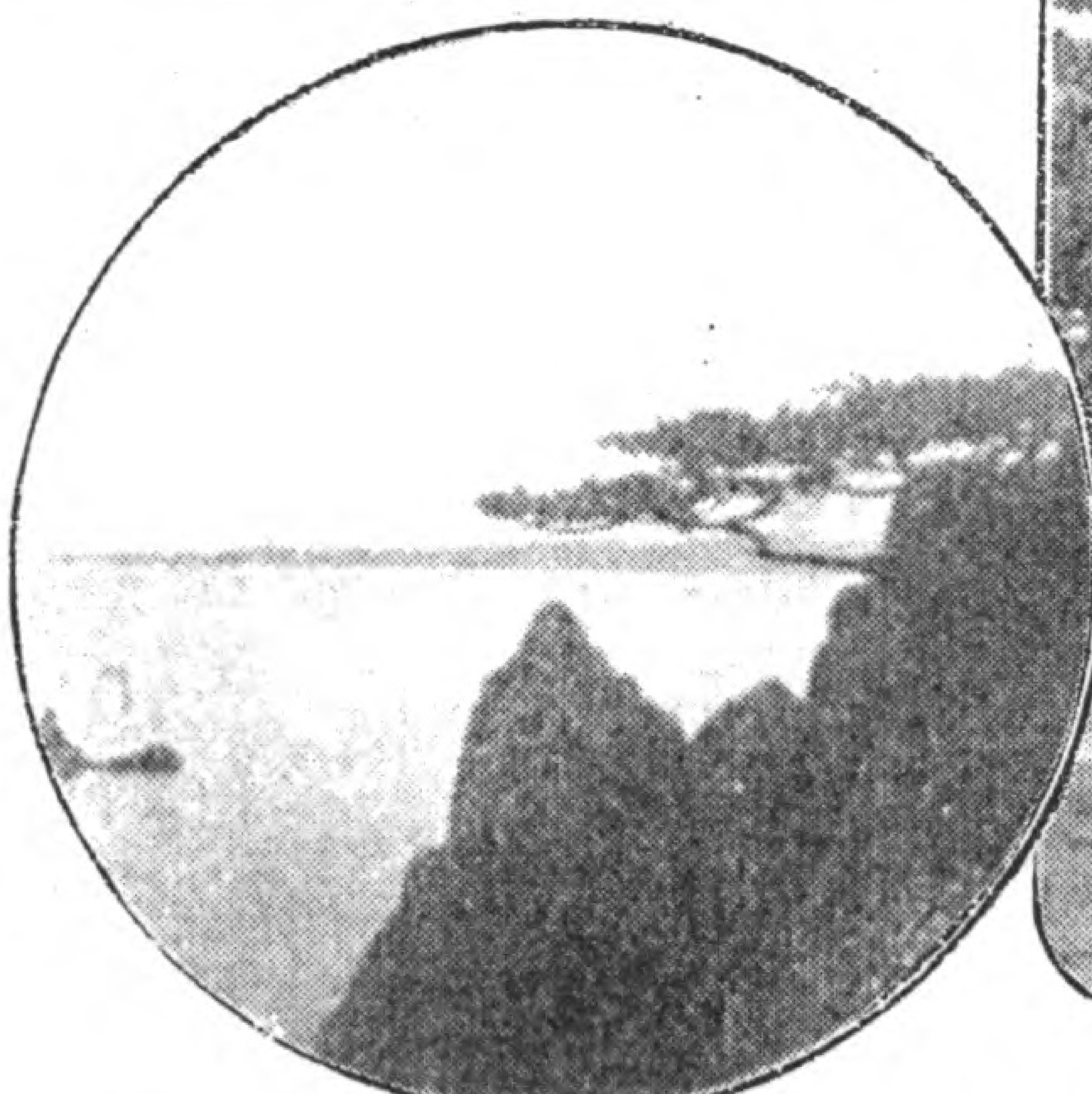
攝津の粟津（金岡ちか子寄）



熊本市建設銅像（村田峯子寄）



溪流（安田初子寄）



相州葉山の海濱（高田眞琴寄）

誌友おもかげ（六）





（東京）藪静子
同　智子



（下野）新井琴子

（長野）山田くに子

（丹波）石原糸子

（東京）林萩月





記者申す（續々お寫眞の寄贈を願ひます、御返しいたしますから

誌友おもかげ（七）





（千島）白百合　白椿　白菊



（豊後）阿南萩子　秋岡露子

（若松）遠山秀子　松崎雪子

（河内）中井龜子　川井しげの

（福岡）木下秀月子　後藤筑紫子





記者申す（續々お寫眞の寄贈を願ひます、御都合で御返しいたします）

文部省中等教員本試驗合格者

（國語漢文科）



加藤かづ子君



千葉瀟子君



柳畔びさ子君

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

好評新刊發賣

野の花
田山花袋君著（三版）

定價三十錢 郵税四錢

我に初戀の佳人あり半生の苦樂を共にせんと心に誓ひしに、計らざりき、我を懐うて日夜懊惱、身神衰へ行く少女あらんとは。其人賢にして美、殊に振分髪の幼馴染なるに至りては、情緒いかで亂れざるを得可き、嗚呼都べての障礙を排して、清き初戀を保つは是乎。我爲めに不遇の戀に泣く人の情を受くるは是乎這般戀の惱みを描けるもの「野の花」の一卷とす。行文綺麗にして描寫精細

ふる郷
田山花袋君著（七版）

定價廿五錢 郵税四錢

ふる郷!!!一語直に我等の胸を衝いて、清き涙を落さしむるに非ずや。無限の哀思、無限の情懐籠りて實にふる郷にあり。花袋子獨得の纖麗の筆を以て此ふる郷を寫す。眞情流露、情緒纒綿、遊子一度び之を繙かば、まさに秋夜笛聲を聞くの感あらん

新式唱歌法
新版 東京唱歌學校長 酒井勝軍先生著

菊版總クロース製金字入 正價五十錢 郵税四錢

酒井勝軍氏は夙に音樂研究の志を抱き多年米國に遊學して歸朝せられ、専ら音樂普及に盡力せらるゝの士なり、今や多年研鑽の結果本書を著さる、説く處専ら米國音樂博士タアナア氏の最簡式に則り更に是れを我國人に學び易からしめんが爲めに取捨せられたるものなり、世の新しき音樂的智識を得んと欲するもの及初めて音樂を學ばんと欲せらゝ諸君には自修用として練習用として必要缺く可からざる書なり、又著者は本書にして過てる處あらば凡ての責任を負ひ音樂に關する一切の質問には喜んで應答すべしと約せられたり。

英語唱歌集
第三版 東京唱歌學校長 酒井勝軍先生著

菊版總クロース金字入 正價四十錢 郵税四錢

本書は英米諸國等にて愛誦せらるゝ興味に富める詩歌に音譜註解譯歌を附して専ら青年淑女諸君にして使用せられなば英語を學び品性を高潔ならしむるに於て益多かるべし備本集は専ら歐米に於て有名なる歌曲のみを蒐集せるものなれば彼地の名歌名曲は是に依りて其一斑を知るを得べし

東京市神田區裏神保町 上田屋書店

◀新學期開始▶
（第三期第一號四月一日發行）

新式獨習 英語講義錄

贊助員講師

- 東京帝國大學講師 アーサーロイド
- 立教學院總理 ウイリヤム タッカー
- 萬朝報英文記者 山縣五十雄
- 萬朝報英文記者 斯波貞吉
- 東京外國語學校教授 片山寛
- 東京通信學院長 松島剛
- 東京高等商業學校教授 高島捨太
- 學習院教授 山口造酒
- バチエローオブアーツ 阿部啓吉
- 開成英語學校長 星野久成

英語を知らざるものは時勢遅れなり、今の世に英語を知らざるは猶昔時いろはを知らざるが如し其不便不利益計り知るべからず、世間英語教授書夥しきも悉く變則にして實用に適せず或は學科の組織不完全にして毫も學力の進歩を期し難し、本會此時勢の缺陥を補はんが爲に秩序ある組織の下に學校に通學すると同等の効果ある最新教授法に依り**完全なる英語を教授す**躊躇する勿れ機會は再び來らず入學者には各科第二號を送る但實費として一冊に付き十五錢郵税を要す是れ本講義錄見本が他の雜駁なる講義錄に比して如何なる價値を有するかを最も正直に說明する者也

▲通信教授 會員募集▼

初等科 六ヶ月卒業

本科 一ヶ年卒業

何人にも解し易き言文一致体を以て初等科は少しも英語を知らぬ人の爲めに本科は中學程度學生の爲めに發音綴字、音讀、譯讀、文法、會話、作文、和文英譯、英文書翰等を開發的に教授し自由に英文を讀み英文を草し英語を話し得る程度迄教ゆ（月二回）

會費 初等科本科前納（一年四圓一ヶ年分二圓半）八十錢六ヶ月分一圓四十錢三ヶ月分七十錢一ヶ月分廿五錢外に入會金廿錢

會則 往復端書にて申込次第進呈本會の特色明瞭!!

東京麹町富士見町 大日本國民英語學會

（丙の一）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇社出版書目

東京京橋大鋸町十二　（振替口座第一二九七九番）

報知新聞記者　中村木公君編

卅九年實地精査　女子遊學便覽

全一冊並製　正價三拾錢　郵税四錢

△萬朝報評

都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正増補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば調査は善く行屆けり、尚ほ職業案内及學費の概算をも加へ、殊に無識にも東京遊學を鼓吹せずして、東京遊學の危險なるを説き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

鈴木秋風君著　彩色畫數葉入

小説美文　朝ばれ

全一冊本綴上製　實價四十錢　郵税四錢

「萬朝報」曰く　どれも是れも極めて溫雅な文體で女學生の好きさうな册子なり。「都新聞」曰く　いづれも短篇の小説ながら、著者が所謂寂寞の歴史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。「女學世界」曰く　新たに發行したる少女趣味の小説で何れも未だ浮世の荒波にもまれない青春の女の幽情を寫したものです。

諸大家選評

女子懸賞文集　（第壹輯）

全四百廿頁洋裝　正價廿五錢　郵税六錢

第壹輯（三版）

右賣切れ申候。追て第四版增刷可致候

河井醉茗君著　原色刷密畫入

詩と美文　玉むし

色クロス金箔入上製實價五十錢郵税六錢

△婦人世界評

醉茗君の筆のやさしさは、本誌の讀者諸姉が御存知のとてありませう。この玉蟲は君の美文と新體詩とを集めたもので、いづれも婦人のために書いたのですから綺麗なものばかり體裁もなか／＼凝つたものです。

小森松風君著　（女子文學全書第二）

言文一致文範

全一冊大判並製　正價四十錢　郵税四錢

△中央新聞評

言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論説、抒事、抒景、日記等數十編を示したり斯道研究者の歡迎を受くるものならん。

小森松風君著　（女子文學全書第壹）

美文作法

全一冊大判並製　正價四十錢　郵税四錢

△中央新聞評

本書は總論に於て美文の起源名稱種類を説明して抒事文、抒情文、抒景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小説との關係を述べ更に美文翻譯法漢文の素養讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳説したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし。

○直接特約賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
京橋尾張町　東海堂
日本橋吳服町　北隆館
京橋中橋廣小路　前川文榮閣
京橋鎗屋町　良明堂
神田裏神保町　上田屋

此社告は愛讀諸孃の精讀を望む

募集課目

第參卷より改定

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種　◎叙事文　◎抒情文　◎評論文（各半紙廿四字三十行以内）

◎短篇小説（半紙總かな付廿四字六十行内）　◎新體詩（半紙總かな付十句以内）

乙種　◎郵便用文（半紙廿四字詰）　◎和歌（半紙一首）　◎俳句　◎新歌謠（仝上）

◎短文（半紙かな付廿四字五行）　◎新笑話（半紙半分十六字詰）　◎圖畫（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの）

別種　◎文藝遊戯（半紙十六字詰）

◎誌友倶樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）　「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも課題は隨意▼

→（毎月十五日投稿〆切）←

獎學懸賞品

（品目改正す）

甲種

第一等　賞金屬品類……價格金拾圓
第二等　呉服物類……價格金參圓
第三等　小間物類……價格金八拾錢
第四等　便利の圖書切符……金五拾錢
第五等　同……金三拾錢

乙種

第一等　絹張洋傘……價格金五圓
第二等　帶止、半襟類……價格金壹圓
第三等　文房具類……價格金五拾錢
第四等　便利の圖書切符……金弐拾錢
第五等　同……金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ贈呈すべし、右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を明瞭に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期増刊年四回（二月、五月、八月、十一月の十五日發行））

		郵税共
一册（大増刊別）	前金拾錢	前金拾壹錢
六册（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同　前金八拾四錢
十二册（一年分増刊除ク）	前金壹圓八錢	同　前金壹圓廿錢
十六册（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同　前金壹圓六十錢

郵券代用は必ず壹割増

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法

此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年三月廿九日印刷
明治四十年四月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十一、十二番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂

女子文壇

第三卷第五號

（明治四十年四月一日發行）



花と文學

花のやうなとは有らゆる美しいものを比喩る辭に用ひられる通り、花は自然の美を代表して居ます、人生に文學と云ふものが無かつたら、人間の心が乾燥て了ふやうに、自然界に花が無かつたなら、何んなに淋しいてせう。然れば古今東西の文學と、花とは離れ難い聯想を持つて居ます、詩人て花を歌はない者は無いてせう、文士て花を描さないものは無いてせう、只さへ美くしい花は文學の力に依りて、其光輝を一層增しました、文學者の眼には美くしく見える計りてなく、其姿は優しく見える、其精神は善く想はれる、花に依りては貴くも感じられるのです。花はそれだけ人を感化する力を持つて居るのです、感想力の鋭い文學者が花に想を寄せるのは當然です、文學者てないまても、花を見て邪念を起す人はありますまい、花を見て醜惡を感ずる人はありますまい、女子の髮に花をかざすと云ふ事は、何時から始まつたか知りませぬが、誠に花の趣味と一致した好い考へてす、今後女子の髮の形は何う變るか知らないが、恐らく花をかざす事だけは變りますまい。男女何れにせよ、若き時代は人生の花てす、花に歌ひ、花に舞ひ、花に痛み、花に娯むは感じ易い人の常てす、感ずる者は幸福てす、花を見ても虛心平氣、何の感ずる處もないやうな人は、低級の人間と言はればなりません。」

明治三十九年花暦

志賀別川

●二月廿七日(火曜)　亡祖父遺愛の白梅、紅梅、山吹梅、全盛。

●四月七日(土曜)　知己凱旋の陸海軍將校(豊島榊原の諸將軍、吉田主計監、熊谷樺太民政長官等)を靈南坂の茅屋に櫻狩に招待す、落英地に滿つ。

●五月七日(月曜)　知己凱旋の諸將軍(大島、土屋、原口、山田、馬場、古谷等)を茅屋に躑躅狩に招待す、滿庭の躑躅花半ば亂落し、白藤花、時を得顔に開く。

●同　二十日(日曜)　群馬縣利根郡教育會の招にて同縣沼田町(利根川の上流)に赴く、小學校に大なる藤棚あり、紫葩累々として垂れ地上に臨まんとす、校長曰く方さに全盛の期なりと、市街の中央の一屋に金雀花、黄金を吹くを見る。

●六月一日(金曜)　三重縣立各學校の招にて津市に講演す、綠蔭滿目、梅子漸く大。

●同　二日(土曜)　關西水產業者集談會に臨み、會後和歌ノ浦に遊び、夕、知事清棲伯爵の招宴に赴く、途上の麥全く黄ばみ、半ば刈らる。大坂市に泊す、蚊帳の内に眠る。

●同　三日(日曜)　滋賀縣犬上郡長等(彥根町)の招にて琵琶湖畔に酌む、蓴菜盤に滿つ。

●同　六日(水曜)　霞ケ浦を過ぐ、煙雨空濛、蘋花寸寸。

●同　七日(木曜)　靑森市の公園に遊ぶ、紫白の藤盛んに開き、躑躅亦た全盛なり。

●同　十一日(月曜)　小樽の公園に遊ぶ、桃、櫻、山吹、菜ノ花、藤、桐、紫陽花、燕子花、牡丹、長命菊、金雀花、鐵線、藤牡丹、櫻草、コヽメ櫻、躑躅、パンジー等、紅白黄紫、濃淡猥籍たり、途上、賣花の女、未開の櫻を背にし「買はニーカニー々々々々々々々」と呼び行く。

●同　十二日(火曜)　コルサコフに上陸す、越年の內地士女、春の初めて來りたるを喜び、晴天に乘じて戶外に出て、或はコジアク(野胡羅蔔の類、東北人の食ふ野生植物)を採る者あり、或は溪畔に芹を摘む者あり、溪水には雪消け來りて涓々聲をなし、兒童三々五々、短き釣綸を垂る、獲る所は何ぞ、鮠兒にあらずんばヤマベ、兩岸の楊柳漸く煙を籠めんとして、雲雀時に一二聲。夕、山田少將の招宴に赴く、卓上に挿む所の花三種、曰く谷地欵冬(黃)、谷地芭蕉(白)姥百合(紫紅)。

●同　十五日(金曜)　アレキサンドロフスクを散策す、草方さに萠えて、露人畑を荒起しゝ、畑を圍める接骨木は僅かに其の白き小花を綻ぶ、正に陽帝の先驅たり。正午、ワルーエフ將軍の招宴に赴く、卓上に挿む所の花二種、曰く菫、曰く野生の燕麥、宴後、將軍の後園を散步す、和蘭マキ(紫)、蒲公英(黃)將さに咲き初め、グースベリー(白)も亦た漸く咲かんとす。黎明、午前一時半より起り、三時日出、午後九時日沒、十時黃昏點火、眞の夜なるものは三時間に過ぎず、殆んど全一日晝の感あり。

●同　十六日(土曜)　家僕長吉等を率ゐ、マーロ・アレキサンドル川に魚捕りに行く、叉手網にてキウリ魚十九尾を獲、露人プリサクの家にてフライにし晩餐す。夜、雨油の如く、點滴聲あり、瀟々として愛すべし、正しく春雨なり、春は方さに此地方に來りたるを知る、知らず草の萠ゆること幾寸ぞ。

●同　十八日(月曜)　夕、タランタス(露國流の乘用馬車)を驅り、アレキサンドロフスクの郊外に花摘みに行く、菫、蒲公英、毛莨、狼籍春錦の如し。

●同　廿二日(金曜)　クレーエ氏(獨逸鑛山技師)令息の招にてタランタスを驅り、カルサコフスコエに遊ぶ、垂楊靑々、楊花雪の如し、今日日沒午後九時半、千蔭の「靑柳の千筋の糸をうちはへて長き春日を織りや出せる」の句を想ひ起さしむ。

●同　廿四日(日曜)　長吉を率ゐマーロ・アレキサンドル川に魚捕りに行く、春水油の如く、兩岸の風

光壽に似たり。

●同　廿五日(月曜)　タランタスを驅り、ノー・ミハイロフスクに遊ぶ、沿道の菜の花全盛を極め、黄金を撒くが如し。

●同　廿六日(火曜)　マー・アレキサンドル川にヤマベ釣に行く、水畔黒百合の花、時を得顏に咲く。

●同　廿八日(木曜)　アレキサンドロフスク出發、第二アルコワに宿泊す、沿道春方さに半にして、燕舞ひ、頰白喜びて囀り、雲雀雲井に高く鳴く。

●同　廿九日(金曜)　ツイミ川を渡る、露領樺太第一の大河たり、春水悠々、兩岸に野生の燕子花亂開し、橋を渡りてデルビンスコエに入り、昨年日本兵站支部のありし家屋に入るや、庭内林檎の花、罌粟の花毛茛の花競ひ開き、人をして錦繡畵圖の中にあるの感あらしむ。

●七月一日(日曜)　霞淡く遠近の山を籠む、早天パレオ出發、羚鹿、霞の中より躍り出づ。八時、分水嶺を過ぐ、ボロナイ川(樺太第一の大河)とツイム川(第二の大河)の相分かるゝ點、正に全島を兩斷する處、山上臨望壯濶、眼下にはシアコタン松、海の如く、ボロナイ、ツイムの二水其間を曲折して銀を溶し、西にはオノール、東にはチアラの峯尖、殘雪を戴きて岬角の如くに松の海に突出し來り、實に全島の山河を掌上に收め得。

●同　三日(火曜)　午前八時、オノール出發、大雨淋漓、沿道の幌向躑躅、花濕ひて雪よりも白し。シュマウス(波蘭人の少年)縞鼠を捕へて贈り來る。

●同　四日(水曜)　グロデコオ着、露國委員本部を訪ふ、ボロナイ川に網して初鱒を炙り、晩餐を供せらる。

●同　六日(金曜)　夜、滿月皎々。

●同　七日(土曜)　日本委員本部の傍に畑を開き、日本より携へ來りたる夏大根、蕪菜、春菊、菠薐草の種を播く。

●同　八日(日曜)　夕、風露明淨、日本地形班に到る、星測量手、薄茶を煎じ、信州諏訪の初霜(氷餅)

を供せらる。

●同　十日(火曜)　パルイ(山火事)三面に起り、南方の火、日本委員本部の架設し丶電話線を燒き切る。

●同　十五日(日曜)　午後、ポロナイ川に泳ぐ、涼風陣々、爽氣骨に徹し、快甚し。夕、北極星、天に高く、蟲聲滿地。

●同　十六日(月曜)　パルイ、處々の密林中に起り、日本架設の電話線燒き切らる。

●同　十七日(火曜)　パイル、北東北、南東南、南西南の三方なる密林中より齊しく起り、瞬間時に延燒數里、先づ日本架設の電話線を燒き切り、五時半、第二天測點なる日露兩國委員宿營地を悉く燒き拂ひ、一同ポロナイ川左岸に避難す、日本委員本部は幸に延燒を免れたるも、炎熱赫灼堪ゆべからざるを以て、ポロナイ川に水泳に行く。

●同　十九日(木曜)　去る七日播付けし菜を初めて摘む、日本出發以來初めて嘗めし青蔬とす。

●同　廿三日(月曜)　日本よりの郵便物初めて來着す、東京出發後四十八日目なり、夜、眉の如き新月白樺の樹上に懸り、一味の新涼、天幕の內に諸知人よりの書信を讀む、グロデコオ到着以來の快事なり。

(つゞく)

花鳥

幸田露伴

よく世間で「花と鳥」とを並べて申しますが、如何にも其の愛すべきに於ては、甲乙はありますまい。しかし、鳥は翼があつて舞ひまして、その活動がまことに愛らしうございます、また聲を發して謠ひます、その聲が實に美しうございまして、そして其の活動のあり音聲のあるところが、人に大さう愉快を與へるのであります。然るに花は、鳥のやうに翼もありませんから、愛らしい活動もなく、聲を發しませぬから、美しい歌も謠へぬのでありますが、然らば、花は鳥ほど美しくも、愛らしくもないかといへば、否、決してさうではなく、その活動もなく、音聲も發し得ないうち

に、言ひしらぬ妙趣がありまして、われ〳〵は、その活動の無いところに、かへつて、大なる愉快を覺え、音聲の無いところから、大なる感得を與へられるのであります。

この活動のないものが、活動するものよりも、深い興味を與へ、音聲の無いものが、音聲あるものよりも、深い感を起させるといふことは、まことに不思議なやうでありますが、左樣いふ微妙な感じを感じ得るところが、人間の他の動物よりも進んで居るところでしやう。例之て見ますれば、彼の演劇のやうなものでも、或一部の人は、その極端な動作や、感情の非常に激動するものを好みますが、今一歩進んだ人達はさうでありません、かへつて極端の動作などの無い、人情の濃かな、所作の穩かなものに趣味を覺えます。また色彩などでも、或る人達、即ち未開の民族等は、色の極めて鮮麗なものとか、濃厚いものとかを喜びますが、猶一段進境に入つた、眼光の高い人は、矢張り色の配合のよく調和した、をだやかなものを好みます、刺激性の色ばかりを好みは致しません。それと同じやうに、花の靜止と沈默とは、活動し、音聲を發す鳥よりも、一層深くこゝろある人を感動させるものでありまして、言ひ換れば、其の靜止と其の沈默とが即ち無限の妙味のある所以です。

人の心意は、銘々異つて居りますから、庭前に咲きさかつてゐる花を見るにしましても、或は華麗なものを好む人もあり、或は寂しみあるものを愛する人もありますが、よくこゝろを留めて眺めますれば、花は靜止して居ても、無言でも、其の華麗なるものからは、それによつて活動とか、向上とかいふことを感じさせられますし、寂しみのあるものからは、靜思とか、修養とかいふ意味を敎へられるやうな氣がするではありませんか。柘榴の花を見た時と、蓮の花を見た時と、菊の花を見た時と、水仙の花を見た時と、各々異つた感じのすることは、爭へない實證のある事實ではありませんか。

然るにこの、靜止して居て活動があり、無聲にして音聲のある花を見て、何の感應をも生じませんものは、人として實に暗愚、不進化、虻にも蜂にも耻づべきものかと思ひます。花は非情のものですが、有情のものばかりが、人を導きはしません、非情說法の一話が昔から有るてはありませんか。

東西賞花の差

巖谷小波

花を愛するは、總て「美」を愛するので、之は東西通有である、日本では櫻を國花として愛し、佛蘭西では薔薇を愛すると云ふやうに、世界何れとして、花を愛せぬ國は無いが、其間に、東西自ら好尚を異にして居る。東洋では主に木の花を愛する、たとへば日本で櫻とか梅とか云ふやうに、支那人はよく桃李と云つて、桃の類や海棠の如きものを愛する、然るに西洋では之に反して、おもに草花を愛する。日本で草花と云へば。多くは秋草で、草花は秋のものゝやうに云つて居るが、西洋では四時を通じて草花を愛する。然らば野邊に咲く花は、如何いうものでも、折り取つて來て賞するのであるかと云へば、左樣でない、西洋には園藝の術が發達して居るから、草花の培養に非常に心を用ひて、人爲で草花を仕立てゝ愛翫するのである。其培養方法の行屆いて居ることは實に驚く可きで、日本でも梅や櫻を室咲きさせるが、西洋では單に室に入れて咲かせる而已でなく、或は花輪を大きく開かせるか、或は花の色を種々に變化させるとか、殆ど至らざる處なきまでに手を盡す、勿論日本でも相應に研究はして居るが、なか〱西洋のそれには及ばない。

又、花を眺める上に於ても、非常な相違がある、東洋……日本にも支那にも、花見と云ふことがあつて、花時に多人數打揃つて、花下を逍遙し、或は花下に宴を張つて花を賞する風習があるが、西洋では主に個人的に、花園を設けて眺めるとか、鉢に移し取つて樂むとか云ふ慣はしで、日本の花見のやうな風習は無い。生花の如きも其一つであつて、東洋では或る形式によつて花を活け、單に花そのものを賞するばかりでなく、花以外に其枝ぶりとか、全躰の姿勢とかを賞する。西洋にも勿論生花と云ふこともあり、彼の花籠の如きは、亦一定の方式に依つて花を挿むのであるけれども、大躰から云へば、多くは日本の投込みの如きもので其姿勢や形式よりも、寧ろ花そのものゝ愛らしいところ、美しいところを愛するのである。

其他、日常の贈答物の如きも異つたところがある、尤も日本では、藝人に物を贈るのを「はな」と云ふから、昔は或は花を贈つたものであるかも知れぬが、今は其

代りに金錢や物品を用ふる、然るに西洋各國では、藝人ばかりか常の人を訪ねる場合にも、日本で云ふ一寸した土産物のかはりに、必ず花を持つて行くと云ふ風である。猶、花屋でも、日本の花屋は、切り採つた枝ものばかりを商ふが、西洋の花屋では、單に枝ものばかりでなく、鉢物も賣つて居る、之は枝ものよりも永く眺められる上に於て、非常に好いことゝ思ふ。其他にも種々異つた點があらうが、先づ是等が著しいものである。

然るに、現今に至つて、東西兩洋の趣味が大に交換せられて來たやうに思はれる。それは、日本にも近頃は大分溫室が流行て來て、梅櫻の如き、木の花ばかりでなく、一般に西洋種の草花を培養して、愛翫する傾向がある、それと同時に西洋へも、日本から盆栽が行く、其外椿、躑躅等の灌木が澤山送られて、西洋人に愛翫されるやうに成つて來た。まだ花見などゝ云ふことはあるまいが、兎に角、追々東西の趣味が交換せられ、接近して來たことは、爭はれぬ事實である。

猶、文藝上より、東西花に對する思想の相違を見れば、東洋人の花の見方は、多く花その物に、何かある哲學的道德的の意味を附して解釋して居る。例之ば、梅について云へば、梅が寒中積雪を侵して咲き出で、凜とした芳香を放つのは、恰も高士の風があるとか、又櫻を見ては、其散り際のさつぱりして潔よいのを賞して、武士の最後も如斯ありたいと云つて、「花は櫻木人は武士」抔と云ひ、又、其盛りと見る間に直ぐ散り失せるのを見ては、人の身の上も、如斯果敢ないものであるとて、「骸骨の上を裝ふて花見かな」などの句もある。と云ふ風に、無理にも何か一種の深い意味をつけて、之を賞するのであるが、西洋では左樣でない、花にそれ〳〵、色々の名を命けることはあるが、此花は「愛」であるとか、之は「戀」であるとか、「嫉」の花とか、「操」の花とか云ふ風に、花に意味をつけたり、又花言葉と云ふものもあるが、東洋流の解釋、見解とは大分違つて居る。何れの國にも、花を謠つた詩歌や文章が澤山あるから、それ等をよく讀み較べて見れば、花に、對する東西思想の相違が、自らよく解るであらう。

精しく調べたらば、まだ面白いことが幾らもあらうが、これ位で置く。

筆者がこのお話を伺つた前日、巖谷先生のお宅では、丁度花のやうなお孃さまがお生れになりました。

不斷の美

小島烏水

むかしから美くしいものゝ三幅對を月雪花としてあるが、この中で月は三百六十五日見えるものではなし、雪は冬から初春に限られてゐるし、それすら南國の端へ行けば見られぬほどであるから、不斷の美くしさを示すものは花であらう。それに月の美くしさは物を幻にして見せる過去の如く夢の如きところに美がある、雪は山でも阜でも木でも家でも所謂白妙の衣を着せて別のものにしてしまふ現界を去つて別天地に人を逍遙させるところが美くしい。併し花の美は月に比べると明白であり雪に比べると複雑であり殊に此二者に異なるところは現實的であることだ、即ち人の住む土地で人の觀る花であるといふ感じがすることだ、それだけ人間は月に親しむよりも雪を愛づるよりも花に近づいてゐる。

花が咲くと蟲も來る獸にも調和する禽が飛べば益す好い、我が日本の自然はむかしから花が地界の明星として輝いてゐるので益す美くしいのである、春の野邊には蝶が飛んでゐる雲雀が鳴く、しかし菜の花が無くてみたまへこれら動物界の小公子もおそらく適歸するところを知らないだらう。狐や猪は獸として決して愛せられる性質のものでは無いが、狐亂菊の下に躍りと書かれると可愛くなる、伏猪の床とかいつて萩の花でも折り敷いて眠つてゐる猪には鐵砲も向けたくない、ちよろ〳〵水が流れても草花の間を蛇行する水なら舐めてみたいやうな氣がする。女性でも妾だの遊女だのといふと侮蔑されるが、緋桃や紅梅に配せられて句にでも讀まれると、濃艶な美が目に留まるばかりで品性上の惡感などは忘られてしまふ、茨でも薊でも花茨とか花薊といつてみたまへ「一花茨故郷の途に似たるかな」(蕪村)と懐かしくなり「石原や拗ねりしまゝの花薊」(白雄)と哀れを催うして來る。花は一切の美德也、花は一切の罪障を消滅させる、故城にも古戰場にも墓場にも花が咲くので初めて快い終局となる。余に花好きな友人がある、一人は旅順で銀行員を務めてゐるが、古戰場(過去は皆古しとせば)で摘んだ花を春信の中に齎らして「最後の審判」と題して來た自分はこの言葉を甚だ意味のあるものだとおもふ。

他の一友人は米國に七年もゐた男だが、この頃無聊に堪へずして歸つて來た、この男はおもにシアトルやモンタナやヲレゴンやあの邊の大平原に耕作をしてゐたのだが、何よりも淋しくて堪まらなかつたのは花の無いことだといふ、目を慰める草花などは一向にない、木の花には櫻があるが葉が目まぐるしくて（素とく實を採るのが目的なのだ）花などはどこに潜んでゐるかとおもふほどだ、日本の梅や櫻のやうに全樹花ばかりかとおもふのはあちらには無い、野に花がないから蝶の飛ぶのも滅多に見たことはなく、雲雀は英詩などでは讀むが、これも見たこともない、只だハムミングバードといふ殺風景な小禽が羽風を切つて空氣に動搖を起させてゐるばかり、これで倦殺されるといふ、花多き國に住む自分から見れば成るほどこれでは我慢がならないのも尤もだとおもふ。

吾人の祖先は花の中で悲喜の戯曲を演じてゐたのだ、梅には菅公や梶原源太をおもひ、櫻には八幡太郎や兒島高徳をおもひ、靜御前をおもひ芳野の行宮をおもふ、桔梗は明智光秀の興亡史を語り、黒百合は佐々成政の一代記を染めてゐる。洋の東西を問はず、日本ほど花と人間と絡んだ歷史を多く有してゐるところが各國のどこにあるか、英國に薔薇の亂といふのがあるが、これは赤い薔薇や白い薔薇を敵味方ともに記號として衣に着けたといふに止まり、花の莟の中から人が生れたやうな歷史は持つてゐない、そこへ來ると日本は花の國だ、花の一年中絶えたことは無い國だ、紋にも花を用ひ器物にも花を描く飲み物にも食ひ物にも花を離さない、木の葉までが雁來紅や紅葉のやうに花を欺くのがある、これも歐米（米國の一小部を除いて）にはまづ見ないところだ。

或西洋人が日本の花には香ひが無いと言つたから、自分は香ひが無くても蟲が多く來るのは花の色が美しいからである、日本の蟲が花の美色を愛でるやうに思はれるのは、嗅感で蟲を呼ぶやうな下等の花が無いからだと威張つたことがある、尤も人間と蟲とは鼻の感覺が違うに相違ないから、人間に匂はないでも蟲にはよく匂つてゐるのかも知れない、此頃昆蟲と植物の關係といふ本を讀んで見たが、西洋人の書いた本を飜譯したもので、花も蟲も西洋のものだから慊らなかつた、日本人も少しは自分の御手の物を研究したらよからう。

前に月雪花といつたが月は雪にも花にも調和する、蓬

嵯峨野の秋といへば花もあり蟲の鳴聲もあるが主人は月である、併し花と雪とは氣候が違つてあまり調和しなからうといふ人がある、成るほど日本で雪のある時分に咲くものといへば、室咲の福壽草は除いて、冬至梅、臘梅、寒椿、山茶花、水仙その他おそらくはいくらも無からう併しさういふ人に見せたいのは高山の花だ。積雪の下或は傍らに黄、紅、紫、白繚亂として氷魚の如く瑠璃鳥の如く活きて笑へる花は、雪に調和して美の極點である、夏雪草、雪割草などいふ名は自らを說明してゐる、凡べての花は歌にも句にも歌ひつくされてゐる、ひとり高山の花の殆ど凡べては歌はれてゐない、況んや雪中氷上の花をや。

これから「花の文學」で目を注けられるのは高山の花であらう、まことの「高嶺の花」はこれらのアルパイン、フラワアである、月夜高山の頂に嘯くと全く月雪花の三幅對美を全有することが出來る。

花に隠れて

横瀬夜雨

私の机の上には今梅が生けてある、生けてといふよりも花瓶にぶちこんだとした方が自然ですが、刺だらけの野梅の匂ひの無いのが一本、養老とて花は小さいけれど、密集して咲くし蕋が細な上に長いので、梅としては賑だ、も一つは豊後でせう、純白の花瓣に肉色の紅みが潮して、ガラス障子を透し來る日光に映つて、よく私の侘しいこゝろを慰める。

おとゝしまではすべての苦惱を忘るゝために花を培ひ養うて、友達仲間では、花守のうた人とも言はれました、草取の翁ともからかはれました、花を守るのぢや無い、藪を拵らへるのだとまで笑はれました、其頃はまだ十坪の庭を歩くには差支なかつたけれど私は翁と呼ばるゝやうに、人にも世にも遠ざかつて花に隱れねばならぬ運命を負うて生れたので御坐います。花を作る傍花の心を蝕む蟲に美しい色あるのも見ました、花に訪ひよる蝶や蜂や翅にかすかなる天樂の音を聽き、色に呉羽文羽の紋を交へて、うつせばとて人の手に描かるゝものでは無いのも見た。春は紫が多く、夏は紅いのが多く、秋は白く、冬は黄に、花は言はぬ美し人のかたちにも肖てると思ひました。それは多く草花でしたが。

万葉集には櫻の歌が少ない、梅と萩とが其一位に位してる、櫻かざしてけふも暮しつと詠むやうなのんきな大宮人よりも、旅なれば椎の葉に盛る飯をもめさせけん、上代のかざりを好まぬ人の心は、きつと櫻の濃艶よりも梅の淸楚を愛したのでありませう。

筑波は白い、鶯の來るにはまだあひだがある、たれこめてやがて春の徂くをおくる時よ、私にどんな歌が出來ますか。

植物合せ

文學士　枯林生

之は七人組合てする遊戯也、即ち左右三人宛に分れ、左の三人は紅葉、薔薇、櫻、右方は柳、菖蒲、松、一ッ宛を兩手に稍斜に互に持ち、自分の持てる植物のすぐれたる點を云ひ述ぶるなり。（皆椅子に腰かけ一組づゝ云ふ番の者立ちあがり、詞終れば判者のところに植物を持ちゆき、備へある花瓶にさすべし）兩方の云ひ分終れば、判者（一人）は之れに判詞を與へて優劣を定むるなり。遊戯の始と終とには一同禮をすること。詞はゆつくり明瞭に抑揚をつけて云ふべきは勿論なり。活人畵などよりは上品にて、觀者に文學的趣味を與ふること多かるべく、演者もまた話方の練習となりて益少からざるべし。讀者諸子試みられては如何。

○一番（左　紅葉　勝
　　　　右　柳

左　私は紅葉を好みます、千里のはて迄も澄み渡つた秋の空に、この葉の紅葉する樣は、まアどんなに美しう御座いませう、それ故昔から錦に譬へられて居ります、又葉であり乍ら花をも凌ぐほど歌や詩に歌はれて居ります、昔の詩にも『車を止めてそゞろに愛す楓林のくれ、霜葉は二月の花よりも紅なり』と賞めてあります。

右　仰の通り秋の紅葉は美しう御座いますが、植物て學びました通り、もと／＼霜に逢つて木の葉が枯れる前、云ひ換へますれば大方朽ちかゝつた葉なのですから、風が少しでも吹きますと、すぐさまバラ／＼と散つてしまひまする樣な心細いはかないもので御座います、ア、美しいと思ふ考から、すぐ今にも散つて泥

にまみれるのかと心配せられ、希望と申す樣な事は少しも御座いません。私のすきなこの柳は、誠に優しい植物で御座いまして、その芽ぐみ初める時の姿は何とも申し樣のない位、清い感じを私共に與へ、果敢ない思ひなどはなく、殊に風の吹くまゝに逆らはないところは、私共に大切な教訓を與へます。

左　柳の風に逆らはないと申す事は昔からよく云はれますことですが、これからの私共は、凡て柔順＝どんな風が吹いて來ませうが、何時でも風のまに〳〵身を任かせると申すことは、如何かと存じます、慥かりとした考はどうか持ちたいものと存じます、あなたは教訓と申されましたが、この紅葉も同樣の力があると存じます、紅葉の錦の美しさを見ましては、遊學の人々は、自分もあの樣な錦を着て故郷へ歸りませう、否歸らなければなりませんと奮發いたさないものはありませうか、又この紅葉が散り際に輝きまするのは、恰度人が立派な輝いた事績を遺した人が世人の稱讃を受け乍ら、永劫の眠につきまする樣に存ぜられます、人と生れました以上は、どうかこの紅葉の樣にありたいと思ふにつけ、私はこの紅葉が懷しく存ぜられます。

右　錦を着て故郷に歸ることを思ひ、奮發心を起すことは、紅葉を見て始めて起ると限りません、常々有名なる方に御目にかゝり、又は御話を承る時、扨ては歷史を讀みましても感じますることゝ存じます、又死際の美しさなどを考へますことは、私共にはチト早すぎますことゝ存じます、私共の境遇は、過去を忍ばず、未來を思はず、この現在をつとめ勵み怠らぬ樣に心掛けねばなりますまいと存じます。

〔判者〕今左の方が主義のない柔順は好ましくないと申されましたそれも一理あることゝ存じます、ては、御座いますが、近頃の女子の好ましくない風潮から考へまするとこの柳の柔順を手本にせよと申したい樣に存ぜられます、人はともすると從順をかき、凡ての事が程よくまゐりません、殊に、私共女子にはこの從順と申すことは、是非養はねばならない德で御座います、私はかういふ見方から、美しいはかない左の紅葉よりは淸らな素直な柳を勝と致します。

○二番（左▲薔薇　右▲花菖蒲）　靜

左　櫻の花は日本の花の王、牡丹は支那の花の王

と、とり〲に賞美せられて居ますが、共に香が少しもありません、かう考へますと、東洋の人は五感の内の一つがないのかとさへ思はれます、凡て花の品評を目に許し委ねることは、穏やかでないと存じます、目にも鼻にも他の花よりまさり缺點のないのは、この薔薇と存じます、西洋で花の王者と申して居ることは尤のことゝ存じます、ほんのりと薄紅の花の奥に深くこめられたゆかしいこの香は、誠にくらべるものはありません。

右　バラは西洋の花です、これこそ花の王者と、敷島の目出度い櫻の花をおとしめられた御心の程は御同意いたし兼ねます、バラは香も姿も結構では御座いますが、それにはとげと申す恐ろしい針が、花のすぐ下に澤山隠されて居ります、それ故西洋の詩にも、このバラを心ねぢけた美人にたとへ、その美しさに迷はされ針の爲に傷つく勿れと誡めてあります、誠に恐ろしい針‖いくら色や香がすぐれて居ましても、その様な針があつてはゆかしく御座いません扨て私のこの花菖蒲は、香はありませんが、いろ〱の美しい花の數數咲きそろつてゐる有様は、繪も及びません位そしてその葉の緑とうつりあつては、まアどれほど夏の始の青々と單調な景色を飾つて居りませう、これと申して特にとりたてゝ申すふしもありませんが、バラの針などの缺點のなく、池のほとりに靜に咲きそろふ有樣は、極めて穏やかで淸らかな趣があります。

【判者】花菖蒲は穏やかな美しい花ですが然し私は針と申す缺點があるにも係らず今はバラを勝といたします、私は西洋にかぶれたのでは御座いません、又左の方の樣に針をわざと認めないのでもありません、否、針のあるといふことは、右の方の云はれた樣に大層な缺點と存じますが、然し、今私は勤勉注意といふ點に就て考へて見樣と存じます、御承知の通り栽培の上から見ますと、この二つの花を咲かせます上に就ての難易は明かで御座います、菖蒲を是程に咲かせますするにはそれ程困難では御座いませんが、バラをこれだけに咲かせますには、非常な勤勉と注意とが入るので御座います、バラにはともすると蟲がつきやすく、中々栽培に困難で御座います、私は思ふ處があり、栽培上の勤勉注意を要する點から考へまして、このバラを勝といたします、但し勤勉注意さへすれば針があつてもよいと申すのではゆめ〱ないので御座います故、誤解のない樣

御くみ取りの程を願ひます。

○三番（左▲櫻 持 右▲松）

左　今更申す迄もなく、櫻は大和心にもたとへられます位氣高い武士の樣な花で御座います、まことに我國の名花で御座います、日本人である以上は、この花を愛し慕はないではすまないことゝ存じます。

右　櫻は誠に花やかな木で御座います、然しこの松は常磐の色をかへないと申す處から、昔より千歳の松などゝ御目出度い例にもひかれ、又實用の上から申しましても、櫻からくらべますと大層世に益を與へて居ります。

左　松の常磐も結構ですが、しかし植物で學びましたには、その常磐と歌はるゝ緑の葉も常磐でなく、春には新しく改りまして、その替りかたが巧なので人に氣づかれないとの事です、この樣子は人を欺くとおもへば思はれます、それに反して、櫻は花も葉もよく時を知り潔く散る樣はサッパリといたして居ります、又長閑に晴れわたつた春の朝、ほの〳〵と朝日ににほふ山櫻の樣は、やさしく氣高く、眺めて居りますと、ウットリとなる心地が致します、女子にもこの樣に潔く美しく氣高いところを仰ぎ倣ひたいと存じます。

右　つい申すことがあとになりましたが、松の操と申してこの松は昔から節操の堅いのにたとへられてゐます、節操と申すことは殊に私共女子の身に大切なることゝ存じます、あなたは先程櫻を愛しないものは日本人でないと申されましたが、この節操をあらはして居ますする松を尊ばないものは、女子と申されないと存じます。

〔判者〕櫻も美しい氣高い木で御座います常磐の松の操もゆかしくめでたいことゝ存じますこれはとりどりによい處が御座いまして優劣をつけられません故持といたします。〔左右着席〕

扨て私は皆樣に御願が御座いますあなた方はこの學校に學びの業をいそしむ上は先生樣方のあつい敎訓をあけくれ守りこの柳の樣にやさしくすなほでこのバラを育てる樣に勤勉で注意深く扨て心の美しく氣高いことはこの櫻の花の樣着實で節操の堅いことはこの松の樣に御心掛の程を一重に望みます。〔終り〕

●注意　判者の詞『扨て』より、判者は注言を與ふる時植物を手にて捧げて『この柳の樣に』『この櫻の樣に』と力強く云ふべし。

燈火の花

伊良子清白

夕間暮いぶせき晝の
はてに咲く燈火の花
一つ立ち二つ雙び
千々にまた遠く連り
香も細く波漂はせ
闇の海根をこそ絶ゆれ

沈みつゝ浮きつゝはるに
その花の花瓣ゆらぐ
夜の神快樂の家に
摘みためぬ色美き花を
いぶきしぬ圓かに闇を
花の露外にしたゝるか

また咲きぬ涙の家に
低首れて色褪せし花
ほの／＼と花片けぶる
その花のわなゝく毎に
蒼ざめし死の息通ひ
すさみ行く望の光

惡の家花穢に咲きぬ
黑鈍のめぐりを纒ひ
蝕みにひそめる花は
執の色あくどくにほひ
蛇の髮漂ふ莖を
力にて廣ごり浮きぬ

かくて闇波いと高し
なべて花底ひにかくる
凛らへる曉の風
冷やかに香りを誘ふ
花消えて人醒めはてぬ
求めつゝ垣根を繞る

東京だより

▲滿都、櫻に埋もれる頃、本誌は花に埋もれた▲櫻と言へば上野、向島を褒めるが、向島の櫻などは盛りになると、塵埃やら櫻やら廣告やら分らなくなる、眞個に東京の櫻を褒めるなら、市中何處へ行つても櫻が咲いて居るのを褒めねばならぬ▲山の手などでは家賃七八圓の家にも一抱えに餘る櫻が幾本もある事は珍しくない▲夕月の光、ほのかに匂ふ頃、西片町とか矢來町とか靜かな邸宅町の生垣の外を通つて居ると、何處からともなく櫻の花がひら〳〵とこぼれて來る、此時山の手生活の趣味は遺憾なく發揮されて居る▲櫻の花漬を湯にして出された時、花も食て了うものか何うかとは或る人の疑問であつたが、櫻餅を葉ながらムシャムシャ食たのは田舍者の滑稽談▲櫻草は荒川の上流に多い、緋櫻、鬱金櫻、楊貴妃櫻、牡丹櫻なども荒川の上流に多い、東京から三里以上歩く覺悟をせねば行かれない▲「親は他國に子は島原に、櫻花かやちり〳〵に」と云ふのと「咲いた櫻に何故駒つなぐ、駒が勇めば花が散る」と云ふ二つの俗謠は、櫻と共に何時までたつても趣味がある▲東京の各女學校も新學期が始まるので生徒を募集して居る、櫻の花の咲き散るのを見ても、若い時代の過ぎ易い事を覺り、早く學校に入るやう支度せよ、時は一刻も待たぬ、是からの女は普通の學識が無ければ對手にされない、何よりも急いで學校に入ること▲人間一生の中で學校生活の間ほど愉快な時はあるまい、社會からは何等の抑壓も交渉も受けない、只理想ばかりで持切つて、現在は勉强さへして居ればいゝのである、それは中には學校生活を苦痛に考へる人もあらうけれど、其んな女子は世の中に出ても役に立たぬ、學校生活を愉快に送らないて、人生の愉快な時代を何時に求める事が出來やう▲併し學校生活を愉快ならしめる爲に、凡ての事を學校にかこつけ、家庭に於ては無責任の人となつて了うても困る、兎角諸孃の間には然う云ふ見解を抱いて居るのもあるらしい▲近頃の文壇は餘り目ざましい事もない、只詩集の出版に夜雨の「二十八宿」白羊の「さゝ笛」胡夷の「湖畔の悲歌」などあつたのは嬉しい、夜雨は四月中旬、出京の噂がある▲高須梅溪は先月七日大坂に於て結婚した、新夫人は音樂學校の出身で深田直子と云ふ。

編輯一言

本號は特に陽春四月の雜誌として、本欄にも諸名家の花に關する文章又は談話を特に請ひ受けて載せることにしました、諸孃も幸ひに本誌を花吹雪する櫻の陰に樂しくお讀み下さい。

懸賞當選圖畫（五）

山中古洞先生選











(1)阿蘇鮎返りの瀧（二等）　熊本縣　岡本篤子

(2)寄宿舍（三等）　麹町區土手三番町一番地　淺井千鳥子

(3)あみもの（四等）　京都市西陣紋屋町　濱部郭公女

(4)飴屋（五等）　牛込區高田早稻田農園横　岩谷綠子

(5)冬（五等）　本郷區森川町二十番地　增田小富

敍事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等 ○まつまの心

鳥取市鍛冶町五七 上山千重子

春とは名のみ、またも催す雪模様、かくては脊戸の梅の折角笑つた花の唇もいたづらに凍るだらうと、破戸叩く玉霰に心細さのやるせがない、それはさうと、父様はいま時分までいづくを如何にさ迷うて居られる事やら、いつもながら此の寒空にと氣にもかゝる、母様の歸りもおそいこと。しばしまつまの手ずさみにと、縫ひさしの片袖取りあげたが、氷のやうに手が冷えて、ともすれば針を落しさう、やつと裏だけ仕上げた、それをかたへにおしやり、皺のよつた小褄を一寸おさへて、其まゝ土間に下りた、夕食の支度をせねばならぬ。生々しい薪の煙たさをこらへて、幾度か火をつけなほし、ほつと安心した、折柄からころと表に足駄の音、やれ母様の御歸りかと耳をすますと、がらりどたりと破戸の調子の惡さ「アイ私があけてよ」と飛んで行くと、ぬつと出た胡麻鹽頭、横町のお熊といふ口入婆、お母様とは似ても似つかぬ。「オヤ菊ちやん、はゞかりさま、相變らず御精が出ますね」、にやりと齒莖を見せて、私の頭から爪先迄スーと見廻す、氣味の惡るさつたら、ついお上りなさいとも言ひ兼ねて佇むで居ると「阿母は留守かね」と一間を覗く、「アイ」とうろ／＼「御免なさいな竈の火が……」、やつとの思ひでのがれ、ブー／＼と火を吹く。婆はかまちに腰を下して煙草一服、どうやら母様のかへりをまつらしいに、こは／＼澁茶をすゝめ、また元の竈の前、何でまあ此頃あの婆のよく出入すること、如何した譯かと思ふと、何かしらず身慄ひがして、母様の御歸りがまた案じられる。

（評）淡々乎として殆い哉。

四等 ○寂寥

靜岡縣藤枝町 わか菜女

利根川べりの沼近く半日の野遊を試みた時であつた、はてしもない沿岸の芒原の上に、紫

の遠筑波が浮んで、ゆるく銹のある欸乃の起る毎に、白いゥの字の上下するのを見やつた僕は、そゞろに畫想の動くのを禁じ得ないで、下手ながらもひとつ、すきな寫生を試みやうと、ブック片手に、あちこちと塲所を選定して居ると「ヨイショ」、聲と共に靜かな沼水に寫つてゐる筑波峰の影を亂して、枯葦枯芒の間に、舳を漕ぎ入れた端艇があつた、乘せて來たのは四十あまりの女の客で、毛の薄い櫛巻に格子縞の袷、白粉やけに黒ずんだ細面を、●●●犇とあはせた紫紺のショールに埋めて、ピョイと汀に飛び下りさま、「夫ぢや船頭さん、與作の家は慥かにこゝだね」とそばの四つ手の小屋を指ざして、念を推して、すた〳〵と堤を登つて行つた、僕はこゝらあたりに見馴れぬ人と思うたが、深く追究する必要もないので、直さま寫生にとりかゝつて、新らしい寫生帖に熱心に、縱横の曲線を塗つて居た。すると餘ほど經てから耳元で「夫ぢやお父さん、お前もからだを大事にしてね……」と涙ぐんだおろ〳〵聲、ハテと僕は頭を上げてそこらを熟と見廻はすと、少し離れた堤のかげに、六十餘りの老爺と十三四の小娘と相擁して蹲踞んで居た、薄い初冬の日脚は此時やゝ黄昏れて、ボーッと夕靄が袱つて居る上に、僕との間には夥しい楊樹が密生して居たので、ふたりは僕のこゝにあるのを氣付かぬらしい、が、僕の方からは能く見え、聞えた。

「こんな事にならうとは夢にも思はないで、籍をもつて來て置かなかつたのが此方の手落だ、あゝ出られちやあ仕方がねえ、辛からうがお谷、ちつとの間奉公を爲て呉れ、そのうち屹度えいやうにするからな……、あーあ四つの年から手しほにかけて、婆さまにも逝かれた今日になつて寢耳に水の取戻しの談判をうけやうとは思ひも寄らなかつた……、だがのうお谷、お前の母様だが、あの女はおつかねえ人だ、奉公と云つたつて、どんな所へ連れて行くかも知んねえ、もしちつとでも解せねえと思つた事があつたら、假字でもえいから端書に書いて、この爺さまにさう云つてよこせよ、よし己れや斷食しても旅費拵へて迎へに行くからな、よしか、分つたか、分つたらはや行けよ」、噛てふくめるやうに云つて、やをら立上つた親爺の老眼からは、幾條の涙が溢れて皺深い頰をつたつて居た、娘はたゞもう顏をも得上げないで、忍び音にないぢやくつて居たが、纔てやう〳〵涙を收めて「アイ、ア…イ」、悄然と立上つて、携へたる小風呂敷包のゆるめるを結び直し、「ぢやあもう…お父さん…」、「ウム、達者で暮せよ」、耐へかねたやうに、袂で半顏を掩うて、娘はとぼ

とぼと行きかけたが、急に振返つて「お父さん、きつとぢきに迎へに來ておくれよ」、聲は腸を絞るやうであつた、途端、不意に習の小屋から人影が動いて、「まだ、往かないんだね、何を愍圖々々して居るんだよ」、嚙みつくやうな一喝をあびせたのは、かの端艇で來た女であつた、ハッとする拍子に娘は石に躓いて、よろ／＼と仆れやうとしたが、危く踏こたへて、其儘堤を下つて行つた、枯葦枯芒の間から、少時紅い帶がちら／＼、隱れ見え、見えかくれして居たが、聽てそれも、たそがれの色にまぎれて了ふと、老爺は伸び上つて「お谷よう、お谷よう」と呼んだ、するといと幽かに「アイヨー」と應へる聲がしたが、みたび老爺が「お谷よう」と呼んだ時は、はやよほど遠ざかつたと見えて、風に靡く枯すゝきの音のみざわざわとひゞいて、嗄がれた聲音が、空しく四圍の寂寞を破るのみであつた「あゝ到頭往つて了つた」と親爺は力なげにがつくりと首うなだれて、さびしげに小屋の方に、踵を向けるのであつた。儂もそこ／＼ブックを收めて、夕暮の色につゝまるゝ此沼べりを後ちにしたのであるが、いはうやうなき一種寂寥の感に打たれて、はからず眼前に生別を見た親子の上に、ひとごとならず祝福が祈らるゝのであつた

（評）養父のなさけ、生母の無情、相對して正に好箇の悲劇。



春の海　山城　ゆか子

【五等】

○戰ひのあと

岩代須賀川町　服部水仙子

「オヽ寒む！」と誰やら。冴え渡つた月の夜の敷石に、駒下駄の音カラコロ。「さよなら！」「左樣なら」「や失敬」「失敬」門の前から二手に別れて、小石を叩く洋杖の音、規則正しい靴の鳴り。それもだん／＼と遠くなつて、一しきりの笑ひ聲が響いたあとは、もう全く聞えなくなつた。

送り出た玄關に月の影寒う、どこかの犬が頻りに吠えてゐる。何となく氣が拔けたやうな體の、足は向くともなしに今の十疊へ。取り殘された火鉢が五つ、いづれも皆卷煙草のからがまるて林のやう。其一つを抱へて、頭痛するとて一座にそむいた文雄さまが、頻りに灰に書いて居た字は何であつたか。火は皆形のまゝ白くなつてゐる。

重なつて、頽れて、横に縦に、亂れた歌留多に、盃を飛んだ南京豆のからがところ〲。堆き密柑の皮を越えて向ふに一つ横はつてゐるのを手に取つて見ればこれやこの彈丸。花々しかつた戰ひの面影は、私ですよいや僕のだの爭に、身を犧牲の裂札二枚。

「はいよ！」味方の連戰連敗に日頃の負け嫌ひを、眞白な頬に赤く現はしてこゝを必死と奮戰の、富子さまがあの凛としたお聲。まだ此耳に殘つてゐる。

さては破れ鐘のやうな聲はりあげて、讀みあげては、一度にどつと笑はれて、すました顔の北村さま。まだ目に見えるやう。

茶の間の時計はチーンと一時を打つた。

淋しいあたりを見廻して、迫つてくるを覺えた寒さに、手近の火鉢をひき寄せようとした手先にカチリとふれた近眼鏡、一見して私は北村さまのといふことを知つた。鐵縁であるから。一寸かけて見ると、あたりのものが小さいやうな、大きいやうな、少しも判然としない、こんなものをかけて見えるのか知らと立あがつて見たが、疊の面がでこぼこして、なんでも無いところをまたいだりする。そうだ此眼鏡をたゞは返されない、何ぞ趣向もがなと、一人で笑壺にいつてゐると。こちらに向いて來る足音が‥‥と思ふ間もなく襖をガラリと兄樣がお顔。「やあ‥‥‥はゝゝゝ何だ其顔のざまは‥‥‥」さう、私はまだお白粉の傷を洗はなかつたのでした。

（評）作者はこれ一方の旗頭。

（又曰）灰に文字書ける人の、形の蒼白うなれる火鉢の火の如く、消え失せたるは如何。

秀逸

○宿がへり　筑後　しのぶ子

奥樣のお羽織縫ひ上げて、ちよつと、手を火鉢にかざして居ると、私の名をお呼びになるお聲、私は急いで、お部屋に出ると、いつものやうなお優しいお目に、チツト、私をごらん遊ばし、「うれしいだらう」とのお言葉私はまだご奉公申してから間もないので、何と申し上げていゝやら！　モヂ〲して居ると、「オホヽヽわからないの、あすはうちにいつてたんと母あさんのお乳おあがり！」とのこと、私は始めて宿がへりのお許がてることゝわかりました。

私は嬉しくつて〲、もう心はあの戀しい田舎の家にいつてをります。あけの朝はいつもより早う目がさめお部屋〲のお掃除しまつて、お暇乞申してお屋敷を出たのは彼是十時？

本通りに出るまでは、まるで夢中、いつもゆかしいお琴の音、なづかしいお調、と足緩う通る花野樣のご門

前も、今日は知らずに通りすぎて居りました。

あゝ母あ様にはあのお餅、健ちやんには小倉緒の下駄にコマ、鈴ちやんには紅緒の下駄にゴムマリ、この五品とり揃へていそ／＼家路に急ぎました。

麥田の向うに見えるあの高い杉の木の下が私の家!!なづかしい家からは烟が立登つて居る。もうお晝のご用意かしら! 土橋まできますと土堤の上には弟妹が摘草して居ます。わざとコッツリいきますと早くも見つけて姉えさん!!と兩方からすがりついて、これ何? これ何? 私はふたりから手を引かれ門口まで來ますとお母あ様は井戸端でお野菜洗つてゐらつしやいました。お喜びの色はお顔一ぱいにあふれて、「よくおいでだね」といつて下さいました。私は理由も無く涙がこぼれてごあいさつの言葉も出ません大方嬉し涙でせう。内には入りますと、もうふたりは内中かけまはつてヤア僕には下駄とコマだ、あら、あたいも下駄とゴムマリよ………………。

私はお母あ様にお手傳しようと思つて井戸端に出かけますと、日當りのよい南椽には、もう可愛らしいマリ歌! 今日の中に私は二寸も背が高くなつたやうな心もちがしました。

（評）母親の眼にはなほ更。

○夕暮

麻布　露野たま子

長閑なる春の日が、今しも中山の嶺にかくれたばかり。オレンヂ色の横雲が三條許り長く、金山から富山にかけて流れてゐる。遠く城山の絶頂に、一つ目立つて高く聳えてる天狗松は、浮き上つたやうに見えて、萬成峠のさきの方は、日向と日陰と斜に線を引いて分かたれ、近く萬頃の青田を此所彼所と點綴して居る黄金の花畠は、殘こんの夕照に射られて色愈鮮かである。

眩ゆき許りなるこの夕暮の景色を樹立の間から眺めながら、鎮守の森を通り抜け、右に曲り藪陰にそうて少行くと、一つの小川がある。そのまさに土橋にかゝらんとするところに。小さな藁葺の破屋が楠の大樹の茂つた枝の下にかくれて、しよんぼりとたてられてる。

今し妾が此前を通りかゝつたその時に。「喧かましい」と邪見に叱つたのは父親らしい聲。重ねて「うるせえ外へつまみだせッ」と叱る聲、つゞいて吐息するらしい、又もやグビッとあふぐ濁酒一杯。叱られてさらに聲を上げて泣きだしたは、まだ乳ばなれもせぬ子らしい。

「芳坊は可い子だから泣んぢやないよ。お母アは今にかへつて來らあ。迎へに行かうかなア」と、泣く子を背にして出てきたのは、七ッ許りの可愛い娘。程もなう背の子は泣き寢入りに、すや／＼と眠り始めた。

娘は誰れにいふともなしに『お母アは今日で恰度三日、父親と喧嘩して出たぎり、かへつて來ない。それから、父親はお酒飲んでばかり。時々吐息しちやア、こんな罪のない可愛い子供を二人も殘して初の女奴ア勝の野郎と……、妾にや何んだか譯がわからないが。それにしても何故、お母ア歸つてこないのだらう、妾や芳坊は可愛かァねえのか知らん』と獨語て泣いてる。

『オイ、お咲、う……家にこい、か……風にあたるなア、よ……可かないや』酒で舌はまはらないが、どこともなく親の情がこもつてる聲だ。

あゝ、こゝも浮世の風には漏れないかと、家にはいつた娘の後姿を見送つて、われしらず哀れを催したのである。

折しも中敎院の鐘の音はゴーンと遙かに響いてきて、胸をこそぐつて、いづれへか消えゆく、かと思ふと、月は兒守山の頂にどんよりと昇りそめた。

（評）苦悶を酒に忘れんとしつゝも猶且つ親の情を忘れず、懸絶。

○春の野　神田　長井漣月子

春雨名殘りなく晴れて、朝日はうらゝかに、妾に乾した傘から、湯氣が立つてゐる、好い天氣にさそはれて、葦が原を逍遙す、行手には陽炎ゆら〳〵と、もえて見る目ちら〳〵と、霞みかゝれる春の山は、ゆれてゐる、向ふの大原山は新綠の香高く、山容嚴然と聳え、白雲の切れ〳〵の一つ一つが、そこから湧き出て、紺靑の空を南へ、八幡の森の上に、かくれる、柔らかな春草をさく〳〵と踏んで行く中に、さら〳〵と、やさしき音を立てゝ流るゝ小川がある、底の水苔は絶えずゆれて、水すましは川底に淡き影をうつしてゐる、小さき蟹二三匹、ぐつ〳〵とあはをふいて、石の下にかくれた、水に映つて居る白雲が、ゆるう川を遡ぼる。遙か、上流の森かげに水車はまはつてゐる、其あたりから、長閑な牛の聲が聞ゆる計り。

馬を引いた女馬子、白手拭て頰かむりして、小さい辦當の風呂敷包みを右の肩から左へ、馬は春草の芳りに脚遲さを、引きつゝゆく、黑蜂一つ、ブーンと、かたへの草むらからとんだ。

（評）詩歌觀妙。

○血染の雪　霞湖畔　芳香子

夜來よりの六花、未だに霏々として舞ひ、紛々として飛び、頻りに滿都の俗塵を一掃してゐる。

時は陽春三月上巳の節句、流石に時めく大老の登城、警護の武士も數百人、威風あたりを拂つて堂々と繰り出す途次……。

駕籠脇近く訴狀を捧ぐる百性姿の十有七人……。

發止……かなぐり捨つる笠と簔。意外！何れも殺氣滿々たる武士……。紫電一掃、雪中に閃く銘刀！討つ、切る、蹴る。忽ち替る叫喚の修羅場……!!

＊　＊　＊　＊

あゝかくて櫻田門外の雪は紅點々。

（評）寸鐵人を刺す。

○日の出

福岡　梅の花

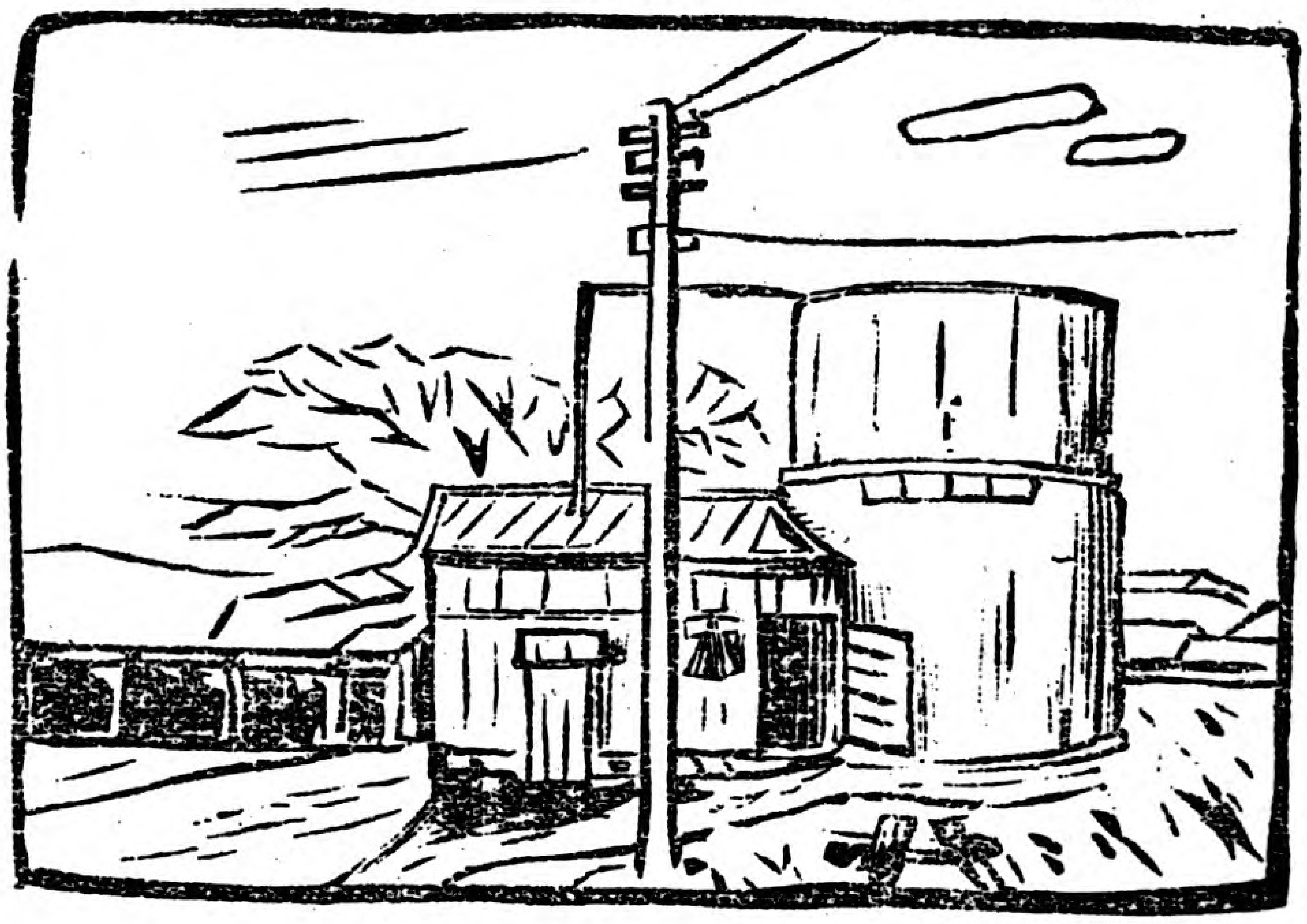
曉の明星已に落ちて、黄金の弓の如き月痕天心に殘れり。天も、山も、川も未だ眠より覺めず。唯蒼々たり茫々たり。

東に連亘せる寳滿の餘脉には、巨蟒の如き黒雲長く尾を曳いて、南へ南へと躍り來り、山巓に至つて頭忽ち千切れ、飛び、崩れて、蓬々と擴がりて見ゆ。なほ餘波蜿々と蟠りたるが如きもの一團、忽ち巨象の如く起ち、忽ち鰐魚の如く横はり、惡鬼の怒れるが如く、美人の舞へるが如く、刻々其形を變じて而も容易に潰えず。寳滿の嶺南に頽れて、日昇ると覺ゆるあたりは、朱黄色に燃え、次第に黄色に匂ひ、愈距りて澁く爍りたる赤色となり、而して濃き孛藍色の空に融けたり。

東天愈燃えぬ、寳滿の中腹に瘤起せる一角に、淡き灰白色の雲一片懸るよと見る間に、忽然靈魂の入りたる如く赫焉として燃え、くる〳〵〳〵と旋轉して火焰の如く騰昇し、散り、飛び、而して消えたり。黄金の弓と見し月は、白銀の弓とかはりぬ。夜の色は東の空より次第に剝げ、鷄、鴉の交々鳴く聲聞えて、山覺め谷覺め、森覺め、藁家覺めたり。されど見よ。背振の一帶猶瞼を開かず、淡紫色の靄に包まれて夢未だ覺めざるなり。

一秒又一秒、一分又一分、照り出て照りまさりて、東天倍々燃えぬ。寳滿の嶺に彷徨へる灰白色の雲一團、

戲畫　福井　水蝶花



見る〳〵血紅色燃えぬ。と見る間に忽然金光の征矢さと射りて、驚破……。

日出でぬ。日出でぬ。金線は忽ちにして黄金の櫛となり、黄金の櫛忽ちにして金蹄とかはり、きら〳〵、きら〳〵と一團の白玉は、神が手もて擎げ給ふ如くに山を離れぬ。天も、地も、山も、川も、森も、家も、木も、草も、此平和なる郷の總べてのものは皆、全く眠より覺めたるなり。

稻の上に、我が十丈の影の橫はれるを見る。

（評）蘆花子の文にて見たるやうなり。

○春風の宿　　鳥取縣　門脇まさ子

小犬は尾をぴり〳〵動かしながら花吹雪を浴びて逍遙つて居たが、梅の太根のあたりをそつと嗅いで、足を伸した。

門口の柿の木から庇へと日向をよつてかけ渡した、かけ竿に赤い着物が二三枚春風に飜つて居る、婆さんは腰を伸して釣瓶竿を提り、ザアと水を盥のなかにうつして、かゞむで、ポチャ〳〵と洗濯をし初めた。

日當りのよい竹椽には笛や太鼓や繪本などが散らかしてあつて、櫻の花の赤いのが其間に散つて居る。

薄暗い小屋のなかで牛が泣きだした、二十餘りの女が白い手拭を姉樣冠りにして、赤襷で小屋の入口に坐つて、藁を叩いて居たが、ふと思ひ出したやうに立ちあがつて、着物の塵を拂ひ、背緒の下駄を輕げに打かけ、右の手に鎌を持ちながら井戸端に行きて、纖やかな手に水をかけ、砥石を洗ひ、少しかゞみ氣持になつて、鎌を研ぎ〳〵婆さんと何かひそ〳〵話を初めた。

座敷の中で急に大騷が初まつて大抵五ッ六ッ位な男の子が三人、障子あけて椽側に出たが、銘々に笛や太鼓をもつて樂隊を初めた二人は嫣然して居る。

馬子が一人、菅笠を冠つて少さな聲で鄙歌を歌つて通る、續いて柴負うた男が一人、尻をはをつて、咬へ烟管に煙を吐きながら門口に彳んで、一寸空を仰ぎ、「暖うなつた」と獨言の樣に云つた、二人は同じ樣に振りかへつて「おや、もうかへつて……」と逞しい男の顏を眺めてほゝ笑んだ。

子供等はにはかにひつそりとして、柿の枯枝に鳶が一羽だまつて羽根を休めた。

（評）天下泰平、五穀豐饒。

○里の小川　　岩手縣　紅月女史

里の小川ほどあやしきはなし、幅狹けれども廣き大空を浮べ、底あさけれども遊ぶ子供の影をうつす、淋しき村の片隅を、流るゝといふほどもなき流れなれば、元より名などあるべくもなし、さばかり細き流れなれども道のまに〳〵うねり行きて、少しもさからふ姿な

きは幼な子供の鑑とやいふべき、さゞ波といふほどもなき小波、親しきさまに打ち連れて、汀を洗ひゆく様笑ふが如く、語らふが如し、春は菫を岸にやどし、秋は妻よぶ蛙をあはれみ、夏の日なればとて涸るゝことなく冬の日なればとて氷りやらず、晝となく夜となく心靜かに流れてやむことなし、この小川のほとりに螢を狩り、芹を摘みてあそびし子等は日毎年毎にかはり行けど、この流れいつかはかはらん、實にあやしきは里の小川なり。

（評）文亦里の小川の優しきが如し。

○春日和

出雲　世良富美子

菜の花でぐるりを圍まれた村の學校で、先刻から體操が始まつた。球竿體操と見える、前の道を行く人が、澤山立ち止つて見て居る。妾等が、卒業紀念に植ゑた校庭の柳が芽をふいて、青々とした枝が、春風に吹かれて居る。紫の袴をつけた、女の先生が五六十人の女の子を連れて、唱歌を歌ひながら校門を出た。菜の花畑や五形花畑の、小徑を通つて、向ふの桃の咲いた村へと見えなくなつた。

米俵を積んだ舟が二三艘、長閑な追分を唄ひながら堤の青柳の間を、見えつ隱れつ下つて來る。水車場の堤には、枕を背負つた五つ六つの女の子が二三人、子守唄をうたひながら草を摘んで居る。水車の廻る音が眠たいやうである。橋のたもとの茶屋の白い旗が青柳の蔭に見えて、軒端に釣つた風車が、風に吹かれてよく廻る。

村境の女夫松の上に鳶が輪を畫いて居る。雲雀は面白く啼く、燕は電信線にすらりと並んで、何かぶち〳〵小言でも云ふやうである。麥畑には十七八の姉さん冠りの娘が、鄙歌を唄ひながら草を取つて、畦では子供が紙鳶をあげて居る。畷道を白髮の爺さんが、荷車に子供を乘せて通く、後から赤い旗を立てた大きい牛が四五匹、のそ〳〵とやつて來る。彼方には耕地整理の赤い旗が見えて、村の若衆が働いて居る。

生垣の中から往還へ枝を出した、緋桃の花が盛りてある。通る人が皆欲しさうに「美しいな」と賞めて通る畑で何か惡い事でもしたとみえ、鷄が婆さんに追はれて、けたゝましく騷ぐ、駐在所の巡査さんが通りかゝると、藥師堂の前に芝生に眠つて居た黑犬が急に吠えだした。

書齋の障子に暖かい春日が斜に當つて、迷ひ込んだ蜂が唸つて居る。紙の破れた所を春風が吹いて、宛ら風琴のやうな音がする。

日當りの飛石の上に猫が眠つて、築山のほとりの赤い椿が一輪、池の中へ落ちて靜かに波紋を畫いた。

（評）何となく眠氣を催しさうなる景。

○春の一日　本郷なでしこ

南の窓よりさし入る日影のいと暖かなるに催されて、讀みかけたる徒然草をかたへに押しやり、庭下駄ふみならしつゝ、例の天神のみ社の境内に至りぬ、みやしろは我家の後ろなる小高き岡の上にありて、年ふりたる松杉の奥深き所に、いと尊くまします、我れはふみよみ、文字書きて、あきたるときは、いつもこの御社に至り、かのすぐよかなる杉の根方にたゞずみ、四方のけしきをながめつゝ、うみたる心をはげますを常とす、今日も朝より空のけしきうらゝかに霞み渡りて、み社の花の木どものやう／＼けしきばみたるが中にも、みはしのもと近き紅梅のいととく色づきたるが、えならぬ匂ひをはなちたるに、いづこよりおとなひけん、鶯の初聲もきこえて、いひしらずなつかし、こゝは都離れたるいと靜けき境なれば、春は花、秋は紅葉と四季折々のながめはあれど、彼の都大路の花の盛りに、浮かれ男だちがひさごかたぶけ、ざればみかゝるなどのうれひもなければ、いと心やすくて、たゞひとりあくまでも此ののどかなるけしきをながめ、わが心を養ふよすがにもせばやと、ひたすら思ひ入る折しも、妙なる琴の音かすかに耳もとに傳はりぬ、あはれなつかしきしらべの音色かな、何人のすさびなるらん、なほよくきかまほしくて、耳をすませば、さと吹きくる風につれて、音はやう／＼近くなりぬ、折にあひたる櫻狩の一曲「菅の根の永き春日をいたづらに」などうたふ聲のらう／＼しさ、吾はたゞ物にゑひたらん如き心地して、知らずしらず音する方へ歩みを運びぬ、家居まばらなる田舍家に隣りて、今少し心あるさまに造りなしたる一つの家あり、心にくき琴の主かな、いかでかいま見せんすべもがな、立よりてすいがいのひまもとめんもはしたなかるべし、いかゞはせんとたゆたふ折しも、七八ツばかりなる稚子二人、しをり戸内より押し開きて、「風よ吹けふけ、たこあがれ」などいさましきこゑしてはせいづるにぞ、今は殘る隈もなく見出さるゝに、前栽の内はさして廣しとにはあらねど、常磐木共よきほどにうゑなして、見所あるさまなり、南のさうじあけはなち、あなたに向ひて座したる少女あり、年の頃は十七八ばかりの、髮も今めかしう、ふくよかにゆひなしたるが、白きリボンもて飾られたり、薄紫の振りの袂の、時々打ゆらぐは今しもかなでをへたる小琴の絲をやしめ直すらん、與ほならねばさだかならねど、吾が學びの庭にありし時、朝夕睦びたりし八重子の君にも似たるかな、あななつかし、もしさもあらんには、いかばかりかうれしからん、されどうちつけにたづね見んもさすがにはづかし、さきの小供はいづ

地いにけん、歸らば聞かんに、とく歸れかしと、心の内に念じつゝ、そのあたりゆきかへりする程に、くれ方近くなりて、衣手寒くおぼえければ、又訪ふべき折もあらんと、見返りがちに家に歸りぬ。

（評）餘韻嫋々。

○政　吉

福岡縣　よ　ね　子

雪の日や彼も人の子榾拾ひ。

實に哀れなものは榾拾ひである隣の酒屋に政吉といつて、八才になる可愛らしい小僧がゐて、どんな雪の日も霜の朝も、すりつぶした、下駄に、足袋もはかないで、あちらこちらと榾を拾ふてあるくが。妾はこの可憐な姿を見る度に、いつも雪の日やの句を思ひ出して、涙をふくのである。

今日は舊のお正月の晩なので、珍しく主人から暇が出たと見えて、二階で弟等が双六にまじつて遊んでゐる時々可愛い聲がもるらしい、妾等は下の座敷で加留多會の興盛り、「天津風……」「ハイ乙女」「まあ芳子さんずるいわ」「だつてこれあたしのだもの」さけぶ聲笑ふ聲、まるで雀が集つたやう、ふと耳をすますと、政吉々々つて弟等が笑ふこゑがする、何となう氣にかゝるのでいそいで、二階へいつて見ると、可憐や政吉は片隅で火鉢にもたれて、うと／＼居眠りしてゐるのである、妾はすぐ押入から毛布を出して、そつと着せてやつたあゝ實に哀れな子だ、皆がかうしてさわいでるのに、此の子ばかりは、樂しくもうれしくもないのであらうか、お正月が來たといつて、弟等はまるで夢中になつて遊んで居る、ああそのうれしかるべき、お正月を、淋しく迎ふる政吉の心の中はどんなだらう、可愛想だ實に可愛想だ、見れば見るほどいぢらしい、この可愛い子を、隣のおかみさんはなぜあんなにいぢめるのだらう、自分は子を持ちもしないくせに、それにしてもこの幼い子を、榾拾ひになんかやつた、親は何處にどうしてゐるのだらう、それとも孤子だらうか……兎に角あるとあらゆる憂世の辛酸を嘗めつくしてゐるのである、わづか八才の幼い身に。

夜はもう大分ふけてるらしい、さわいでゐた弟等も見



朝　滋賀縣　川島緻子

えぬ、かるたの聲もしない、折しも柱時計は十二時を報じた、霰はばら〳〵と窓を打つ、隣はもう休むらしい、雨戸閉づる音がする、起さなければなるまいか、叉おかみさんが、大きな聲して迎ひに來るだらう、しかし可愛想だ、心地よく眠つてるのを……「政ちやん」輕くいつたが、覺えない「政ちやん政ちやん」手が少し動いた、拍子にコロリと疊の上にすべり落ちて、叉グウ〳〵。

（評）同情かなりに表はれたり。

○花紅葉

信濃　大井靜枝子

色々に客はかはれど見返りの柳は綠り花は紅、と曲亭馬琴の詠じけんこゝ不夜城の花の春、霞たなびく衣紋坂響くは上野か淺草か、鐘の告げゆく諸行無行は夢の中、節ものどけき河東節、腕をば磨く男だて、派手に飾りし意氣姿、劣らじものと競ひつゝ、江戸の花ぞと謠はれて朝な夕なに出入する、町奴のそが中に義に勇む男の中の男一疋、江戸一番の黑手組の親分とて名高き、花川戸の助六と云ふ男ありけり、一夜の春に浮かれて今し後朝の別れ惜しみて立ち出ける仲の町、忽ち物影より立ち出ける大男の四五人、物をも云はず打つてかゝれば不意に驚く助六、防がんすべもなくて散々打ち据ゑられし其のみか、一人の男子が腰なる尺八にしたゝか額破られて、磨く男の其顏を唐紅の血汐に染めつ、暫し不覺の涙にくれにけり。

憂さもつらさも馴れはてゝ、土手八丁を節面白う逢ふを賴みに通ひ來る花の里、三浦屋の抱へに總角となん云ふ傾城あり、月の顏花の眉みめ麗しきそが上に意氣を尙ぶ此里に、立つる氣前も高ければ世の數寄人にたたへられ、女郎花吾手折らんものと袖引く者も多かりし其が中に、田中の某なるものあり總角が花香をめで、數多の黃金散らして只管通ひ居たりけり。

されど意氣で持つ廓の習ひ、千金の前には身をこそ賣らめ、心は賣らぬ意氣地立て、總角は黑手組の親分黑の着附、白博多の帶に鮫鞘の太刀、意氣な姿の助六好ましくて、千代迄も變らじ者と契りし程に、常に某をば、つれなくもてなしけり、某深くそを恨みて部下の四五人と共に、助六の歸りを要したるなり。

浮き川竹の流れの身思はぬ人にも添はねばならぬ勤の悲しさ、總角は叉の逢瀨を樂みつゝも、戀しき人の忍ばれて思に沈める其時、若者が告ぐるいとしき人の出來事に、胸とゞろかせつゝ駕籠走らせて見る程に、意氣をこらせし姿も塵にまみれて影なく、衣類は破れ髮はとけ血汐は面分かぬ迄に流れて、狼籍極りなき有樣に總角いとゞ胸ふさがり、思はず流るゝ玉の涙花の顏にと傳りつゝ、龍や躍らん虎や嘯く金糸銀糸に飾られし、

裾補の片袖ちぎりて愛しき人の鬢のほとり傳ふ血汐を拭ひつゝ、勞り慰めて籠の中花川戸へと送りける、曉鳥なく上野の森風なきに散る花の二片三片旭に映えて色うるはし。

谷中の墓地苔に埋まれる二基の墓ありし昔の戀をやささやく。

（評）文藻の美なきにあらねど、事は餘りに耳ふるし。

○子抱地藏

和歌山　能　子

千仭の絶壁の下に怒濤巖を打ちて、水天に接するの大壯觀を前に控へ、巍々たる白雲の中腹に、羊腸たる一條の道、巖を縈れり、其道の傍に老松風を帶びて露を隕すこと雨の如き邊、一基の苔碑半ば夕日に浴みて立てる有り、過ぎ行く老媼を呼び止めて由來を聽けば一條悲慘の物語、今は昔此所より西、程遠からぬ、眼が浦と云ふ所に、よその見る目も羨しきばかり、いと睦じき夫婦の者ありけり、この人はもと其の地の生れにはあらで、或年の秋の初め、湧き出てた樣に彼の浦に來りて、住みし者なり、婦なる人は姿美しくなか〳〵斯る僻地に一生を埋木となして、玉の肌を汐風に晒すべき人とも見えず、夫なる人は之に異なりて、色黑く骨逞しく見るから恐ろしげなる男なるが、心は案外にやさしくて、何事も女房大事とかしづくからに、怪しく面白がりて、其素性をただしきかんとすれば、夫婦の者は笑ひに聞き流して告げざりきとか、それより二年ばかりの春秋過ぎて、かの夫婦のものは賤しきわざにも馴れ、美しき稚兒さへ設けていと睦じく暮しけるが、或日の朝より親子三人の影は忽ち此の浦より消えぬ、あまりの怪しさに、浦人どもは四方に手分して捜し、索めけるに、恐ろしや、此の絶壁の岩の上に女の櫛と血に染みたる一箇の手斧とを遺されぬ、何故とも分りかねて其日も暮れ、三日目の朝、たく藻かき集めにとて濱邊に出でし人々は、おびたゞしき濱邊の鴉の噪ぎに怪しがりて寄りて見ば、あはれ、無慘や、稚兒抱きたるまゝの美人の屍、立ちかへる雄波に弄ばれて半ば濱にうちあがれり、いかなる故とも分きかねけれど、浦人ども哀れがりて、かの櫛のありし跡に一基の石碑を立てゝ、子抱地藏と稱へたるが即ち是れなりと云ふ。

老松大蛇の如く蟠まりて長き枝幾條ともなく水黑き深海に臨める所、月暗く、寂しき夜には、それと覺しき邊に幽かにふわ〳〵と浮き上る鬼火を見るとぞ。

（評）此の談、永遠に解くべからず。

新體詩

河井醉茗先生選評

二等

○眠り姿

蠣殻町三丁目　大村澄子

蠟の火ぞ燃え下る眞夜の扉は
うまし夢黄金羽のゆきかひに
爀る音の滴かなめらけき
紗ずれの爽なるねいきして
横臥の乙女姿ぞ靜かなる

房なしてうちしづる葉のかたち
沈丁花香ぞ炷く朧透きて
ほの照りはおぼろかの春の月
一室は眩ゆかる天の宮
やわらぎの色音をこめて影さしぬ

黒髪は海草のなびき藻葉
靜かなる眞夏の日なづき見る
懷なり光るうなじやさまみの
諸腕しなやかに胸にのり
月影はそぞろ華文のかものぼる

現霎時蠟の火はまたゝきつ
漏刻はくだちゆく羽かぜにか
げに天の地の女の雲鬟ならじ
ねかへりぬ和胸はあらはにも
片頰にはあゝかた笑の花ぞ開く

泉には麗日の珠とかし
醉やうに杜鵑花咲く晝下り
香木にさしぐむ青芽や樹むら立
新譜吹く春の彩鳥羽ぶり
鳥に似つ睦み逍遥よ日のふたり

また月は朧夜の花園に
笛の音や樂堂のしめやかさ
「生華の頸こそ吾が命
いく春の花の精」のたまひて
面照る人に凭る夜を夢路にか

「峻し世に靑丹づらう愛の詩
こゝにこそ瑠璃の宮築かるれ
照り眩き夢やあゝ戀の女」と
疰かなる腕に優眉に
月は夜すがら見も惚けし

才華驚嘆に値ひするものがあります、隱れたる作家としては受取れない位ですが、それとも作詩に經驗のある方でせうか（醉茗）

三等

○靈光

信濃上伊那郡中箕輪村澤　有賀まさ子

彩雲の曙の扉ゆるに、
天なるや一光の宮居一
瑠璃、黄金、白銀、燦の、
亂れ箭に華やぎさかり。

牡丹花の渦巻なして、
大宵に、猛火の威勢、
海原に、焰は響動、
なべて世の活劇態や。

新潮の濤のうねく、
美し貝幸生む磯に、
鈍色の昨日葬りて、
佳き日來る先驅と寄すれ。

灰洞みし壁や天井、煌々とさやに匂ひつ、
ちりばめし晶玉の間に、黄蠟の燭光射るごと。
さながらに乙女が胸は、電氣せり—努力、羽搏きて、
新しく、希望の蔭に、憊れたる生命、躍りぬ。

確かに上手です、此上一歩を踰ゆるのが努力です、努力と云ふより寧ろ天品に俟つ處です、お勵みなさい(評者)

四等

○乳房を病みて

岩代　笑子

憂き事知らで生ひし身の
病ひ人より重かりき
人にはそれと秘むれども
乳房の痛み堪へ難き
愁ひ給へる母上の
みとりうけよと進め給ふ
我十八の蕾の身
肌見らるゝを喜ばず
神のみ業に任せんと
苦しき面そむけては
埋むる夜着もしとゞなり
幸の子我れと誇りゐる
榮え在りし日をなつかしみ
弱き女に生れたる
身の運命を歎くのみ

詩は斯う云ふ場合に新しい生命を見出すものです見出して善く歌ふのが努力です、此作者は見出したゞけて、力が足りません惜いこと(評者)



草刈　岐阜縣　伊藤路子

五等

○蜜柑ふくみて

岩代國伊達郡立子山村　三浦たい子

雪にうもるゝ陸奥は
如月の寒、强うして
惡寒する身のかよわくも
胸病む床にたをれたり。
夜毎くるしき發熱に
渇を覺ゆる朝明や
母に願へば蜜召せと
掌に賜びしうましの實。
うるはしの色惜めども
烈しき思の堪へがてに
たゆたひつゝも皮剝けば
にほひあふるゝ奇しき香や。
蜜みなぎれる一片を
ふくめば口に甘くして
熱血にふれし冷さは
胸さはやかにうるほへり。
あゝ美し實よ汝あらば
病は愈えん南の
柑樹の林みどり爲す
山、暖き紀の國おもふ。

奥のやまうど、紀の甘き實をおもふ、詩でなくば言へない情です。

（評者）

秀逸

○希望の海　埼玉縣　金室喜代

神女帷を押しひらき、微笑む如きひんがしや、
闇き汚れの人の子を、救ひの日影天の涯。

海草寄する荒磯に、望の光かほらせて、
八雲彩る曉の、淸きすがたを仰ぎ見よ。

星の園生の百合の花　かつ摘みためて白駒に、
乘りて行くなる御使の、朝のつとめはとく過ぎぬ。

藍の色濃き海原を、この岸さして漕ぎくるは、
望の海の朱の船、惠の船の帆の光。

見よ、あゝ開けや罪の子よ、獅々吼に聲をかたどりて、
靑く鑄られし大鐘の、ひゞきに通ふ海の音。

百合の花を摘みゆく朝の使は美くしく、大鐘の響にかよふ海の音は壯んてす（評者）

○狂ひの水　牛込　河村韻子

此の夕べ、胸の悲愁を遣らむとて幸なき身をし
——黯闇の冥府にも似たる冷室の
錆びし灯影に一人して世を呪る詩に
倦きし身の『狂ひの水』と知りなが
らまた盡しにき。瑠璃甕の泡めく色
を愛でしより。
昔逝にたる美き君の悲愁き詩想に、
華やげる若き心情のゆらぐまゝ執り
にし詩筆のさすらひにあはれや胸の
血のかれて『運命』の細繩にいくる
身は瘦頰に落つる（珍らかの）泪も
何に泣けとてか
いづれ煩悶に死ぬる身の滿足をこそ
願にしか——夜每を『贄』と瑠璃甕の
靈香に夢の憧憬れや寂寥つゝまんの
身のさがは、やたらに愛でぬ。懷か
しき『狂ひの水』と知る故に。

人生、三分の醉なくんば詩は出來ないかも知れませぬ。狂ひの水と知る故に夜光の杯を愛づるも與てす（評者）

○少女が星が歌　名古屋　西脇笛子

空のゆふべになる每に、露子は星の界をゆめみ、
かはゆきひとつ眺めつゝ、「わが星」とこそなづけたれ。
夕暮ひとりさびしさに、母にむづかる折もあれ、

うれしき星をみいてとは、　きよく樂しくうたふかな。
天と地とにへだたれど、　夜毎相見てほゝゑみつ、
その言の葉はきこえねど、　おもひはおなじ星と我れ。
黒髪ながく生ひいてゝ、　玉の額にかゝるまで、
忘れてあれやわがおもわ、　幾歳經ともさながらに。
みどりの空はなが衾、　今宵は風の寒かるに、
はや雲被ぎねむれかし、　母のみ膝にわれもゆく。
ひと夜み空の星なきに、　きよき姿をわすれかね、
あはれ「わが星」なつかしと、露子はよゝと泣きそめぬ。

お伽ばなしを新體詩にしたやうて、可憐な想像力は星の花と輝いて居ます(醉茗)

○春霞の歌

長野縣　翠　波　女

一日ものめく朝ぼらけ、　茜、紫衣帷を垂れて
あか〳〵かほる天壇の、　紙燭朝彥かゞやかに
祭祝、求誓に額伏して、　御幣束さゝぐ男巫
聖壇に凭りて酒甕の、　盞うち開きまづ醉へり
げに妙香の打ちけぶり　みどりの泡のうつらげに
たぎりえならぬ薫りはや、　後れず詣る女巫
白衣跫音のこゑもなう、　榊木の瑞枝酒がめに
浸してかざすみ神樂や、　散らう酒滴はゝらはら
香氣は立ちてむらさきに、　下の界こむる春や霞の――

斯う云ふ詩は自然に森厳らしく感じるもので、作者がこゝに神樂、神酒、男女巫などを捉えて來たのは恰悧です(醉茗)

○沈める石

阿波　犬伏やす子

夜はもゆらむ沼の火や、　油さながら青どよみ、
鉛と重くたゝえたる、　風にもゆれぬ山のかげ。
その昔姫の戀ゆゑに、　かよわき腕をひしと組み、
石とも身をば沈めたる、　仇し姿は變りけり。
姫はかたえの殿かげに、　埋められしを夜な〳〵に、
池を慕ひて池の上に、　魂の火青くもえにける。
甕かも活くる朽ちずして、　千年の後の今も猶、
底ひもしれぬ沼の水に、　沈める石はありと云ふ。

石魂錄に似て又別樣の新趣があります、好詩材(醉茗)

○櫛を碎いて

下野國　新　井　琴　子

苛き運命の釜底に、　紅焰ともゆる樂欲は、
若き懊惱を沸ぎらせて、　亂れは白き涙哉。
十三絃のたゆたひは、　琴に弭く爪の香を、
吐息の如くゆるがせて、　興の去來の懶さに、
俯き勝の髪の毛を、　辷り落ちたる玳瑁の、
櫛は怪き音立てゝ、　琴柱斜に翻りしが、
壘を濡らす月光に、　流れよるまのしばしこそ、

希望絶えにし身の占と、　あゝ三段に砕けたり。
砕けて櫛は色褪せず、　褪せざればこそ「全かれ」の、
誡みはいとゞ強かるを、　女二十の不圖の敗殘よ。

櫛を砕いて昔の女は閨愁を抱き、今の女は敗殘を想ふ(醉茗)

○神怒

土佐　野の人

松原に玉蟲を得たれば先生の御作「絶頂」にならひて

太古の松の梢ゆれて　今玉蟲は地に落ちぬ
光か弱き秋の日斜に　看よそが紫紺の彩羽映ゆ。
天地のけじめ涵すよ　海は渺々三千里
潮は空に漲ぎりて　六合爲めに頽れんとす。
人の子呪咀の世を砕かんと　寄するや潮の高なりに
岸は地震する桂濱　太古の松の梢ゆれて。
靈しきひゞき　幽玄の空に漂ふ
神樂の音。
崇高き、　瑞の宮殿の
大神が、　神樂の
み使に、　五彩の
虹のみ橋、　渡りえて、そとすべり、
落ち來る　下界人の世。
神樂の御殿に、　大神がみ怒り荒く
つと閉ぢぬ、　神秘の扉。

私のは富士の馬返しに胡蝶の羽を拾うた詩でした、それに似て更に異つた觀想、玉蟲になりました(醉茗)

○破瓶賦

長野市　美子女史

せわしげのまたゝきや、　燭火は消えなんず
高響き夜を搖りて　枕べの巨瓶は
二つ三つ五片に　夢のごと碎けたれ
投げさしの寒紅梅　ところ狹に落花して
ふみ迷ふほの暗を　小鼠の走せめぐる。
形もなき破片抱いて　ありし日を悲めば
彫刻まれし白蛇の　首や胴ちり／＼に
息絶えて眠るかと　さながらの思出や
あゝ瓶は破れ果てぬ　永劫の春秋
寂しみはこのまゝに　梅や蘭香も吐かず。

詩色は鮮明ですが、別に作者の創意を認めません、才人幸ひに努力せよ(醉茗)

○春の迷ひ

四谷　河野槙子

安らけき世は今ぞ來と、　さゝやく鐘の音は低う
霞の底にしづみけり。

想ひをこめて埋めたる、
眺むる野末靄深う、
悲しと仰ぐ空の遠。
いや輝ける新星の、
灯赤き家に走せ入れど。
胸に手をのせうかゞへば
血潮湧く音の高うして
迷ひ出でたりあゝ我魂、
夢の胡蝶の羽にのりて
おぼろが中にさまよへり。

（詩魂彷彿として春の夜に舞ふ蝶を見るやうです（酔茗））

○新婚の人に　九段　あくがれ人

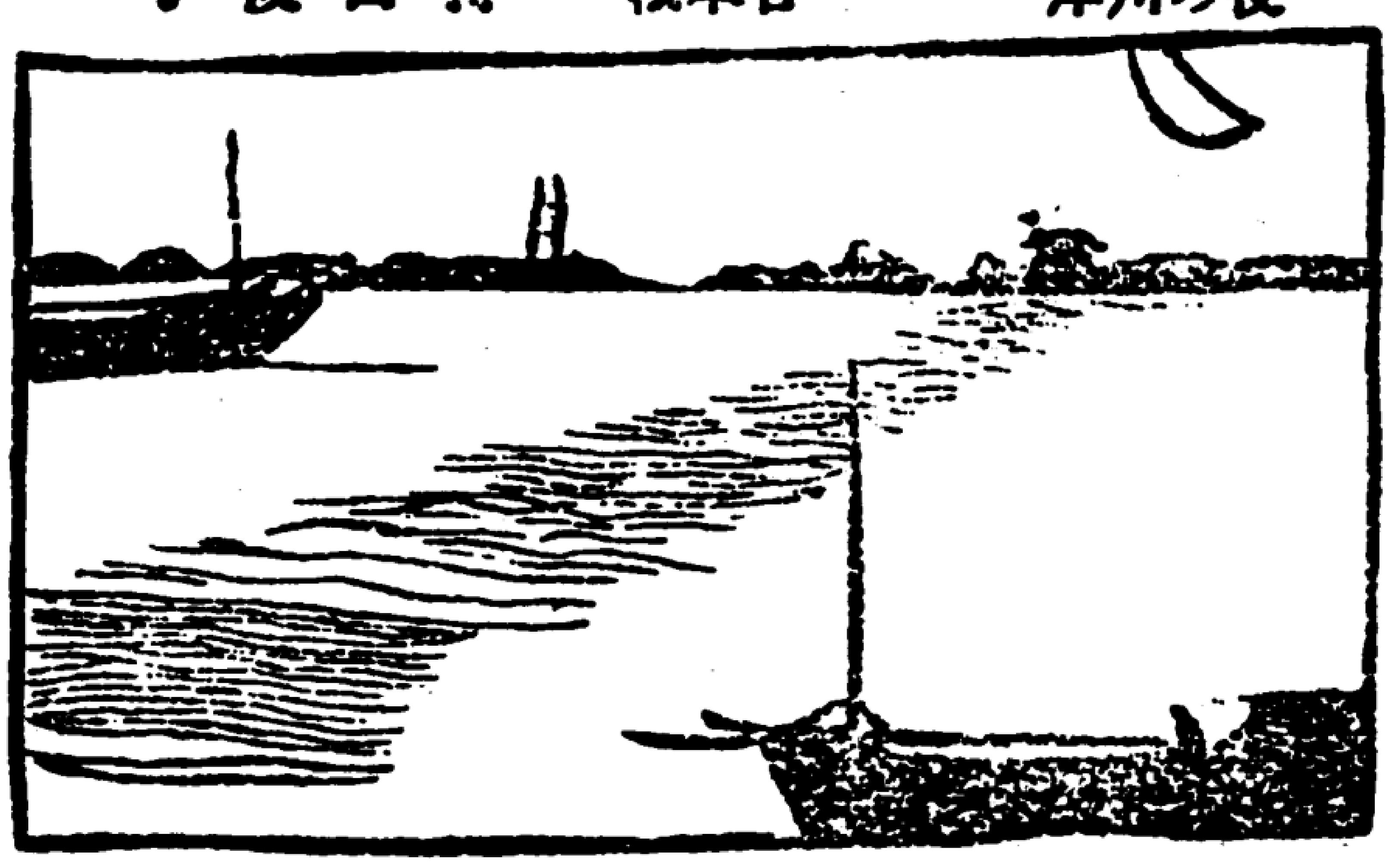
黄金の燭の長柄とる、
「縁」のつばさは君が頬を、
やはらになでて優聲に、
「祝」のうたをささやくや。

金泥ゆらぐ雙屏風に、
歌の香あまき君が口、
紫檀の天蓋眞珠の函、

幼き詩のなつかしと
紀念の石は見えずして
奇しき睨みに悸きて

花のやうなる笑見せて、
まづやはらかになれたまへ。
そこにちぎりの夢深う、

夜の川岸　日本橋　持田俊子



「天秘」の愛を世に生かせ、
常久むつむ幸おはせ。

（綱艶（酔茗））

○花と咲かせん　麻布　露野玉子

贈るそのたびに「むしきく、筆どめ候かしこ」と
文には書けど、
さてそのあたり相見れば
胸のみをどり一言も
語り得ぬ
われなればこそ、野に入りて
草にかくれて、この思ひ
花と咲かせん

つゝましき戀（酔茗）

○春の宵　淺草　大沼象江

ぬか雨そぼつ春の夜の
朧の花をすかしみて
歌口しめすそのみ手に
涙なかけそ乙女子よ

雨のうてなにちる花は
うつすにかたきそのさまの
さはれ果敢なき花の上に
只さきて笑きちりてちる

自然のたくみ神のわざ
そのうら影をすかしみよ
いかで啓示をときえなん
花こそ戀のまことなれ

泥土に塗るゝ花びらの
はかなき色はいたむとも
かたらてあれな永久に
悟りな説そ乙女子よ
汚れにそまぬ笛とりて
神に祈りの歌誦せば
あつき血しほの湧く胸に
高きひゞきは漂はん
さらばはかなむ乙女子よ
汝がもだゆる想ひすて
歌口しめすつかの間は
うれしき戀の譜もあらん

少し、かりものゝやうです、自分の眞情を歌つて御覧なさい（醉茗）

○姫路を過ぎて　牛込　鶯子

「昔男の業平づくり」
あれ紅摺(べにずり)の辻占に
珊瑚の戀をあづけられ
花は曲輪に亂るれば
夢にも君は恥しと
お夏が髪はほつれけり。
紅にも紛ふ蠟の灯の
袖にこぼるゝ宵月に
唇さむし濃むらさき
清らに着たる菅笠の
清十郎が片えくぼ。
女夫の星の宵闇を
雪の燈のかた枕
湯濟にきゝしうぐひすの
唄まれくにほだされて
如月寒の辻にたち
君が布子のなつかしと
若衆に競ふ花姿。
水菜にかゝる春の雪
五十三次おもひ寝の
額白き子のさすらひに
姫路の城を流れゆく
比丘の歌かも別れ路に
歌舞伎役者の常盤津を
緋の紐つらき藁草履
聞くに得たへで棄つる哉

姫路を過ぎりて、お夏の振袖、清十郎のすが笠に、新しき戀を想ふも詩情かや（醉茗）

○朝の利根川（汽車にして）　牛込　岩谷綠子

遠き里より鷄鳴きて
おゝ世の闇はぬぐはれぬ
車室の窓をあけぬれば
野の末紅う醉ふるかな。
眠れる如き利根川は
瑠璃色となり、枯蘆に
漣(なみ)は平和を呼きて
悠々として流れゆく。
俵積みたる川舟は
白帆に光あびながら
火炎(ほのほ)ともゆる東天の
水の境をのぼるかな。
窓にもたれし姉君は
黃楊(つげ)の小櫛の古床に
落ちしも知らず利根川の
朝の景色にほれたりな。
我はわがのる古汽車の
轍の音の高ければ
この天地(あめつち)の平和(やわらぎ)を
破らんことをあやぶみぬ。

利根の鐵橋を汽車で渡るのは確かに愉快です、此詩あまり沈着て、汽車より見たる景としては、活躍しないやうですけれど、赤坂東太郎の面影が浮んで來ます（醉茗）

○胸の鏡　小石川　白石照子

鼓動うつ、强き響に、
流れ入る胸の血潮の
紅の花と咲きけれ。

とある日よ一瞬の間を、　ふと見ぬる美しき幻影
花の香に蘖そだつ。　あこがれに病む夜を胸の
云ひ知らぬもだえ心や、　君が面歴々うつせ。
紅き花かゞやき照りて、
美しき胸の鏡よ。

何かとらえたものはありながら、歌ひ足りません(酔茗)

○女

牛込　落合逸子

をんなこそ　あはれなれ
花に似し　性なれや
世のうへに　をやみなき
雨かぜの　ちからをば
なみし得ぬ　うら若さ
をんなこそ　かなしけれ。

昨日見たる　まぼろしの
けふ消えて　影もなし
涙てふ　壁へだて
うつりたる　世のなべて
憎みつゝ　今やはた
花褪せぬ　在り侘びぬ。
女こそ　をろかなれ。

我、熟して居ます、うた心、心得たまふ(酔茗)

○夢

小石川　森田歌子

月にやせ、花にもやせて、眠るなり、このあばらやに、
わが魂、いかに消えなむ、葉に宿る、露のごときか、
峰による、くもの如きか。
世の人は、我をそしれど、罪多き、世にしあれば、身
のけがれ、いかに清めむ、涙もて、洗ふも恐か、いざ
さらば、神にたどらば。
罪の子の、つどへるところ、あめつちの、闇はとこし
へ、正義てふ、光はいづこ、見ずや人、名利に飽かず、
あゝかくも、いつはりの世や。
神は曰ふ、あはれ人の子、かの闇を、やぶりて見よや、
さらば我、光あたへん、破らずば、つゆに消ゆるも、
なれが身の、雲にきゆるも。
迷ふ我、神の言葉に、うれしくも、劍みがけば、夢さ
めて、明星あけし、手をのべて、我身を見れば、あゝ
詩にも、やせにけるかな。

冥想あり、遠神あり(酔茗)

○暗は破れぬ

近江　杉原富枝

凶頷の利き氷刀今は折れて、受賣手力の美し歌剛き力に、
岩間の帷幕さと開け眞闇破れぬ。
稚兒も籠兒も默し得ぬこのほゝ笑みに。
魍魎の森山がつの、手斧千里の暗の端を叩き、

神よ此森蔵らるべし。
妖怪の棲家曠野の巨塔、
賤の男の斧の閃めき、日光輝き暗は破れぬ。

生硬、けれども新しくしやうと努めて居られるのは結構です（評者）

○涙

神戸　朝凪靜子

世に生れたが不幸福　なれど生れし上からは
艶はなけれど束ね髮　譬へ晴衣は着けずとも
日の照る道の眞ん中は　人と並びて行けるもの—
情に角がはえたとて　咎める鬼もあるまいに。
花が咲いたと世は騒ぐ　花が散るとて咲いたもの
散るは道理と思へども　心が恥ぢて恐れるに
女なんどに生れしが——　くやし、鏡は罪ぢややら
眼を閉ぢて粉微塵　何故に涙が頬を流るゝ。

調を口語體に雜りたのが新しい（評者）

○即興

下野　鈴木雪子

霧にけぶれる山うねの　ひくきところに雲湧きて
重く千切れて飛ぶ雲の　西へ西へと蒼穹を
赤城の嶺にきえゆきぬ
ゆく雲うつす古沼の　あぶらのごときその面に
薄ら〳〵の日影して　水に漂ふ白き花
沼の希望やあふれけん　里に流るゝ眞清水の
森の女神の胸に湧く　熱き血潮とたぎりては
神秘を野邊にさゞめかな
山に萌えたる若草の　甘き芽を食む野兎の
葉末をゆする微風に　幾度び胸をいためけん
眞晝の夢に驚きて　ものおぢつゝもながめやる
わかき眸のあひらしき

沼の希望の溢れて清水となるは今初めて君に聞く（評者）

○醒覺

上総　山田沖子

夢に波立つ小胸の　憂き、海の面の蜃氣樓
消えて跡なきものならば　人の疑惑やなからまし。
今、紫の美酒に　快樂の曲の高くとも
醒めての後の追懷に　うき苦悶のひそまずや。
風のひゞきに花は落つ　濃染のみどり色あせて
蝶に悲しむ春の暮　さむれば美少影もなし。
胸のいたみを慰めし　清き美少の星いづこ
輝く方を見渡せば　彩雲とほく迷ふかな。
あゝ運命のさゝやきに　またゝきそめし人の子の

快樂の曲の弱りては
許せ、此の身は奴隷なり
詩人、それに似通へる
さらばよ、せめて塔の
若き血潮をみなぎらせ

遠き夜ぶりに沈みゆく。
星を仰ぎて涙ぐむ
高潔き理想と知らざらむ。
崇嚴き祭壇にひれ伏して
聖燭たかんわが希望。

夢に波立つ小胸の
憂き、海の面の蜃氣樓
消えて跡なきものならば
人の疑惑やなからまし。

形式もかなり出來て居ますが、惜い哉理に落ちて、詩興が乏しい、最も作者も自ら「宗教と人生」と云ふ論題めきた詩が添へてありましたけれど、詩には無用です、今少し融和した作が得たいものです（醉茗）

○森の宮

岡山縣　荒木芳子

人の巷を離るれば
斧を入るゝを許さゞる
深くも奧を覗へば
山鳩むるゝ木の間より
如何なる事を司さどる
てれ白鳩の使はしめ

神代の森の慕はれて
不文の法も守らるゝ
神の使の白衣の
社の軒は幽かなり
美はし女神か此宮の
少女が胸はときめきぬ


あさ　埼玉縣　中村勝子

一の鳥居に身をよせて
少女の目見は輝きて
社の前に額きて
鳩飛びめぐり飛めぐり
瑞枝繁枝に日も漏らぬ
崇き山の氣迫りつゝ
聽て明け行く朝の如

進み煩ふ許かりの
つと立ち恐れ惑ひたる
何をか祈る身を蔽ふて
夕べの巣に鳴く音かな
森の社は黄昏れて
心も沈む、淋しきに
森ほの／＼と風薫り
扉をもるゝ輝きに

萬象月の光あり
戀に死なんと歎きたる
少女が兩の肩の上に
鳩は翼を休めつゝ
戀は少女に蘇生るかな

神話めきて、希臘あたりの古き譚にことばを添へたやう（醉茗）

○綿むし

安藤みどり

夕べの庭にわたむしの
咽ぶまに／＼高く低ふ

雪の女神の道しるべ
我世に降り木枯の
彼方此方の逍遙や

固よりもろき身にしあれば
時の子の來て夜の幕掩へば
常世の嵐にえたへてや
冷土と化す身ぞあはれそも

奇しく妙へなるいのち哉

詩語に貧しくても、新しきものを歌へば、何處か人を惑じさせます(辭茗)

○太平洋の曙

茨城縣　綿引早子

霞か霧か何の氣の、　淡き紫き荘嚴に、
たゞ靉々と立罩むる、　太平洋のあけぼのや。

輝き匂ふ天の花、　醉ひろが如き潮の音に、
ひとつ〳〵に消えゆくは、　摘ては投けん天津女が。

秋津島根の岸をかむ、　流れ色美き海原は、
黄金眩く色榮えて、　御空と遠く連なりぬ。

水と空との彼方にて、　其處には在らむ美し國、
祖母に好く聞く蓬萊島、　春はそこより湧きぬらん。

讀んで惑興は動きますけれど、昔、同じやうな氣がして、海邊のうたに新しいのを暫く見ません(辭茗)

○機織女

岩代　倉作より子

ひねもすつくる羽二重は　神代のむかし織ひめの
心をしめす手のしわざ　今なほ人につたわりて
つくるしろたへ曇りなく　乙女の心そのまゝに
うつりて清し機のうへ

終りの方に國の光りとか、君の爲めなりとかありましたけれど、詩は其處まで言はなくてもよろしい(辭茗)

○名なし鳥

滋賀縣　辰井ふみ子

淡紅色薫る泊夫藍の、　花の褥にうまれては、
魍魎をはらむ雲吸ひて、　育まれゆく名なし鳥、
昔、悲戀の媛ぎみが、　人の香いみてかくれたる、
床かしき魂の鳥と化り、　村里遠く八重がすむ、
こゝに秋をし與ずるか。　一魚棲はぬ谷底の、
青銹岩の滴りを　浴びて、奇し羽を淸めぬる。
あゝ華麗と寂をあつめたる、　名無の鳥をさながらに、
思はぬ方の君に添ひ、　泣く音を包む微笑の
若き愁の己が身や。

終りの五句は有つても、無くてもよかつたのです(辭茗)

○宮城野

岩代　松山薔薇

秋風寒き宮城野に、　賤の女ひとり小芝苅る
刈りては砥つまた苅りつ、　鎌よ鈍鎌苅るよりも
砥まおそしとつぶやきつ、　歌ふひなうたふしゆるく
思は遠く雲に入る。
黄金花さく陸奥に、　いろ名木の名も高き
六十二萬三千石、　榮華のきはみ誰かある
五十四郡の草も木も、　なびきて仕ふ君にさへ
まゝならぬものありしとよ。

わがのぞみ山、崑崙、　わがねがひ海、滄溟
思は千々に砕けども、　わざはよろづにつくせども
あゝわがのぞみ、　あゝわがねがひ。

のぞみをよそにすぐせとて、　いくたび人のときにけん
ねがひを外にもとめむと、　いくたび吾れの惑ひけん
春洋々たりさそふ水、　花やちる風に小みなき。

つゝじが岡の秋の暮れ　兵どもの入あひの
喇叭の音もきゆるとき、　ひと日の業をこゝにをへ
しづの女家にかへりゆく　小鎌を腰に芝を脊に
薄野花を手にとりつ。

星に不斷の光り見ゆ、　神吾れにあり惠あり
かなしき運命も人の世よ、　うれたき事もいましばし
讃美の歌をうたひつゝ、　小芝刈らなん神のまに〳〵。

野の興廢と人文の發達と云へば事むづかしいけれど、武藏野や、相摸野や、宮城野や、史的感興を惹く事が多いので、歌はぬさきから自然其感じが動きます（酔茗）

○沼神の歌

群馬　かるかや

苔の香のほのにゆらめき　鳥一つ岸に鳴かねば
大木は靜寂にさびて　晝ながら沼は眠れり。
その昔旱つゞきに　狂はしき九ヶ村の衆が
犠牲と姫を浮かべて　雨乞に集ひたる沼。
三朝を祝詞さゝげて　おづ〳〵と額もたぐれば
ほゝ笑みて姫は沈みつ　其日より雨ふり出しと。
三とせ又十とせ二十とせ　人形に姫の裝ひ
水無月や望の夕べを　小舟して浮ぶる習ひ。
今は將たすたれたる世の　忘られし神の惠みや
沼も沈む朽葉にあさみ　年ごとに涸れてゆけども。
神はあり春ゆく宵は　沼の宮のうたげと云ひて
姫千たり花藻かづきつ　銀燭のかげに舞ふとや。

却つて斯う云ふ傳説の類を詩にする事も、下手な人眞似の叙情詩よりは後の爲になります（酔茗）

○佐保姫

越前　新保勝子

眠れる春ようら若き、　形をかくすことなかれ、
たれこめてのみけふの日を、　なべての人のすぐすうち、
醒めての春の姿こそ、　まだ夢のまの風情なれ。
ねむげの春よさめよ春、　さかしき人のみざるまに、
若紫のあさがすみ、　霞の袖を身にまとへ、
初音うれしき鶯の、　鳥のしらべをうたへかし。
ねむげの春よさめよ春、　冬のこほりにむすぼれし、
古き夢ぢをさめ出てゝ、　柳の糸のみだれ髮、
梅の花櫛さしそへて、　びんの亂れをかきあげよ。

ねむげの春よさめよ春、 歩めば谷の早わらびの、
したもえいそぐ汝があしを、 たかくもあげよ歩め春、
たえなる春のいきを吹き、 こぞめの梅の香に匂へ。

新しい感情と、古い思想の間にある詩、思ひ切って古きを捨てたまへ（評者）

○星

府下 中村春夢

彼の大空のうるはしく、 きらめく星は小さくとも
戀にほのめく君とわれ、 あそぶに廣き野邊はあり
よし野は廣く荒るゝとも、 青葉茂れる森ありて
ふたりの家を巣ふべく、 そこに自然の住居あり
荊棘（おどろ）がくれに神の手に、 あまき覆盆子（いちご）のつくられて
二人の飢をいやすべく、 そこに自然のち房あり
女神の息の柔かく、 いろうるはしき花咲きて
ふたりの胸ににほふべく、 そこに自然の快樂あり
ほづ枝（え）をわたる小鳥らの、 呂律も優にうたふては
二人の胸の琴にのる、 そこに自然の慰藉あり

戀と自然、此處に美くしく詩を語る（評者）

○白梅

丹波 幽閑子

しら梅の、 ゆふづきよ、
風に倚れば、 ほの白う、
みだるゝよ、 清香の。
歌もなく、 偲んじては
たまゆらの、 追懐や
あえかなる、 人戀へと
ひとは今、 遠のくに。
くに見れど、 國は見ず、
草やまの、 まろきのみ
青空に、 はのかなる。

○あや糸

滋賀縣 川島微子

香油と烟ゝ宵雨に、 春のなさけも濃やかの、
燈火淡きねやの間を、 花か匂へるあや糸の。
糸の情の君ゆゑに、 たちもかれたる片袖を、
悶の胸におしあてゝ、 泣くな戀とも知りにしか。
ま白き指にまかれては、 樂所に愛の謎をかなで、
丈なす髮を束ねては、 花園に二人の戀も開け。
もしそれ胸のつま琴に、 あや糸かけて調べなば、
音は七色の美しき、 詩と戀とやひゞくらむ。

○春の晩れ

府下 鵜澤銀子

雨も音なき闇の夜に、 散りしく花をかい抱き、
何を急ぎの佐保姫が、 御車天に逝きしより。
朝の雨に紫の、 菫の清き香も失せて、
卯の花白き背戸垣に、 力なき散蝶の群。
吹く風ぬるき綠野に、 夕べ笛吹く牧童よ、
くれ行く春の寂しさは、 汝が調べにもこもれるを。
優しき稚子よ君が頬に、 白き薔薇はかざざれ、
せめて罪なき胸にだに、 春の名殘は惜みてん。

短篇小說

廣津柳浪先生選評

二等

○竹の葉影

麻布區材木町松岡方　林茂子

姉さん、
ぢや秀さんお歸りなさい、外はさぞ寒かつたでせう、小さい鏝を火鉢にくべて振向いた、その頰にかすかに笑靨が見えて居る、あゝ、寒かつた、さうでせう、此風では、さあ早く座つておあたりなさい。
娘は膝の上の物を下におろし靜に向き直つて、火箸で火をかき廣げて、さて手をかざして寒さうに身をふるはした、少年は敎科書の包をそこに投げ出して座つた、やあ奇麗に出來ましたね、その花は一つ一つ造つてつけたのですか隨分面倒だなあ、少年はいかにも感心して、其造りかけの和蘭菫を見つめて居る、兄樣は菫の花が大すきよ、そうね、お送り申さうと思つて造つたのですが鏝がきかなかつたものですからね、花にならないのです、いやよく出來て居るではありませぬか、嘸兄が喜ぶでせう、姉樣は幾歳におなりでしたつけね妾ですかと顏上げて又莞爾として、あてゝごらんなさい秀さん貴郞は幾歳だとお思ひです、知つて居たんだけれど僕忘れてしまつたて、實際幾歳です、まあ、あててごらんなさい、全く忘たの、幾歳です、いやね、少年がひどく眞面目なのでかう言つたが秀さんよりか四つ姉さん、四つあゝぢや十九ねえ、ふと見あげると丸窓の障子に日があたつて、先刻迄吹きすさむでゐた風は跡かたもなく、僅にそよいでゐる竹の葉がはつきり映つてゐる、あゝ姉さん竹の葉が、奇麗ですね、おや、さうね、ほんとに奇麗だこと、畫見たいですね少年は庭の方へ眼を轉じ、早や開きましたね石燈籠の側の梅が、あら、さう妾今まで見つけなかつたわ。
德島の僕の宅にもあんな梅が有りますよ、そう秀樣がゐないから梅が淋しがつてゐるてせ

う、ハアけれどもね僕は彼梅を國の宅の梅だと思ひ、それに姉さんの樣な優しい方が側に居て下さるのでちつとも淋しいとは思はないがね、本鄕の兄樣は嘸淋しいでせう、今頃は何處の、梅を眺めてゐるであろう、ほんとにね、下宿住居でお不自由でせう、此家へ居らつしやればいゝのですがね、ハア僕もそう兄に云つたのですが、國の御兩親が學校へ通ふに不便だとて許しませぬからしかたありませぬ、春子は俯いて小切の箱を片付ける、秀雄は幾度か云はうとして口籠てゐる、姉さんと終に口を開いたお嫁に行のですか、え、姉さんはお嫁に行くのですか。

誰がそんな事を、誰がいつてゐました、みんなが。

姉さん本統に行くのですか、娘は何とも云はずにゐる、



え姉さんと重ねられて、うそよ、うそ本統にうそ。

少年は喜ばしそう、娘は顏を紅めて下に向ひた、うそですよ、冷たい風が、さつと吹いて來たのに驚いて、急いで二人は窓を閉めた、雲が行き過ぎて、日がまたさす竹の葉は再び障子へ美麗に映つた。

眞の同胞でなく、弟と呼び、姉さんと云ふ程の親しい間柄の二人を捉えて來て、現れて居ない兄さんと云ふ人までも活かして來るのは上手な書き方と云はればならぬ、對話の意氣がしつかりと合ひ、文章にもすきまがない（選者評）

三等

○青葉影

三河　中島磯子

「ホントに秀子さんよく來て下さいました私も一度伺度と思ても何や彼やてあがられなくて……」

花の時はさぞかしと思はるゝ、葉櫻の古木の向ふ築山の植込美しう茂り合ふ下に躑躅の遲れ咲二ッ三ッ、何とのふ奥床しい

胸のすく樣な趣の庭を眺めた八疊の客間で睦げに語る主客二人「アラ私こそですよ淸さんはお變りもなくて御姑樣は」と相手の顏を見た秀子、透通る樣な色白に美しい髮を落付た束髮、中形御召の單上品な鹽瀨の帶を結で居る、澄子は今小間使が運だ茶菓を進め乍ら「ハア皆御蔭樣でね姑樣は亡父のお墓詣に出掛今日は私一人なんですからゆつくりして頂戴な」「有難う、アノ今日はね、あなたに御相談があつてよ」と云にくそうに顏を上た秀子「オヤ私にマア何の御相談」と友の顏を見ると耳の根迄眞赤にして「アノ實はね此度北畠から是非私をくれと云のよ、それについて父は親類中だからて斷たそうですが伯母が熱心なので兩親も伯母と云ても母の從姉濃い血族でない故知らぬ他人の處より御前の爲いゝかも知れんとの話、私別に考もないけれどあんなに望まれて親身の御伯母樣處に入らしたあなたが何時か昔の伯母の樣にはいかないと仰しやつた事が氣になつてね却つて悲しい思をしやしないかと思はれるのよ」もじ／＼しながら語り終た友の話を聞てゐた澄子はわざとほゝゑみ「マアそれは御目出度事ね何處だつて家に居る樣な譯にはゆかないがそんなに御心配なさる程でもないのよ」「そうでしよか」「そうです共殊に光義さんはお伯母樣の御一人子、あなたの出樣一ツでキット圓滿に行きますよ」「出樣一つて」「それはね私なんかも思慮がたりないから悲い思もするのですよ嫁となつても實母と同じ樣な氣がしてね杉浦の義姉が稀に來た時なぞ繼母の姪だからと不快な思もさせ度なし殊に義姉と姑とは元から合はない中ですが淸の爲には一人の姉なり互に打とけたいと私がとりなそうとしたのが姑の心のひがむ基となつたのよ、それに淸はああ云ふかまはぬ性質でしよう、だから若者は皆氣が合ていゝが時代おくれの老人は何に付てもひがみばかりて困てしまうわ」淚を目にためて吐息をつくと何と感じてか秀子も淚ぐみ乍ら「ほんとに悲しいわね」「どうしようと思時も度々よ、けれ共矢張私惡いの熱心と愛がたりないのよ、それに小供の時から母の樣に可愛がられたりするとそこに云ふに云へない心やすだてが有てね、遂には感情を害する樣な事が出來るのよ、私もどうかして元の伯母になつて頂かうと一生懸命仕へて居るつもりなんだけれ共中々六ケしくてね」「ホントに人事とは思ないわ」と話がだん／＼沈で行くのに心付た澄子は折角友の目出度話をと氣を變へて「マアとんだ御話迄してね、あなたなんか繼母樣でないのだもの

御心配はないのよ、何でも始が大切ですわ始の內幾分か嫁と云ふ威念を持て御仕へなされば御伯母樣よりよい御姑樣が出來ますよ」「そえだと嬉いけれどね」と思はずニッコリ笑だ秀子「そうですとも、御日取が決定たら知らして下さいよ、私一度伺ひたいから「是非來て下さい手紙を出しますからね」

日も西にかたむき追つけ歸る淸の部屋の掃除にでもかかつたらしき物音に「マア大變長居しましたわ御蔭樣て私も注意しますわ」と歸りかける秀子に何でも始が大切と繰返し乍ら浮世の荒い海原に舟出する友を玄關迄見送り溢るゝ涙をハンカチにおさへ己が室に歸た澄子は友の前途に幸多かれと心をこめて祈るのである。

誠に眞情の溢れた作て、讀終つてホツト一息させるやうだ、斯う云ふ話は或る日、或る人の間に能く繰返されるてあらうが、それを持つて來たのは此の作者の敏才と云はればならぬ（選者評）

五等

○寄宿舍

小倉市古船場小河原方　朝枝子

『眞實に、夢のやうですねえ。』

轟々と喧びすしい足立炭坑の機關の音も、十二時の汽笛を吹いて眠つてしまつた。驚いたやうに、玄海の波音が、蕭颯たる長濱の松籟に和して、冬の夜の月に、凄く冴えて居る。百餘名の生徒を懐ろにして、樂しい夢を結ばせて居る大なる母――宏大なる寄宿舍――は、宵から降り續けの雪に眞白い蒲團を被いて居る。

雪に反射した月の光に、廊下は宛然、白晝のやう。

『眞實に夢のやうですねえ』と、鸚鵡返しに、小さいのが、合手の膝に、泣き崩れた。

『ねえ、浪子さん、過ぎ去つた今日からは、夢のやうに思はれますが、三年の間、卑しい田舍そだちの妾を、「姉樣々々」と慕ふて下すつた御恩は、一生涯忘れはしませんよ。一所に枕を並べて寢るのも今夜が終りて、明日からは……』

『アノ姉樣の御鄕里は、小倉から二十里でしたねえ。たしか汽車で――さう〳〵、いつぞや、箱崎天滿宮に修學旅行をして、筑豐線で歸つたとき、油須原のステーションで、白雲の搖曳つて居る彥山を指して、あの山の麓で、蕎麥の花を雪と見て、お歌を作られることもあると言はれたのを忘れません。妾御父さんに。姉樣よろしいてせう』と、淚を拭ひ〳〵志津子（浪子が姉樣と呼ぶ人の名）の顏を仰ぐ。

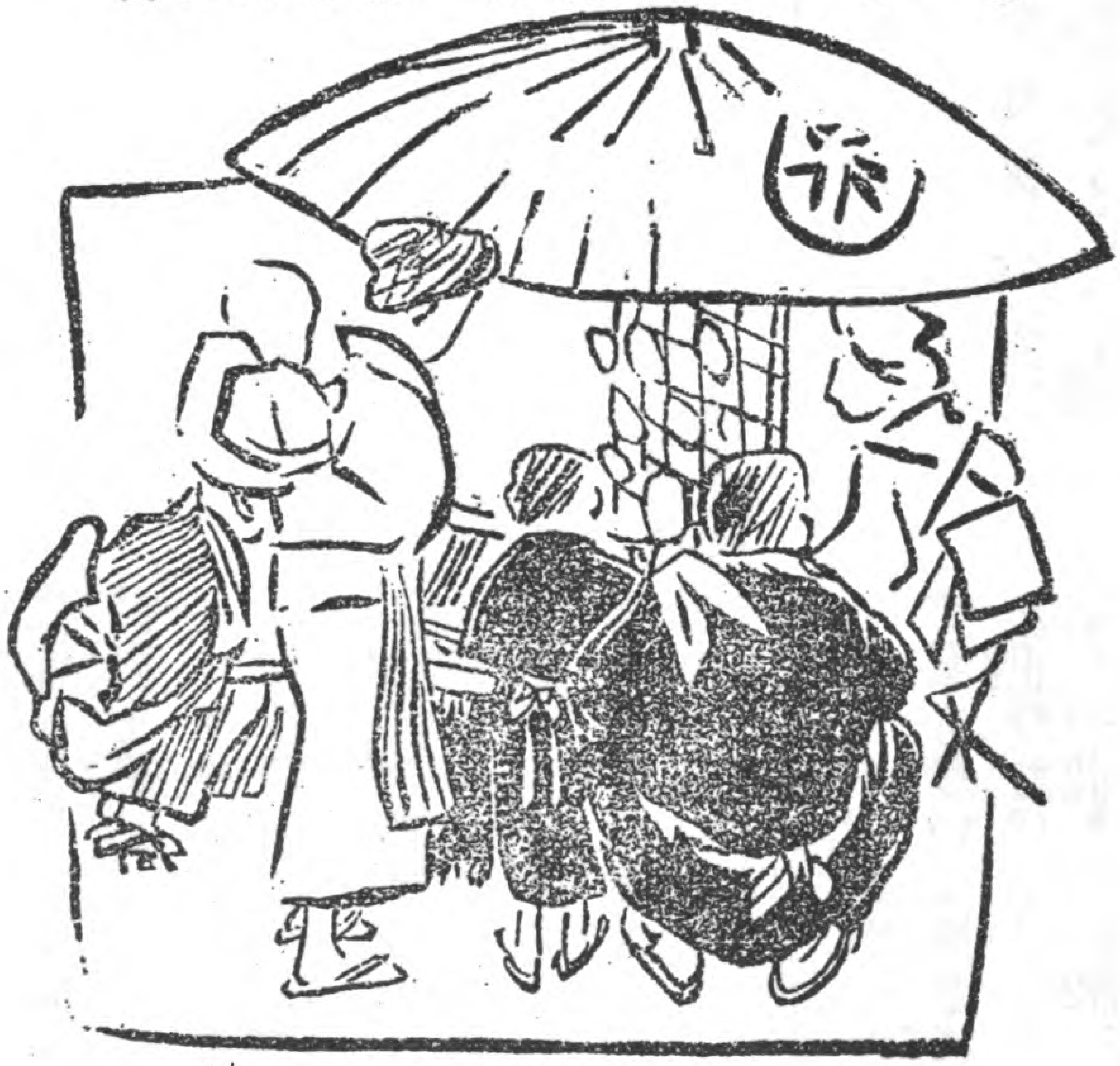
『マア！あられもない。もつとも、田舍では、村長樣

の御孃樣と言つて、道で會つても、皆、手拭を脫いでお辭儀はしてくれますもの〻、浪子さん、あなたは陸軍少將の御子さんではありませんか、旅團長樣の御姬樣ではありませんか。むさくるしい茅屋に、お立寄り下さいましたら、妾は――裏の杉山に隱れて出ませんよ』

流石は罪なき少女子の會話ではある。

一言陳べて置かねばならぬのは、志津子の身の上である。彥山參詣の人々は必ず、三千八百坊の跡を慕ふて豐前坊へ出る。それから獅子の口からちよろちよろ流れ出る川――源は溝ほども無い――に沿ふて本道へ出る。津野山の裾に、雲つくばかりの大公孫樹を見、更に其木の下に古風な家を見るに及びて、『ハヽ、あれが大庄屋さまだなア』と、立ち止つて噂する程大きな構えの家である。何でも、往昔、豐前坊に每年何十石といふ布施をしたといふことである。

繪　日　成田　波賤女天波



當主津野八右衛門氏は、村民の信用篤く、世事の煩雜を好まずして、一生を御得意の茶の湯と、林業とに暮さんとするのを、無理に村長の椅子に腰を下ろして貰ひ、ヤレ安心と村民が悅び此上なきところに、東京は某の大學で經濟科を專攻したといふ當郡會議員の收入役が、官林拂下に何とかした揚句の果が、飛沫は津野家に及むで、破產といふことになつた。その影響は終に、志津子をして廢學せしむることになつたのである。

『では、姉樣は、最早、妾を妹とは思つて下さらないの。ね、ね、姉樣、妾は永久も〳〵姉樣と呼ばせて頂戴よ。惡いの』

『浪子さん、イヱあの御姬樣、立派に御出世遊ばしますやうに、妾は草深い田舍から、朝夕神樣に祈ます、佛樣にお賴み申しますよ。今までは、妾が上級でもあ

りますし、年上でもありましたから、ツイ嬉しさのあまり、姉樣と、呼ばれてました。優等證書を戴いたよりも、あなたが一聲『姉樣』と呼んで下さるのが、千萬倍嬉しく思ひます。ソレモ今は昔の夢となりました。明日は、妾は田舍の、卑しい少女。あなたは、貴い御姫樣であります。オヽ、そんなに泣いて下すつてはいけません……。」

舍監室の窓が開いて、火光が庭に爍いたので、二人は寢室にかくれたのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊

學校程、平等主義な所はあるまい。

寄宿舍に在つては同じ學友、校門を出れば田舍女とお姫樣、別れの一夜を語り明かす處、人間の美はしい情もほの見える、對話に少しわざとらしい處もあるが、また能く現代女學生生活に觸れたところもある
（選者評）

秀逸

○雪の夜

京都　濱部郭公女

宵からチラ〳〵と降り出した雪は夜に入つてから烈しく成つて見渡す限り眞白に成つて仕舞つた、今はもう十時頃で有ろう、向ふの菓子屋も隣りの煙草屋も客が無いと見たものかソロ〳〵戸を閉め、唯、萬あらものと瓦斯燈に書いた小さな家だけが戸も閉めず店の小間物を形許り並べた戸棚の横に廿二三の細面の女が紙でホヤが二ヶ所も貼つて有るランプの下で頻りと裁縫の手を運んで居る、女は他家の戸を閉める音に氣が附いた樣に後を振り向いて睡そうにコト〳〵と動いて居る時計を眺め、

「オヤモー十時前だよ」と獨言を謂つて傍の火鉢の火を掻いて鼻を焙る樣にして、

「オー寒い……だけど夫の人は何をしてるんだろう……乾度お金が出來ないのに違い無い、信實に彼んな金を借りなけりやよかつたのに……明日の朝には是非返せと八釜敷謂ふし、あゝ貧棒はしたくない……」と顋を衿の中に埋める、折しも表の方で雪を拂ふ音がしたので女は戸口を覗いたが黒い影が行き過ぎた。

「そぢや、無かつた」女は又思ひに沈むと、今度は跣てゞも歩いて來る樣な音がしたかと思ふと戸口でハタと止つた。

「いそ姉、いそ姉」と、小供が小さい聲で呼ぶので女は自分の名か、戸口を覗くと十一位の男の子が寒そうに震へ乍ら立つて居る、女はそれと解つたのか一寸眉を顰め、

「光ちやんじや無いの‥‥マー恁麼寒い夜に、早く玆へお入りよ」男の子は何物かに恐れる樣に音させ無い樣に入つて來る。
「サーお暖たまり」と女は火鉢を進めて、
「光ちやん今晩は未だ良人が歸らないのだよ、だけど今に歸るかも不解らないから用が有るなら早くお言い」男の子はキヨロ／＼と方々を見廻して居つたが、
「アノいそ姉お父つさんが子毎度だけれど困るから少し貸して欲いと云つたよ」女は困つた風で、
「信實に一度や二度ぢや無いのだから子、そりや有るお金なら何程だつて親の事だから上げたいのだけれど、内も今困つてるのだから子‥‥」と後は獨言の樣に言つたが思ひ出した樣に
「そしておつ母は什麼してるの」と聞く。
「おつ母かい、風邪ひいて寢てる」
「ぢやお飯は誰がするの」
「會社に出てる松姉が炊いてる」
「ぢや會社を休んでるんだ子‥‥それぢや尚困るだろう、お父つさんはお酒を止めてるの」
子は頭を振り、
「イーンや呑んでる、」
「松姉は默つて居るのか知ら‥‥」
「松姉が言つたつて聞きやしないのだもの」
「マー其麼に困つてるのに‥‥仕樣が無いね」女は手早く帶の間から財布を出して五錢の白銅を四ッ出し。
「光さん、お父つさんにそう言つてお呉れ、私も有りさへすれば幾程だつて上げたいのだけれど今は中々其麼處ぢやないのだから、これだけで辛棒してお呉れつてね、いゝかい」と紙に包んで渡し。
「お母にもねお見舞に行き度は山山だけど出る理由に行かないから身躰を大事にしてお呉れつてね」と女は時計を一寸振返つて、
「オヤモー十一時だ、又良のが歸らない内に早くお歸り」男の子は紙包を握つてスゴ／＼と出て行く女は戸口迄見送つて、
「マー烈い雪」と云つたが、

お久し振り　廣島　今西初枝



「光ちやん」と呼び止めたが語尾は非常く震へて居る「急いてお歸りよ寒いからナ、そしてお母の云ふ事をよく聞くんだよ」

「ア、」と言つて走り行く、女は内へ入ろうともせず凝乎と暗に消え行く後姿を見送つて居つたが、

「あゝ、彼も可憐そうな子だよ」と思はずホロリとしたので有る。

雪は益々巴字と降り出してモー四五寸は積つたて有ろう、横町の鍛冶屋の犬の遠吠がかすかに聞える。

生活と云ふ事が、やかましくなつて、實際的の材料を取る事も多くなつたので、斯んな小説にも何となく時代の影が映るやうに思はれる、牟もよし、讀むに嫌にならぬ作。(選者評)

○渡守

安藝　手島まさ子

「西は追分東はア關所せめて關所の茶屋迄も」

妾は、妾ながら不思議、此榮川へ來て、此の舟へ乘つて、此の歌を歌うと、いつにない朗らかな聲が出る、水の流へひゞくのであろう。

今、水棹を取上げて、上品な奥樣や、水兵服の坊ちやまや、紫被布召したお孃樣、他に、二三人の紳士、商人を乘せて、一町の柳橋の處へ、押して行く。

水たぎる音靜に岸についた、お客樣はお上り、又舟を引かへして戻つてくる、「西は追分――、」歌ひかけると、突如――、激しい音、上向に橋を見ると、二三の車のあとに、のらり〳〵朝日葉卷をふくらしながら先立つて居るハイカラ紳士、次は、黒髪を、文金島田に結つて赤の鹿子が、ふわり〳〵、黒地に白の梅摸樣、鶯が啼想な、くつきりとした柄の裾摸樣三枚重に、立やの字に締めた帶からは、金の寅がぬけ出そう、五寸四寸高さの下駄の處から、緋のけだしがちらり〳〵、まア何と云ふ立派な姿であろう。

後につきそふ十二三の少女は、紅に水色の裾ふかし、一しほ愛らしく、靑き水の流にうつりて、春の櫻やと怪しまるゝ立姿、嘸立派な事、何家のお孃樣であろう、あゝ家の喜ちやん道ちやん、まるで天と地だ、一方は金殿玉樓の内で錦を着て暮す、一方は九尺二間の裏長屋寢ながら月を拜む樣な、粗末な苫屋で、晴衣とては木綿一枚、妹等は可憐な者よ、あゝされどお麥のご飯に菜を煮てやれば、そらご飯じやと、小をどりする、冷い寢床に入れば、右と左から母なき幼子が母よ姉よといだきつき、其まゝじつと眠つて了う、こんな冷淡な有樣でも、何とも云はぬは、これに滿足して居のてあらうか、がんぜない少女は、あれよ、これよと、ねだ

るが常なるに、お、妹は感心な子よ潔白な子よ、賤が田舍も住めば都、あの家でも、妹が爲にわ宮殿じや、お、それよ。

妾は妾で慰められて氣も快々と晴れて來た「東は關所せめて關所の茶屋迄も」、後の半句は、心から樂しく歌ふ。

岸に舟をつないで土手に上れば、漸く日暮で、お隣の小父さんが、ニコ〳〵顏であき車を引ひて歸る、お光さんが工場から戻つてくる、遠くに見える我家には喜ちやん道ちやんが樂想に遊て居ます、お、可愛や微に笑つてる、聲が聞えます、どれお客樣に頂いたお餅を持つて歸つてやりましよう。

或ひは文章に稚氣を帶びて居る非難もあらう、筋の手短か過ぎる非難もあらうけれど、少女小說としては此位が最も書きよい手ごろてはなからうか(選者評)

○親友　陸奥　柳田きさ子

そんなに羨ましかつたの。

若菜摘　山口縣　中津江照子



同じ年頃の二人の女、麗らかな日を全身に浴びながら、糸遊燃ゆる野邊を眺めて、大凡百年も年經たる柳の陰に、柔な若草を蓐として居る。

羨ましいとも、私は眞實に泣きました、これまで同じ學校で同じに進んで來たものを、明日からは貴方は東京、私は内の臺所、二年三年を過ごせば天地の差で、貴方と私とは再び。

あれ又たそんなこと、止して下ださい。

ア、止しましよう。

止しましようも是れて三度よ。

よく數へて居らつしやること。

二人とも仲よく笑ふた、暖な風は靜に柳の枝を動して、柳の枝は靜に自分の大い瘤を撫で、遥かに霞む村から鷄の聲もきこえる。

「お國さん貴方と私は親友なのよ、どんな事あつてもどんなに身分が異つてもこの世に唯一人の親友ですよ。

有難う、どうぞ何時までもね。

村の金滿家の一人娘 花子は、二年前に東京に行つ たが

今は病氣との事て歸つたのてある。以前はあんなに活潑て氣輕てあつたのが、今は沈んて涙もろい、幼な友達の國子は、親達から氣はらしの相手として、今日も此の晴天を散歩につれ立つたのてある。

東京には立派なお友達も出來ましたろう。

イエあんな處、あんな處は惡魔の巢窟てすよ。

まさかそふてもありますまい、然し隨分墮落したものがあるそうてすね。

墮落！

花子の目は異樣に光つた、然しさあらぬ態て。

そうよ、新聞にも出てるてしよう。

遠い山は未だ殘りの雪白く、近い山は紫に霞こめて、野は一面若草の綠てある、雲雀は空に黑い點となつて、聲を限りに猶ほ上に〳〵と鳴いて行く。

お國さん、雲雀は人の世の惡事を天に告ぐると云ふ詩がありましたね。

ハイ學校て讀んだ事があります。

花子は口を堅く結だまゝ、目に何時か涙を持て居る、顏の色もだん〳〵變て來た。

お國さん、貴方は唯一人の親友てす、貴方の外にはこの胸の苦みを告げて、この苦みの一部なりとも減らす人がないのてす、聞いてくれるてしよう。

聞きますとも、聞かして頂戴、先日も申しました樣に及ずながらお力にもなりましよう。

二人は暫く無言て、手を堅く握り合つた、天地は全く靜かてある、遙かの水車の音も夢の樣てある、丁度此の時、モーと一聲この靜さを破つて、後から牝牛五六頭、其後から牛飼の二人は、頰冠して鞭を振り〳〵やつて來た花子は突然。

もう歸りませう。

歸りましよう、して今のお話は。

まア今度にしましよう。

アラ又今度てすか、今度にしましようもこれて三度てすよ。

アラ先きの仇討。

二人は笑つて立つた、牛はモーと吠て百歩の彼方に行つて居る。

其の後村の噂に、旦那樣のお花さんの處へ、東京から男の手紙がくると、然し元より人の噂てある。

對話も罪なく、挿入の叙景も好く、花やかてあつて、沈んだ處があつて肝腎の話を此次にしませうと留つて、別にくど〳〵しい例の說明を語らせずに切つて了つたのは却つて大出來（選者評）

和歌

佐々木信綱先生選評

三等

歌をうむ村とし思ふひくき家
細き流れに小鳥鳴く森

美濃國關町　傍島芳翠

四等

亡き母の手に抱かるゝ心地して
草あたゝかき故郷の山

大和國宇智郡五條町字須恵　和田芳子

五等

わかれにし人はかくれぬ菜の花の
小高き丘のすそをめぐりて

芝區琴平町三番地　川島たつ子

秀逸

◎　牛込　花帆子

道たまく〜南につゞく菜の村を
夢さながらに人霞みゆく

◎　下野　金田女史

世をそむき深山に住みて早や四年
さすがに都戀しうなりぬ

◎　麻布　露野玉子

里川のながれなつかし石つみて
人とむつびし昔おぼえて

◎　下野　菊地楓子

暮告る鐘のひゞきのかつ消えて
落花みだれぬ夕月かげに

◎　千葉縣　秋波ひて子

紫に燈火かすむ春の宵
少女うつくし白梅のはな

◎　安房　菊子

病みませる母をみとりの夜の室に
にほひつめたき水仙の花

◎　靜岡縣　若菜子

筆洗ふ繪師まだ若き門川の
水うつくしき山吹の花

◎　紀伊　香蘭女史

奥山の大峽にたてる神杉の
杉の木の間に櫻咲く見ゆ

◎　飛騨　殘月女

うつら病みて寢られぬ夜半の寂寥や

○
うつゝ心に冥府思ひ居ぬ　大坂　村瀬蔦子

○
銀燭に姿ろうたき舞姫の
舞さながらや散る櫻花　東臨町　阿部けい子

○
黎明の古塔に寒く星さえて
李の花のいと白きかな　栃木縣　栗原くに子

○
願くば花の流れに夢のせて
龍の都に流れ行かんか　京都　紫　子

○
つれ／＼を籠の鸚鵡とかたらひて
なき姉思ふ春雨のまど　駿河　勝又源子

○
呉竹の小笹にしぶく春雨を
さゝめく神の御聲ときく　塚越俊子

○
友去ると日記にしるして夕暮の
戸による袖をさくら花散る　神田　長井漣月

○
御手とりて雲わけ行くと夢にみて
さむるあかつき白梅かをる　紀伊　糸川みち子

○
金襴の御衣綾ぎぬとり／＼に
燭うつくしき桃のよひかな　磐城　武者雪子

○
月うすう鐘おぼろなる大悲閣
かゝる夕や人僧となりし　筑後　萩　子

○
夕ぐれを思ひみだれて野にたてば
君ます空に星一つてる　長野縣　鹽入優梨枝

○
紐紅き蒔繪の筥に葬らむ
彩羽いためて落ちし小蝶を　牛込　岩谷綠子

○
林檎つむ小車ひきて少女子の
夕靄淡き野を歸りゆく　越後　中村直枝子

○
紫の水美はしき藻のかげに
緋鯉眞鯉の戀もあらなん　滋賀縣　辰井ふみ子

○
海見れば君と住むべき島おもひ
鴛鴦のさましてあこがれてゐぬ　豊後　安部ふじ子

○

花いくる南の障子虻なきて
日は午近く春のどかなり　上総　山田沖子

○待てしばし野の鐘撞くな春深く
鶯に捲かれて夢さめぬ里

○千葉縣　小川芳枝子
姫君の玉のみ車たどりゆく春の村々菜花さきそふ

○岩代　岸野常子
今はとて棺の蓋にうつ釘のひゞきに散りぬ山茶花のはな

○陸中　枸杞子
春の月琴の調べにしたひよる笛の童子の眉繊きかな

○きよ女
觀音の畫像すゝけて唐獅子の置物寒し水仙の花

○名古屋　原田琴子
ともしゝて眉うつくしき女房の源氏よむなり夕顔の宿

○紀伊　桃小路史子
天地に一人の母を戀ひわびてあかつき又もよべの月見る

○兵庫縣　柳田白百合子
若草に夢まどかなる小羊の柔毛にかろう櫻花ちる

○上毛　和田興志子
道のべの名もなき墓に何となく手にせし花を手向けぬる哉

○伊賀　山村志加子
椽側に遊びつかれし猫の子の小さきあくびに梨の花ちる



姉妹　白梅花女

○麹町　藤子
古里の少さき弟を夢に見て乞はれしまゝの鍬送りぬ

○小石川　森田歌子
そを誰か罪惡としいはむ春の野に小さき蝶と童さゝやく

○肥前　深見靜枝
はら／＼と風なき空に散る花を暫時はつなぐ青柳の糸

○越後　河内米子
床に生けし水仙の花の香ぞ高き姉の面影戀ひ渡る夜を

○靜岡　増田大江子
垣一つへだてし宿の梅の花早咲きそめて香りゆかしき

○小樽　梶水仙子
櫻散る田舎の驛の眞晝すぎ駒嘶きて鈴の音聞ゆ

○讃岐國　越茂子
雨はれの雲間にさゆる星影よわが亡き夫の魂にやあるらん

○土佐　潔子
野の末の希臘めきたる尖塔に夕日かたぶき牧場暮れゆく

○常陸　大和田清子
桑の花の末に小高き家見へて背戸のあたりに桃の花さく

○百合子
眞白なる小手をかざして塵の子がみ空の星を數へ見しかな

○紀伊　菊池たま子
口僻の李白が詩を誦し鳥屋めぐる眉毛眞白の山寺の大德

○長府　山中敏子
れぐるしき春のひと夜をうつら／＼ひとり書よむ燈火のもと

○印旛郡　相川みよ子

春の舟綸日傘のせてこぎ出てぬ櫻花咲く離れ小島に
○　高知縣　猪原華子
猿なく檜の風も音たえて冴えにく＼たる霜の夜の月
○　新潟　八重女
山のあなたこなたになかむる冬の月幸あれとのみ祈る眞心
○　近江　田中江雨
岩きませ奈良はよき花咲く所春を讃ずる百鳥の聲
○　孤雁女
小うたひの聲に更け行く春の夜を花の雲間に月はかくれて
○　下毛　不二子
故郷の庭は山茶花枇杷の花うらの小藪は鶯の聲
○　麹町　庶子
似合しと君がみ言よ初島田面はゆげなる姿見の前
○　松阪　岡本しげ子
夕空や礒野のあたり虹消えて羊よぶ笛遠くなり行く
○　能登　坂本きよ子
梅が香を慕ひて訪ひくる鶯のなどて羽風に花散らすらん
○　京都　井上けい子
青嵐館に巡む日は鐘の音のさはやかなりや柿若葉寺
○　下野　河原こう子
打日さす都も鄙も春めきて昨日に變るけしきなりけり
○　印旛郡　細谷榮子
晝閑さに今日も胡蝶を友としてすみれさく野に遊びくらさん
○　千葉縣　横田はつ子
召されたるいくさの庭に子は逝きて寂し學家に翁と幼子
○　和歌山縣　池見俊子
春の青御空妙なる星姫は菫咲く野に窃と降りましぬ
○　巖手縣　千葉なつ子
許しませ病に臥せる妹の爲に手折らむ花の一枝
○　久留米　久野さかへ
選先きの小池のふちに顔出して笑ふ白梅三ッ二ッかな
○　岩代　佐藤はる子
身は一つ心は二つ加何にせん月をながめてわが涙かな
○　山口縣　萩の花
君慕ひ足を萩野にはこばせば淋しく照らす有明の月
○　岩代　青木林子
梅咲ける山里白く日は暮れてかすみそめたり夕月の影
○　鳥取　美代子
初旅に山家の一夜ねもやらぬ枕べ近ふ月かげのさす
○　秋田縣　佐々木岩子
うちやりしまりの行方をながめつ＼ラケット持てる少女うつくし
○　下總　富美江
朝晴れやみどりの空は六十里湖邊に立ちて春の富士見る
○　日本橋　大村澄子
琴ひけば礙越の丘の青樹立葉毎にゆる＼月の影かな
○　岐阜縣　山田はぎ子
ゆるされし流謫の人のふれつきてものさわがしき礙さきの夜や
○　麹町　冷花女
君をおきて我は逝かじと言ひし人の冷き御手も今はとり得ぬ
○　尾張　奥田久江子
牧童がふきすさぶ笛の音やみて夕霧がくれ牛の聲する
○　金澤　山田政子
田舍路を車にのりて行く人のめて＼通りぬ春の淡雪
○　奈良縣　白百合女
み佛の姿さびたるみ堂の内年老いし御坊うた＼ねすなり
○　長崎　山口繁子
川向の櫻の花の咲き初めて早や我が家にも春は來にけり
○　美濃　芳美子
沖つ風あらくなるらん須磨の浦もしほの煙立亂るなり
○　長野縣　小林芳子
よめおくるひとむれすぎてしばらくはうたおちこちの里のおぼろ夜
○　沼津　山田きく子

少女子が羽子板だきて眠りたる枕に近く子猫戯るゝ
○　武藏　青柳彌生子

梅さくや濱の小村の朝雨に船つくる匠の鑿の音かな
○　滋賀縣　菊香靜枝子

鴉も樺林に啼き絕えてゆふぐれ暗き村の春雨
○　飛驒　ふさ子

木がらしの吹き荒ぶ音はさながらに鬼神がはなつ矢のひびきして
○　澁谷　武市靜子

箏の音もいつしかたえて朧夜の月靜かなる花の庭かな
○　千葉縣　內藤とし子

雲雀舞ふ牧場三里は黄昏れて夕日の岡に草笛のこゑ
○　長野縣　豊田たかの

うつくしきさゞれ小貝をあつめつゝ守り子も眠る磯の小春日
○　陸奥　柳田象子

朝霞黄金の鈴の音すなり春の女神の立舞ひやすらん
○　四谷　涯子

雁なりて故國へかへる道すがら旅寝の夢になき母を見し
○　北品川　金竹かほる

舞姫の扇の話に夜は更けて春雨さむき磯の邊の宿
○　上毛　鹽原幹子

宴に絲竹の音に誘はれて何時しか來ぬる花園の傍
○　廣島縣　岡田秀子

心あらば今日はな降りそ春雨よ御墓に手向けし花の濕すらん
○　備中　唐井富子

いかばかり清き心ぞいさら川にこせどすめる水の底かな
○　伊勢　山川すい子

百頭の駱駝率ゐし商隊の横ぎる沙漠日は暮れむとす
○　相模　茂子

ほゝゑめば何を嬉しの思出と問ひます君も笑み給ふかな
○　越後　長谷川田都子

目じるしの竹さへ雪に埋れぬいづこを掘らん室の水仙
○　鳥取縣　門脇まさ子

朧夜や若殿君の駒召すと下司どもあまた灯ともして居ぬ
○　淺草　宮本はま子

來て見ればなぞ風さむき春日野にひとり春めくうぐひすの聲
○　播磨　琴子

とぎすます月影寒くさえ渡る軒端をたゝく水鷄の聲
○　備中　白ばら女

朝まだき野邊の霞に打ちつゞき我家の梅風かをるなり
○　備後　市岡ます子

悶ふれど我が詩はいつにならずして有明の月うすれ行くなり
○　栃木縣　千代子

妹よたゆまず學べおこたるな末は汝の德となるなり
○　秋田縣　佐々木千代子

をり〳〵に琴をひく音の音やみて燈あはき柴垣の庵
○　群馬縣　小暮たつ子

貴人と手を携へて語らひし夕べの夢のさても戀しき
○　札幌　村子

春の野に主を待たんと咲く菫めをと蝴蝶のそを守り居る
○　本所區　上原君子

春の夜の月をかすむるそらだきは誰が袖ふれし庭のうめが枝
○　下谷　白梅女史

ゆきかよふみちは落ばにうづもれてさびしさまさるふゆのやまざと
○　福岡　田中あい子

たのしかりし昔をしのぶをりからに友戀ふかりか鳴きわたりゆく
○　津　陽炎子

春雨にやゝ眉こもる青柳の下枝にかゝる三日月あをき
○　紀伊　桃村女史

山かげの道の霜には跡もなし樵夫も今朝は通はざるらん
○　岩代　菅野和子

いゆるときなしとの病えてし身の死をまつ三年海人とあそぶかな
○　神戸　高橋紫峰

南窓の落陽にして暮を圍む鏡の面のいと色めきぬ
○　能登　砂川とも子
牛曳きて踊る少女の笠の上に夕日かゞやき桃の花ちる
○　松江　たけ女
犬の聲遠く聞えて又絶えて夜靜かなり山もとの里
○　大隅　田中みのる子
くもりなく夜雨も晴れて唐崎の松にかゝれる朝がすみかな
○　宇都宮　三輪龍子
霰の初音もがなとまちにしをはるめきもせてあられふるなり
○　群馬縣　芳山和歌子
うつくしきはれぎよそへるうなゐ子のまりつくうたのふしぞおかしき
○　遠江　中島女史
梅の花の盛も今ははやすぎて哀れ春雨しめ〳〵と降る
○　豐後　大野直子
枯はてし野邊の尾花におく露の霜になりゆく秋の暮哉
○　豐後　林紫潮女史
山里も軒の松風音はせて柴のあみ戸に春雨ぞふる
○　豐島　河野よし子
父は逝き姉また逝きて悲しきに母上おもきいたづきの今日
○　近江　大橋良子
秋の野のすゝき尾花も霜枯て招かぬ冬の早もきにけり
○　安房　花月女史
目も耳も心も人に通はせて文の林のけふのたのしき
○　備中　菅森定子
おぼろ夜やつめたきみ手に抱かれてねむれる靈もよみがへるらむ
○　能登　天濵子
櫻咲く木の間を縫うて暮の鐘消ゆるかたより月のぼりけり
○　羽後　渡部みや子
汝が靈を室に飾れり汝が好む桃の花あり飾れ亡き妹
○　大阪　白露女
別れにと君の吹きにし笛の音は川にひゞきて春の月寒き
○　錢函村　靜哉女史
初雁や都の旅は急ぐとも今宵は野田の浦に宿せよ
○　筑後　紅雲女史
曙の光明をあびし梅が枝に太古の樣に鶯なくも
○　北海道　久保霞涯子
櫓の音ひくう舟はかへりて漁の村ところ〳〵に夕けぶりたつ
○　備中　林靖子
鶯の音に誘はれて山深く思はず探る梅の初花
○　河合菊子
風吹けば蓮の浮葉の露散りて涼くなりぬひぐらしの聲
○　牛込　梧葉
山のはにたなびく雲をながめやりてふもとのさとの友をしぞおもふ
○　金澤　山上錦子
のどかにもはたうるはしき若草の霜解の庭に萌え出てにける
○　能登　森田美津子
身はいくさ心は公事に捧げたる君が績は神も護はむ
○　筑前　田中とよ子
佐保姫の下ります野邊に少女子の春草しきて詩集ひもどく
○　下野　兒島とく子
ふく東風に梅の下紐ときそめて鶯誘ふ賤が袖垣
○　水戸　島田君子
浦風に天女は琴を調ぶろや霞ぞかゝる磯の松原
○　久留米　中原綾子
花の夜を夢にし逝ひぬやさ歌の緒琴秘めますやさしき君に
○　若狭　澤田あい子
郊歌に餘韻殘して少女子が田道を急ぐ黄昏の頃
○　相摸　中里響花
御像を刻む工みが鑿の手の靈香にねむる白き蝶かな
○　失名
靜かなる深山の奥に世をさけて浮世の塵をはらはなむかな
○　神奈川縣　志賀波子

高嶺には夕日の影の消え果てゝふもとに見ゆる賤がかゞり火
○　上野　大沼なみ子

紅梅の一枝いけし床の間に朝日ゆら／＼籠の鳥啼く
○　千葉縣　柴田まさご

月見てと互にふみしてこと問へば心は同じおもひなりけり
○　尾張　宮田愛子

明がたの月のひかりにまどひけむねぐらながらに鶯の鳴く
○　橫濱　山之井せい子

散る花に池亭夜闌けて管絃の音漏れ出てぬ春の新月
○　滋賀縣　坂里輪子

わが胸の愛戀の甕を汲みてこよひ惱みの甘酒に醉はまし
○　美濃　長濱鷗子

春ゆくと名殘おしげに少女子はあらゆる蝶を針にとめけり
○　近江　藤野靜子

經讀みて高根を下る修行者の白衣のそでに花散りかかる
○　岩手縣　高橋洗子

月冴えて更けたる夜半の風寒く賤ヶ伏家に經の聲洩るゝ
○　山形縣　相田きち子

なつかしき玉章みればいとゞしく君のみ影のしのばるゝかな
○　羽前　溪外子

うらにはに一もと殘る花すみれやせたる蝶の去りもやらぬよ
○　磐城　井月川美子

菫咲く野末になびく彩雲を羽衣見しと妹の云ふ
○　奈良縣　中富よしみ

鐘樓のきざはし下る老僧がやさしきみ手に花すみれかな
○　藤枝　石神喜惠子

の思ひ消ゆるとならば常闇の蛇の穴にもひそみてむはや



夕暮　神田　長井渕月子

美き朝を渡しまつ間の手すさみに柳の糸を結びても見つ
○　遠江　白露子

うらゝけき朝の日うけて高樓に鸚鵡とかたるよき春の人
○　茨城縣　石塚しづえ

ちら／＼とまだふる雪は寒けれど早や梅が枝に鶯のなく
○　七尾　森田茂子

ぬぎすてしわがふたそでの牡丹に春日のどけく胡蝶舞ひ來ぬ
○　土佐　大原政美子

春の川せきれい一つとぶ見えて人なき舟の雨にうたるゝ
○　岩代　根本松江

朝日さす窓に少女の髮とけば戀知れとてや鶯のなく
○　筑後　吉開良子

里山に咲くや躑躅の下陰を春川ゆるく西に流れつ
○　和歌山縣　生馬かめよ

うまひして君がおもかげ夢に入り目覺めて後も胸のおどれる
○　湖南　綠波子

後向きそと差し招く影若し離室小暗き白梅月夜
○　青梅町　鈴木雪子

春うらら蝶一つ舞ふ野の道を櫻かざして郵便夫行く
○　信濃　大井靜枝子

猿啼く深山の奥の溪川に影を映して姫百合の咲く
○　岐阜縣　中島重子

春の野に勇める駒の嘶きやれむれる蝶の夢さますらむ
○　下野　梅澤哲子

野の春の姫の手すさび興あれば世を永久に浮れて見たき
○　周防　津田貞子

蝶一つ飛びゆく末をながむれば菜の花さけり繪の如き家
○　みどり

思ふどちさくら狩りしてゆら／＼と夕日をふんで家路をぞゆく
○　福井　久保村壽榮子

福井　荒木むれ子

○春風に心まかせて青柳のなびく姿のいとゝもやさしき

千葉縣　槳子

○散りて行く梅やは何か惜しむべき亡きせ戀しき須磨の夕ぐれ

陸奥　若生なか子

○三年ぶり乳母が宿など訪づれて昔語りに夜は更けにけり

陸奥　若木いつ子

○秋にもあふろゝ思舟に乘せてなぎさの人と手を取りかはす

飛騨　秀子

○誰がために心づくしの晴衣かもほゝ笑みつゝも針はこぶ君

京都　森島貞子

○郎君の奏づる琴の糸切れて月の此宵を杜鵑鳴く

新田　徽音子

○白雲のちぎれ〳〵て空とぶ日都の空は赤く染まりぬ

名古屋　富木靜子

○三年つき春來にけらし遠山の松の梢にかすみたな引

阿波　從舟

○灯ともしぬ文書く夕の春雨に窓の紅梅しづくするころ

小石川　きみ子

○たまはりし蕾の梅もほゝ笑みぬさびしうやせし人のまくらに

出雲　白菊子

○きのふ見し枯木もけさは時ならぬ花咲きにけり初雪降りて

日向　濱砂正山

○夏の夜の涼しき風にさそはれて雲間を出づる月ぞさやけき

周防　岡部佐保子

○月おぼろ春日の宮の燈明の影になきよるさを鹿の聲

德島縣　紫花

○歌におきてふと見し鏡のわが影やほつれ毛何を淋しうゆる

神田　太田昭子

○母います國へ百里の長旅や夜每々々の夢も通ひて

岩代　菅野和子

なき母を野邊におくりし此夕べみやげまつ子のいとほしきかな

本郷　西岡古代子

○烟立つ農家に梅のほの白し馬に鞍おく有明の月

備後　石野子

○漁村や籬ならべて干す魚に陽炎もえて梅の花ちる

名古屋　河村林子

○亡き父のおくつき深き苔の上に今宵故山の月やすむらむ

山口縣　鼠子

○身はたとへ巷の宿にすめばとて心は如何でちりに染むべき

福井縣　吉田千代子

○霜白く月も氣高く冴ゆる夜を梟啼くなり産土の森

小石川　はな子

○夕ぐれて西山錆びしむさし野はしばし偉人の死を想はしむ

尾張屋の人

○華やげる御音樂ゆへにいとさむき涙ながすなとがめ給ふや

周防　白梅女史

○流れ行く小川に朧の月見えて堤のほとり櫻散るなり

愛知　渡邊俊子

○夕鐘は一つ〳〵に寒を生みて吹雪亂れぬ野の枯木立

福岡　花子

○こゝろなき濱の松風音立てゝことふるものは白波のおと

長崎　峯時子

○咲き匂ふ花のあしたを訪へば持てなし顔に鶯の鳴く

愛媛　昌子

○文机はほのかに蘭の香みちて歌書く姫がみて美しき

本郷　中村ふじ子

○牛ひきてかへる童の歌ひくし桃の花散る野川のほとり

八代　岡本篤子

○久方の月の桂に咲く花は嵐に散りて雪となるらむ

橫濱　大村鈴子

○栗の戸におち行く宵の月影や笛の音遠く栗の花ちる

○　備中　笑志蕗　みつ子

あたゝかき情のはらからが心に似たる今日の雪かな

○　長門　原田春子

障子破れひさしかけたる賤が屋はあられふる夜をいかにぬるらむ

○　京都　堤　雛子

春雨の晴間をしばし梅が枝に今日も來て啼く鶯の聲

○　成田　菊枝子

錦着て踊らんものと契たる心に戀し蕨折りし山

○　大津　杉原稚園子

戀ひわびぬいさゝ小川の水くみて梅咲く里に歌よむ人を

○　下總　高木美衣子

冬ごもり春や來にけん梅が枝にこゑもゆかしく鶯のなく

○　名古屋　淺野米子

山遊びこだまにひゞく柚が唄一つ覺えて家づとにせむ

○　濱田　三明千鳥子

我がつみし若菜の粥にいたづきの母の笑みます初春の朝

○　下總　關　ゆき子

歸網半ば乾きぬ海士の里鶏鳴きて寂靜かなり

○　龜井戸　鵜澤董子

春姫の快樂の傳か鳥の聲御神のかたり桃よ櫻よ

○　長崎　咏志され子

天の川星と星とのふるゝ如鈴虫しきる星月夜かな

○　淺草　藤井葉津子

朝露の草野の小徑たどり來てなでしこ摘める少女見し哉

○　京都　白菊子

行く末はいかになるらん白菊の露と消えゆくわが身なるかな

○　上毛　磯貝喜江子

家をいでゝ三年の冬をたよりなき兄君思ふ木枯の夜や

○　大和　桑山村雨

柚人の斧を枕にかりねしてひる靜なり鶯のなく

○　河内　吉川文子

朝ぼらけこぼるゝ萩の白露は夢さゝやきし星のしづくか

○　下總　神田笑香子

惱む胸に芽ふきぬ春雨によう似しものか君が言の葉

○　埼玉　たにまひめゆり

いそぎゆく道にしあれど清き香にすゝみかれたる花の下みち

○　下野　さゞれ子

枯野十里落つる日みれば聖者世を去ると覺えて心淋しき

○　越後　藤田りせ子

三年ぶり家に歸りし姉君の面やつれたり秋の夜の月

○　神戸　櫻井白蘭

道のべの石の佛に手向たる花に胡蝶の羽やすめけり

○　あらゝぎ

顔に笑み心に泣きてさらばとて別れし野路のさて辛かりき

○　横濱　吉川香都子

追分のよき聲遠く春の海八十島かすむ入會のかれ

○　信濃　なみ子

紅梅のほのかに香るまどによりて歌誦し居れば蝶まひて來ぬ

○　埼玉縣　野口惠都子

いさゝ川金波銀波のさゞめきて端山に昇る春の夜の月

○　神田　阿賀多浮雲

埋み火はむなしく灰となりにけりあが待つ友は未だ來ずして

○　伊豫　得能光江

幾度か合せ鏡にほゝ笑みぬ人にかくれし丸髷姿

○　南總　原田鏡月

鶯の雛うむ夜かや薄霞春の林を白うつゝみぬ

○　和泉　津田浪子

山里の梅の林は咲き匂ふ花の光におそく暮れぬる

○　愛知　竹下季子

母逝きてやせし妹をと抱きて貰ひ乳に行く冬の夜の月

○　石見　石田まさ子

文机の硯の海に散りうかぶ花は軒端の櫻なるらん

○　三島　加藤清子

鐘の音に梁の花一路たそがれてかすみにけぶる江南の里

○　大阪　池端千代子

なつかしき君ます空は遠けれど夢路は通ふ五十三驛

○　薩摩　山本笑子

春の日もとゞきかれたる谷かげのやせたる岩に梅が香寒き

○　上毛　青木守子

山里は谷間をいづる鶯の聲より春のたちそむるらむ

○　柏木　関本しげの

淋く秋の詩も默もなき夕ぐれを寺の銀杏葉風なきに散る

○　伊豆　上原雪子

鶯に夢破られて窓押せば春を忘れぬ梅の花さく

○　成田　波賤女天波

稚兒寢せて夫待ちわびの炭櫃火しめりて雪の夜更けぬ

○　本郷　多滿子

冷えのころ雪かわらじか朝の靜に咲きし白梅花の香寒き

○　小石川　北野正子

朝ぼらけこぼるゝ萩の白露は夢さゝやきし星のしづくか

○　上毛　かるかや

そと推して花の雨きく窓の戸に鳩なきよりぬ行く春の夕

○　下總　相川雪江

古寺の花散る宵の尼一人何思ふらむ笑みて立ちませる

○　紀伊　岡本かをる子

櫻花さく度ごとに思ふ戲花すきませし亡き姉君を

○　溪　秀

一枝をかざしにせんと思へども手折るもつらし野邊の白菊

○　小笹とく子

窓近き梅の香りにさそはれて今日も來てなく野べの鶯

○　三重縣　弁上しん子

故郷の池荒はてぬ燕子花ひとつ二つは咲きのこれども

○　千葉縣　馬場美千代子

さく花のかげもかすみて角田川おぼろ月夜を舟下りゆく

○　岡山縣　堀野白萩

なつかしき故郷思ふふみの窓月ほのぐらうかほのぞきこむ

○　陸奥　堀口不二子

梓弓春たちかへる不二が嶺の霞む方より朝日かをりぬ

○　下野　入江靜子

うらわかき少女の香をやたづぬらん友なき蝶のひたすらに飛ぶ

○　下野　瀧澤茂子

那須がふもと靜に暮れて河原松のかすみに宿る鬼怒の瀨の音

○　奈美木聚子

亡き夫を葬送りて歸る磯の路今宵は雨か松に聲なき

○　福岡　白百合子

鯨見ゆと船長舟のかぢとりぬ夕雲黃なりたそがれの海

○　本郷　緑早苗

鎌倉や古跡訪ふ夕べ燃ゆる雲紺青の海暮の鐘なる

○　備中　馬越昌惠

櫻貝ひろへる君がむらさきの袋ゆかしき春の日の磯

○　岡山　吉弁貞女

母君の死體にすがる妹をすかして抱く冬の夜の月

○　茨城縣　齋藤ちか子

空はまだ霞もやらず風冴て雪げにくもる春の夜の月

○　廣島　ちどり

小琴彈く君が御胸の秘め事と散りてみだれぬ紅梅の花

○　長崎　愛子

夜の讃經をはりてねやに入る頃を今宵も水鷄又訪るゝ

○　安藤水仙子

冬は來ぬ冬はきたりぬやがて今春のかへらむ冬は來りぬ

○　遠江　山崎清江

谷川の清き流れぞなつかしき浮世の事は絶えて知られば

○　讃岐　香川棠女

むらさきの霞の中に白梅の花咲きみてり有明月夜

○　下総　近藤たけ子
花やかによそひし姫が紅のいろ濃く咲ける床の紅梅

○　新潟　絲柳女史
朝日さす山べの松の霞きえて賤がふせやは春を知るらん

○　出雲　世良富美子
嫁ぎては戀しさまさる乳母が家 此頃桃の盛りなるらん

○　靜岡縣　絹村かつ子
山兎犬に追はれて逃ぐる如 ながれてはやき月日なりけり

○　山口縣　渡邊うきの
花咲きぬいざ見に行かむと思へ共 罪深かしや母まさぬ春

○　德島　坂野白露
行きくれて入れば鐘つく山寺の夕べさびしき音低うして

○　富山縣　諏訪芳子
なり〳〵は尋ねきませや川一つ渡れば見ゆる柳ある門

○　芝　淺川光子
海へ二里町へ三里の姥が家に 緋桃ながめてゝ母得しこゝろ

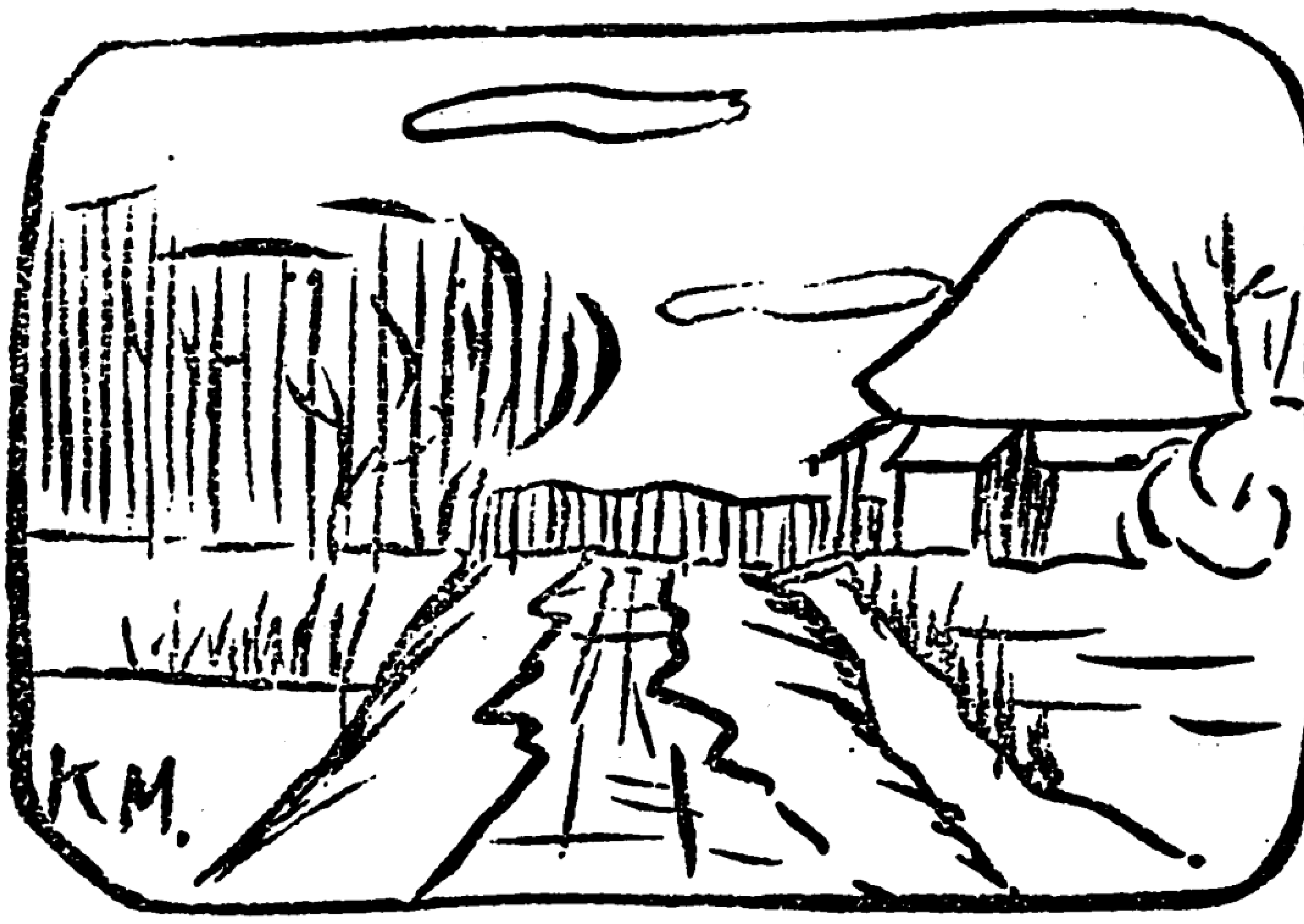
○　盛岡　白桃
ねざめして亡き母忍ぶ春の夜半 靜かに花の散る音を聞く

○　下野　涙泉女史
たよりなき身の今更らを一人泣く 軒ばに翔し春雨の音

○　本所　海野柳子
春の野に蕨摘むなる少女子の袖におちくる夕雲雀かな

○　府下　鵜澤ぎん子

のどか　郡山　小林みれ子



少女子の取りやおとせる白菫ぬるめる春の水に流るゝ

○　越後　五十嵐みつ子
少女等がひれもす遊ぶ小川邊の一本柳今くれんとす

○　越後　五十嵐美波
母君はいかに待ちわび給ふらん汽車より望む故郷の山

○　千葉縣　木内胤子
我れのみは都にあれど故里の母上いかに冬の夕暮

○　仙臺　松村敏子
獨り居て書に親しめば靜か夜の窓に音づる優しき梯

○　下野　香月
冬かけて籠にかひおきし鶯の初音なくなり春立つらしも

○　保土ヶ谷　川名かつ美
夕日落つる方に我君ましますと思ひも遠く眺め入るかな

○　神田　樋口まさ子
梅の花二ひら三ひら春風に輕く散りぬる山寺のには

○　長岡　みさを
打つゞく山路十里の大吹雪 老たる尼のずがた消えゆく

○　牛込　落合いつ子
ふる里に琴を習ひし姉君と別れまつる日を雪ふりしきる

○　秋田　みち子
門松や戸毎々々のにぎはひは御代のさかゆくしるしなりけり

○　滋賀縣　川島嶺子
川ぞひの花咲く小道さまよへば眠れる蝶の夢をやぶりぬ

和歌

○　宇治　なみ子
ふたゝびは見じと別れし君なれどなほもまよひの夢に逢ふかな

○　薩摩　資島たみ子
春霞たなびく山の麓をばめぐる小川の花浮かべゆく

○　佐賀縣　東島峰子
村十戸戸毎の蠶眠ひて長閑なる日を鷄のなく

○　三河　中島鶴子
のどかにも若ぐさけぶる野の御堂幼な心の願もありぬ

○　德島縣　堀　蘭窓
打ち渡す里わの煙うすれ行きて四方の山邊に霞たな引く

○　京都　千　鳥
うす雪に枯枝を梅とみまがうてうぐひすなけるきさらぎの雪

○　兵庫　梶原玉子
きゝまさば佛もさぞな哀れまむおぼろ月かげ礼すつる尼

○　近江　馬場みつ子
冬枯のねろて木立のひま／＼に沈みし鐘の音聞えくる

○　名古屋　二三四子
春立ちて花笑へども樂しからじ我君にさへ捨てられし身の

○　金澤　木原蓮舟
里の子等集ひより來て村はづれ雪つぶて打ち戰さ事する

○　横濱　しげ子
新年の床のかざりとかをるなるいけたての梅の莟けだかき

○　廣島　河村たもつ女
獵賀ひて冬枯山路歸りくれば夜嵐寒く狐なくなり

○　岩代　三浦たい子
樂しき蜜柑の色に甘き味にさて暖き紀の國おもふ

○　岩代　伊藤白ゆり子
病癒えし母をたすけて樂しくも今日三年振り園の花見る

○　近江　梅村幸枝
あら玉の年のひかりはあきらけく賤士までもかゞやきにけり

○　下總　川崎郁子
御墓に襟かき合せうなだれぬ落花の音のみ聲に似たる

○　高知　岡村はるえ
錦地の彩にも似たり春の日の御空に消さき夕榮の雲

○　石狩　初子
あづさゆみ春のみ空に天姫のみうたのどかに響ひ渡る

○　備中　佐藤蝶子
里の子の紙凧飛す丘の上に陽炎もえて日は長閑なり

○　周防　花散里
黄河の水萬馬飲いにし百年の昔をそ慕ふ榆吹く風に

○　安房　鳳足藤子
うす日をばなゝめにうけて羊よぶ人影淡く野はくれむとす

○　新田　直子
初み爐火桶ばかりのこひしきに先思はるゝ君が上かな

○　沼津　飛奈久枝子
春雨の晴れ行くあとの小山田にすだく蛙のこゑしきるなり

○　筑後　萩子
筐の葉に戀しき君がみ名かきてながしてもみぬ思ひあまりて

○　日本橋　持田とし子
消え殘る高根の雪にみがゝれて照せば寒し春の夜の月

○　群馬縣　ひめゆり
工場の夕餉の汽笛響く頃は一入戀し母います空

○　大阪府　守部きみ子
春なれやいつしか霞むみ空より聲のみぞしてひばり落ちくる

○　埼玉縣　西田壽惠子
かくれ家の竹の林に音づれつ世には知られぬ秋の初風

○　神戸　大谷百枝子
はら／＼と降る白雪を手に受けて母のみ墓にそなへけるかな

○　向島　林芳江子
緋桃咲く雛の御殿火影ふけて鼓そとなり胡蝶舞ひたまふ

○　靜岡　田口靜子
春來れば花は變らず咲きにけり主人いづこに花見ふらん

○ 大阪 伊藤[illegible]象

別れ行く流草のかくれし岡のべに時雨をさそふ雲たち登る

○ 高知 みつ子

菫つむ少女二人を織りこめて錦の野邊はいやはえにけり

○ 豐後 紘月子

面影は野邊の嵐に散りぬともなほのころなり水莖の跡

○ 品川 福澤彌壽子

廻廊に灯更けし春の夜を局が部屋に衣ずれの音

○ 福井縣 秀美

我が庭の梅も盛りになりけりとまきこめてやる春の文かな

○ 四谷 友野はる兩

岩清水落葉がくれに音のして北へながるゝ冬の谷かな

○ 牛込 河村輝子

時雨めく露の流るゝ枯野路を母の宿に添ひて行くかな

○ 上野 齋藤花月子

わらんべのしもとのがれし小羊の遊ぶ野づらに春の風吹く

○ 讃岐 茂子

妹が雛抱きて眠りたる枕邊近かく桃の花ちる

○ 大阪 兵ゑん子

君待てど君は來らず雨蕭々机によれば燈火暗らき

○ 埼玉縣 近藤登久子

梅に歌ふ鶯の音に誘はれて[illegible]月秘めし琴かなで見ぬ

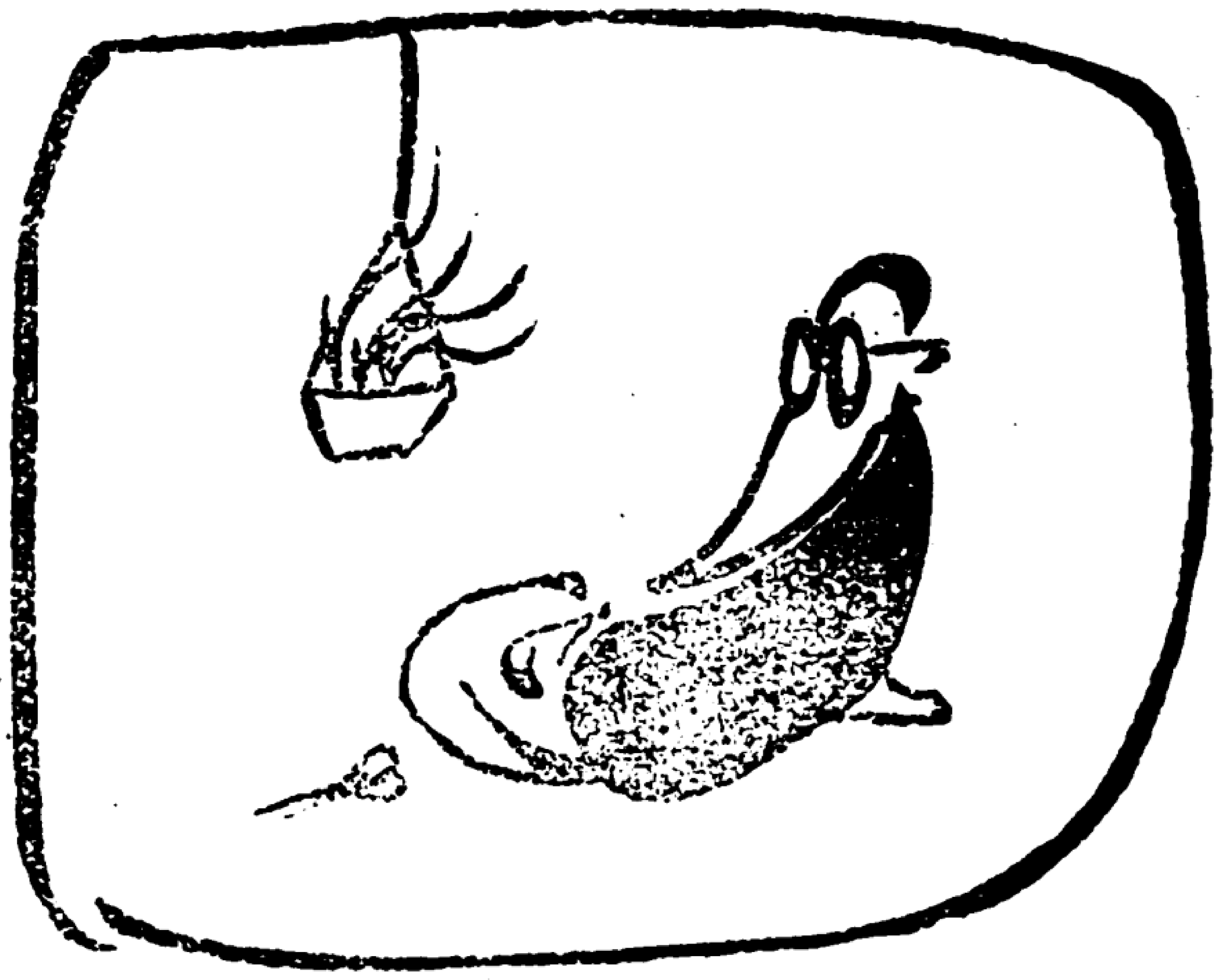
○ 陸前 高橋咲子

日に月にやつれゆく身をなげきつゝ花ちる窓に歌おもふかな

○ 大阪 濤美

紅梅のかをれる宿に立ちよれば誰がすさびにや琴の音きこゆ

○ 府下 森田貴代子



押花の先生　巣鴨　好子

御社の大廟前の眞清水にやせたる人の面洗ひなる

○ 青森縣 高山武枝子

くり返しくり返しつゝ拜せども口開かぬ文のかなしさ

○ 横濱 井上久子

朝な夕な露の情に色添へていつしか結ぶ櫻の實かな

○ 美 林菊子

花束につや文つけて流しやりぬ君居ます里は此川下よ

○ 京都 松井靜枝

戀の宛が暗路を照す光りこそ理性の外に何かあるらめ

○ 麹町 川村いく子

紙燭して君まつ宵をうづらなきぬ星のつぶてに柴戸あけよと

○ 出雲 世良むらさき

牢獄に苦役の父を思ふ哉木枯寒く月凍る夜を

○ 越後 花田みち子

一日をば花に暮して梅が枝の鶯友に歌競せん

○ 肥前 深見靜枝

鶯は鳴ずありとも我が庭の梅の木末に春は來にけり

○ 栃木 眞子

おく霜とばかりつめたき友なるにわすれかれてぞ夢にまで見る

○ 下野 鈴木露子

山路をめぐる十戸の村にして灯び頃を細き雨降る

○ 横濱 孤舟

いざさらばしばし別れん谷の水やがて逢ふ瀬は春の海原

○ 阿波 關蓉子

美はしき露はその身の仇なるをいたくなゝきぞありか知られむ

○ 兵庫縣 中島八重子

野添の學の調べも靜まりて梅花散り月おぼろなり
○　佐世保　関　千代子

酒五升芋三升の誇り笑野守若うて望をもたぬ
○　大阪　靜　香

手にとりて紙に向へばむら／＼と黒雲わきて龍の上りぬ
○　淡路　洋　萩　菜

散りはてゝ梢さびしき山の端に影するまじくすめる月かな
○　神戸市　楓　子

朝夕になれし小袖や藤衣ぬぎ去る今日の涙ゆるせや
○　肥前　柳原　初音

集い來て兒等が造りし箱庭の小さき城は雨に崩れぬ
○　佐賀縣　陣内　登代子

大宮の御園に匂ふ梅の花今年も春に魁にけり
○　麹町　淺井　千鳥子

み髪梳く母が笑顔の其の下に聖者に似たる水仙咲くよ
○　本郷　朝井　千とせ

若水を汲む手止めて新年の初日仰ぎぬ松の葉ごしに
○　常陸　あさ子

雪はまだ鹿の子まだらの谷間より初音をもらす鶯の聲
○　七飯　鋭子

月こほる夕べ淋しき山道を母のためとてくすし迎ふ
○　郡山　渡邊　美輪子

靜けさに心もすめる我宿の柳の糸にはる雨ぞふる
○　大阪　野崎　麻須子

梅の花こけむす庭にほころびぬ鶯さそへ香のちらぬまに
○　土佐　中山　翠美

年若て今日古里に歸れ共笑みてむかへます母もなしとは
○　安房　斎　美子

朧夜の月の光りにほの見えて軒端に薫る白梅の花
○　大和　いく子

飛ぶ蝶に我身はなりて咲く花にねぶると見しは春の夜の夢
○　岡山　三村　東香

霜冴ゆる曉深く君が方吾妻尋ねて雉子鳴くなり
○　相模　白梅女

君がけふいでたつ道の遠ければ惜しむ名殘の果も知られず
○　北越　渡邊　よし子

あゝ君よそれしき事に泣きますな泣きて根のはるゝ世ならず
○　伊豫　福井　まゆり

花笑ふもとに老若稼ぐ見ゆ平和みちたり五十戸の村
○　美濃　金森　文子

梅かほる軒ばの花にうつろひて窓にかすむ春の夜の月
○　土浦　靜　子

朧夜の夢に見るこそ戀しけれ逝にし姉が喪衣の御姿
○　熊本　德久　[illegible]子

さしのぼる朝陽にそむく我はしも涙の袖をほすよしもなし
○　内之浦　竹中　ため子

風よ吹くな波よ荒るゝな心あらば海ごしの母を待つ身哀れと
○　神戸　いてふ子

うごきなき御代に根ざしゝ姫小松千代經む色のいちじるきかな
○　佐賀　副島　まつ子

緋桃ちる窓の椽に祖母君とかちかち山を語るいもうと
○　大阪　妹尾　正子

手をとりて共にかたらむよしもなし海山とほくへだてたる身は
○　京都　田島　かほる子

霜の降る夜を久しきいたつきにひとり淋しく月を見る哉
○　出雲　竹谷　はる代

出雲路や御神の聖か白梅に曙近く鶯なけり
○　下野　福登見　紫泉

小牛追ひ家路を急ぐ賤見えて那須の大野も日は草に入る
○　福岡縣　春子

ふる里の母なつかしみ窓に倚ればむれにしみいる夕ぐれのかね

文藝遊戯

花ことば（課題）

一等　野の菫

北海道天鹽留萌村十三　相原壽美子

私は風寒き北海の野に住むで居るつまらぬ野菫で御座います。春の柔き風がそよ〳〵と吹きますと私は急いで寝床を離れ春の神樣の處へ御挨拶に出かけます。神樣はにこやかに迎へられ「今年も例年の通り美しう咲いてお前の天職を全うなさい。たとひ斯樣な荒野の端でも心は聖くして」と仰せられます。私共はいつも此御言葉を忘れないで永く此地に聖く美しく咲くつもりで御座います。

花の神聖（賞品造花、價格五十錢）

二等　花と花

八王子八木町　井澤菊江子

ちよいと、蒲公英樣何處へ行くのと聲をかけたのは春野菫子、紫紺の袴に廂髪の高襟姿、おや菫樣暫く、いつお咲きなの、私今朝暖い春風に誘はれ蕾を出たの貴嬢は、私昨日よ今堤の櫻木子爵の園遊會へ行く處、あら私も行くの餘興は蝶子樣の舞踏蜂子樣のピヤノ活人畫は鶯宿梅よ。美しき二人の姿は櫻木の門に消え、小鳥の音樂につれ花々しき會は此處に開かれた。

花のハイカラ（賞品造花、價格四十錢）

三等　櫻と菫

芝區神谷町二十九番地　恩田利子

櫻「此頃は大變暖かになりましたね、私もうれしくて今日はお化粧をして居ますよ。

すみれ「私もあなたの下に日なたぼつこをして居ます」

櫻「ほんとに春は善い時節ですね。今に博覽會が始まつたらば皆さんと御一所に參りませう」

花の東京（賞品花簪、價格三十錢）

四等　梅

新潟縣南魚沼郡六日町　岡部つぎ

私は、梅の花であります、四五年前までは、田舍の植木屋で窮屈に育ちました。ところが、ふとした因緣から、その後は、こゝへ、御厄介になる事となりました。こゝへ來てからは、廣いお庭で、櫻雄さんや、あやめ孃などゝ、日々樂しく暮しましたので、のびのびとふとゝました。私は、これほど、嬉しいことはありません、それて、私は、毎日春風さ

んと鶯さんとが、おとづれるのを待つてゐます。

花の境遇（賞品圖書切符二十錢）

【五等】蓮華草

長崎市飽之浦七四八　木原すい子

私は此の畑の中に咲いて居る蓮華草で有りますが此の頃はどの御友達を見ましても、なか／＼見事に咲いておいで成さる、中にも向ふのお山の櫻木八重子さんなどは、ほんとに何ともたとへ樣のないほどおきれいなお姿、其に引かへて私等はよう／＼こふして咲いて居れば、いぢのわるい百姓のあしにかけられ、こんな不幸な物が又と有りませふか、今日はめづらしく畦から可愛らしいお孃樣方からほめられて、紅葉のよふなお手にのせられたので、うれしくつてゆめのように御内に上りますと、三十分立か立ぬ間にもう御庭にすてられて、ほんとになさけなふ御座いまへす。

花のかなしみ（賞品圖書切符十錢）

秀逸

蒲公英　名古屋　西脇笛子

私は、皆樣にたんぽぽ、たんぽぽ、と云はれまして堤や小川の辺に咲きますと、すぐ皆樣にちぎられます。私も櫻樣や梅樣のように、お孃樣のお机の上に遊ばして頂きたいわ。

櫻と梅　大阪市　東柳子

或春の長閑な日、櫻が散歩して居ました、すると丁度其庭へ出て來ましたのも櫻です、其櫻が言ひますに、オイ櫻さん此頃はハイカラさんわ皆百合とか菫とか名なお付け遊ばして、わたし等の話は無い樣だわ、すると又一ツの櫻わ、そーです、けれども、又花が咲いたらハイカラも、バンカラも狂うて來ます、そんなに落膽するに及びませんと。

山蘭　丹波　糸子

私は菫さんや、たんぽぽさんよりは少し早う咲く色も香もない山蘭の花であります、昨日迄は鎭守の森のうらさびしい所に咲いて居りましたが、この優しい御孃樣の御目にとまりおゝ愛らしの花、山蘭よとのうれしいみ言ば給はり、今はこうして立派な六疊の書齋の机上におかれる身となりました。

白百合　淺草　梧葉

私は何故谷間に生れたのでせう。空飛ぶ鳥と流るゝ水の外に友も無く、「あゝつまらない」とかこちながら白百合は首垂れた。ふと我に返ればいつか、眞珠の樣な露もて身は飾られ見るから美しい。「あら奇麗な、私は何故あんな事云ふたでせう。塵の世に出れば天から授かつた衣は汚れ首飾りも穢れるであろうに。

菫　小石川　北澤ふさ

或る暖かい春の日に野の菫が紫の細目を開いて嬉しさうに云ふには、「あゝ私ほど幸なるものはない孃さん方が摘草にくるとすぐ私をとり細い奇麗な手で籠の中にいれて下さる、又誰でも可愛がつて瓶にさして机の上の飾りにしたり、押花として長く殘してくださつたり、根ごと取つて御庭に植ゑられて毎日オヽ奇麗だ美くしい等と人に樂しまれ、香の汁をしぼつてスミレインキとなつて美くしい詩や和歌を書いたり、香水となつては人に重寶がられます。野の花と云へばすぐスミレを思ひ出される位何處の國でも私の名は知られて居ります。

梅　靜岡縣　鈴木多歌美

お庭の梅の理想を問ひましたら、左の如く答へました。私は、こんな暖かな土地はいやよ、もつと寒い、北海道の樣な所に生へて、吹雪にさんざ當てられ、しまいには、雪で幹が見へなくなるまでになりたいの。そして皆人が、あゝ可愛想に、蕾の中から此有樣では、とても花を開き想もないと、云てる中に、ヒヨツクリと雪を破て咲き度いの。

露草　福井縣　片山千里

姿しだつて菫と云ふ名だし、美しさは菫さんにゝ負けませんが、詩人も文士も見向もして呉れません、百姓のお爺いさんなんかに見つけられるとそれは大變、すぐ土の中へ埋めて仕舞ふのですもの、然し何もそんな人に愛されなくつてもよいです、夏になると螢の君と一つに、秋になると松虫さんや鈴虫さんと共に、可愛らしいお孃樣に優ふして戴きますから。

菫とたんぽゝ

滋賀縣　西村　美代

たんぽゝ「菫さん私と貴女とは同じ野に咲いて居ながら都の孃樣達は貴女を見つけると直ぐ可愛菫と云つて接吻しながら持つて歸りなさるのを見ると私はいまいましくて仕方がない」と申しますと　菫「貴女は何を言つてなさるのです私などは常に躊躇して居るから皆樣が可愛がつて下さるのです貴女も充分愼しんでごらんなさい今に幸福になれます」と言つて氣の毒に思ひました。

櫻

牛込　岩谷　綠子

私は、金髮美くしき菫姫を守りました、——姉みこゝちの霜や雨と闘いて。かくて私と菫姫との戀は温くひらかれましたが、樂しい時は束の間……あゝ菫姫は胡蝶鳥子と戯る……私は潔ぎよく水面に散りました。

鐵道の菫

越後　自然の子

そりや私とても花園の菫さんの樣に孃さんや書生さんのお目にとまつて詩とやらに歌つて頂き度い事は山々ですが、折角こうして育てて下された父樣母樣が居らるゝ處ですし、そして私が居なくなればお淋びしくなるといふ事も知れてますから……私が鐵道のレールの下に空しく春を過すのも天命とやらだとあきらめて居ります、

土筆

東濃　女浪　散花

＊カ〳〵と暖き日和には、必ず麗しき菫タン＊ゝの君が、恐ろしき罪の子の犠牲となりて、夕は淡々とめぐる小川へ流れ來給ひつれば、吾等土筆僧がいと哀れに思ひ、柳の陰にて名殘りの經を誦す。

鬼あざみ

和歌山市　神保須磨子

あゝつまらない　自分はどんな罪があつて名さへ人にいやがられる樣な鬼あざみなんて？　同じ野でさいても　すみれさんやれんげさんなどは美しい御孃さんたちにかあいがられてほんとに　私程不幸なものはないわ……たまに來てくれると思つたら腕白ざかりの坊ちやんたちがステッキで惡さをするのですもの。

かきつばた

芝　壽　女

私はお池のかきつばたて御座ひ升足へ虫でもつきますと　心切な金魚さん達が取つて下さいます　し又植木やさんが美しい聲て淸きながれのかきつばたなどゝ歌て下さいます　其に先程もお孃さまが私のまだかたいつぼみに　お口をよせられお前が美しく咲く時分には　高商の常雄さんも本業よと仰つて早く咲いておくれと聲に接吻を二度と私は幸福て御座いましよう。

菫と少女

甲府　高田　沖子

此處渺茫とした牧場、綠の毛氈を敷きつめた樣に萌え立つばかりの野草の叢れに、物思はしげに咲いて居る一本の菫があります。牧場守りでしよう、右手に長い鞭をそして昔から赤い紐のついた角笛をかたに掛けた十五六の少女が、樂しげに春の歌を唱ひつゝ近づいて參りました。菫は嬉しげに斯ふ申しました。「やよ優しの少女子よ、寂びたる我れをつみとりて、御身が優しき其の胸に、かざしたまへや」と。

桃

長崎市　峯　時　子

私は桃の花ですが雛祭のお節句ほど嬉しい日はありません　田舍には見た事もない結構な花瓶に生られて美しいお雛樣方とほゝゑみながら遊んで居りますと此方の可愛らしい孃樣はお雛樣を眺めたり　私を見たりしてさも樂しさうににこにこ笑つて居らしやる　その嬉しさ何にたとへやうも有りません　私は眞に花と咲いた榮が有ります

つゝじ

下總　石原　三枝

アゝ藤はほんとにずるい僕が此所に居れば長い手を出して僕の頭をむしつて、僕が赤い赤い花を咲かしてやろうと思へば夫れを邪魔して、自分は長い手をブラサゲて實に失敬ナ、今に見ろ僕が大きくなつて困らしてやるから。

忘れな草

横濱　峰　嶺　女

優しい少女、野の道端に咲いて居た少さい草に問ひました「あなた何して香もなく、又そんなに少さく咲くのですの」と、忘れ無草は靜かに「私は昔私を愛して下さつた御孃樣の心を忘れぬ爲め斯樣に人の目に止らぬ樣に勤めて居ります、私は菫さんや、ばらさんの樣に多くの人に可愛がられなくとも只一人私の爲めに死になさつた御孃樣の愛を永久に保ち度のです」と答へました。

すみれ　　函館　巴　女

菫さん貴女は何を考へて居るの、はい私には只一の希望が御座いますのよ、それはれ、今年から私は斷然戀の媒をやめて、其の代りに身は押し花にされても女子文壇の栞になりたいのよ。

八重櫻　　京都　藤村　花予

私しは庭に咲く八重櫻です春の暖さに笑む初めますとお内の美ちやんとなかよしのお友達四五人連れて私しの下で蓆をしいて樂しそうに遊ていられます私しは其れが嬉しうて〳〵何日迄も此樣にしていたいと思ひますお悲しい事には一週間たつかたゝぬに天の神樣のお使！春風のそよときては薄紅色の薄衣ははがしてハラ〳〵と地に散され又來る春迄は淋しい沈默を守らればなりませぬ。

白　菫　　北海道早來　扇桝たみ子

私は幸か不幸か知りませんが風荒き北海道の野に住んで居る白菫です、そして私の居る所はごく田舍の日あたりの宜い廣い野ですの、此所から牛町程はなれて細い野路が有ります、私の一

番樂みはれ、毎日赤い衣を着たテフ子樣や青い衣を着たテフ子樣が舞を舞ふてあの風子樣が御琴を遊ばして大勢の小鳥樣が歌を歌へなして私が見物致して居ります。

すみれ　　越後　五十嵐美波

愛子さん御散歩かれ、今日は日曜だから必ずお出てだろうとさつきから待つて居ましたのよ。先日はまことにありがとう……、私はもう少しのことで秋子さんや波子さんの爲に、束にされて小川へ流されるか、しなりの代りに書物にはさまれるかするところを、貴孃の御情によつて、手折られるのを助かりましてれ……。お蔭樣でこうして春の女神から受けた任務をこの平和な野邊に坌ふして居ますのよ。

薊　　出雲　世良富美子

妾はみにくい薊であります。お友達の菴さんや蒲公英さんは美しいから人樣に可愛がられますけれど、妾は何時も厭やがられ者であります。菫さんや蒲公英さんは美しいけれど花が咲かぬうちから人に摘まれたりなどして若死になしてしまひます。妾は人樣には可愛がられませんけど花が咲けば他のお方と同じやうに胡蝶姬樣が來て止つてくれます。

山吹と菖蒲　　伊賀　山村りやう

「山吹樣などは何にもお小言は有りませんわさ、奇麗に生れて居なさるし」「アラ、妾だつて菖蒲樣、小言云ひかければ、切りが有りませんわ、此間も妾の傍を通る浮かれ男が、（山吹や浮氣て

色ばつかり）なんて唄つて居りますのよ、妾神樣がなぜ實をおさづけ下さすないの、だろーと思ふと、眞實に泣きたくなつて來ますわ」

筆　草　　名古屋市　二　三　四

私は此樣な山の中の水氣のある、じく〳〵の所に咲いて梅や櫻の樣に人が見にはきてくれないけれど、人が見て居ないからとて、行義は正しく朝早く咲いて夕になれば、きりゝとしまつて恰ど筆の先の樣になります、今に皆樣が私の里へ遊びに見へましたら其時は是非御供をして參り原稿を御造りの時御手つだいてもし樣と。樂しんで待て居ます。

菫　　能登　森田　茂

妾は昨日美以ちやんの御庭に咲いた菫であります、紫の色を出いて美以ちやんに笑顏を作らしたいものだと思つて昨年の末つ方から冬にかけて充分元氣を養つてをきました、菫紫色の菫とも離されたい若い御孃さんや女學生さん方が、すぐ飽き易い御性質にも似ず矢張り可愛がつて下さるてせうか、しかし此家の美以ちやんだけは相變らず可愛がるてせう。

以下多數の投稿は紙面の都合に依り例の通り五月發刊の增刊に廻す事とせり、寄稿者之を諒とせよ。

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○百合と松

紀伊海草郡紀伊村　洮村愚女

人跡絶えし深山の奥、山と山との崖相接する處、そこに一條の谷川あり。さゝやかにして水清し。

流れに臨んで、綠の色濃やかに、姿雄々しき松の古木ひと本。そが根もとの苔むす岩間に、あはれやさしう、咲き出でたる一輪の姫百合。

水の音靜かにして、小鳥の歌長閑なり。

彼方の峰々より、微かに柔かく、吹き來る神の惠みの暖き風、そよと松が枝に觸るゝよと見れば、松はやがて、いとなつかしげなる聲音もて下なる百合に私語きぬ。

美しの君よ、姫百合の君よ。

げに御身は幸多くも生れ來つるかな。

御身が、尊き朝日の惠みに浴しては、そのかんばせのいかに美はしく艶やかなる、御身がきらめく星の光りを受けては、その姿のいかに淨く氣高き。

御身がその美はしき面かげを、澄める流れにうつすとき、そと覗き見ては我れ、幾度か心を狂はせしぞ。

御身が色香を慕ひ來る蝶の羽風に、ゆかしの匂ひ放つとき、われは恍惚としてたゞ夢の如くなるよ。

あゝ、われは優しき御身のあればこそ、幸薄き身を、この淋しき深山の奥に暮すなれ。

幸多きかな君。戀しき哉姫百合の君。

百合は羞かしげに、薄くれなゐの面を擡げ、情こもれる愛らしき唇もて徐ろに應へぬ。

凜々しき君よ、雄々しき松の君よ。

さなかこち給ひそ。千歳の緑とこしへなるみ姿の、いかにめでたき。操は固きみ心のいかに潔白なる。げに幸多き君にはあらずや。

幸薄きは妾が身にこそあなれ。無常の秋風一たび誘ひ來らば。美はしき色も香も消えて跡なく、樂しき此世を辭せざる可からず。あはれ果敢なき運命かな。

たゞ〳〵、晨には、君がなさけの下露に霑ひ、夕には月に奏で給ふ妙なる琴の音を耳にしつゝ、君がみ膝に短き夢結ぶをのみ、嬉しと思ふ心根を、不憫の者と思召し給はれ、君よ。

あゝ慕はしの松の君。

小川は、このさゝめごとを何とか聞きけむ、水の音一段高めて流れ行きぬ。

（評）典雅。西詩の面影ありて、ゆかし。

四等　○忘れえぬ俤

尾道市土堂町
錦田與市内　平田かつ子

一、まぼろし

櫻月の頃でした。琴の稽古が晩くなつたので、歸りはもう夜にいりました。此夜は殊に霞が濃くたちこめて店の電燈や瓦斯燈まで、薄衣をかけたやうに朧に美しく光つて居ます。往來の人や車等が幻のやうに顯れては幻のやうに霞のなかに消えて、其響も其聲も倶に夢とうすれ行くのです。今宵遇ふ人は皆何か樂しい思に憧れてゐるやうな氣がして、私も夢心地に足許のみ見て歩いてゐました。琴代町の邊りに來たと思つた時、ふと前を見ますと高髷の頭を稍々うつむき加減に行くうら若い後姿が、目につきました。白い頸に火影が美しくさして華な友仙の帶を、高くしめた姿が云ふ計なく嬋妍でした、歩むたびに帶上の薄紅、振の紅絹が艶に仄く樣をじつと見てゐるうち、とある横町の邊へ幻のよう消えて了ひました。

四年前のことです。彼夜より後は一度もあの美しい人の姿を見たことはありませんでした。けれど記憶にはありありと殘て、幾度となく思ひ出しては種々の想像を彼の人の上にはしらせるのです。顏さへもえ知らない只幻のように見た後姿に……。

二、青葉がくれ

夏の休暇の樂みをのせて、美子さんと私はたえず語つてゐるうち、汽車は幾驛かをすぎました。稍々話もとぎれた時、私は始めて窓の外に目をとめますと、今松並木をすぎて此處は一面の稻田でそよ吹く風にさ緑の波を立てゝ居ます。左手にはるか白いリボンを引いた樣なのは沼田川の流てせう、趣のある農家が青葉がく

れに見えてゐるのも、歸り行く故郷が忍ばれて懐しい思がするのです。と目をそらして直下の畦道を見ますと、今しも一人の女の子が通つて居ます。白い浴衣に朱鷺色の扱帶を締めて、黒い髪をユラリとたらした樣は十歳許りでせう。麥稈帽の頭を一寸こちらへ振向いて又さつさと歩き出しました。矢と進むにつれて其の愛らしい姿は次第々々と綠の稻葉に消えるのです。私じつと見送つて居ました。

これが忘れ得ぬ一人で、今も目の底に殘つてゐます黒髪、浴衣、麥稈帽、刹那に認めたフックリと白い面わ等……私は此後せめて一度なりとも彼の愛らしい少女に會ふことをどんなに望んでゐるでせうか。

（評）前なるは濃艶、後なるは可憐、兩つながら實に忘れえぬ俤なるべけれど、朧夜の高髷の方、讀者には印象深し。

秀逸

○悲哀

小石川　廣守なでして



佛像　上毛　齋木守子

稻村が里に、多大の希望を抱きつゝ空しく病床に苦悶せる貧弟を訪ひて、其の無聊を慰めばやとは思へども此處、岡田へ嫁ぎたる身は、彼れやこれやと、ひねもす雑用にのみ忙がしく、世の常ならぬ姑君の氣むづかしさ、女は一度嫁げば、其の家を家とし、牛家を思ふべからずと、二言目には、聲高らかにの給ふ苦るしさに、嫁ぎて二たとせ、里がへり一度せしことさへなく、時にちとの暇あれば、肩腰もませらるるつらさを、家の爲夫の爲と堪へ忍ぶも、なつかしき父母も亡ひ皈るべき家なくて、皈らんには伯父伯母の許なれば、其の思はくも如何かと忍びに忍ぶ苦るしさ、まして此程は、只一人なる弟の病日々に重りゆきて、見る目哀れにおもやせ細れりと聞くかなしさ、一目なりとも逢ひたさは、澤なれど、姑君の思はく尋ぬるも、恐ろしければ、一日々々と心ならずも打過ごす哀れさを、情有る背の君は、さすがに憐れと、視そなはしてか、今朝、南向きの日當り好き小椽に新聞雑誌くりひろげて讀みゐ給ひしが、謙一君の病氣見舞、久しくせざりしが、今日は幸日曜なれば外に用事なくば、午後より尋ねてはいかに、母上には、よろし

きやう申しおくべければと、弟の上案じつゝ夢心地に針運ばせ居たる時、情こもりしお目にみかへりての玉ひし優しきお言の葉に、夢かとばかり嬉しく、心の中に伏しをがみ、仕度そこ〳〵、いてんとしたれど、さしてはと、姑君ゐます四疊半の敷居ごしに、霜やけのいた〳〵しき手をつかへて、きこえ上ぐれば、左様かへと、只一言、悴からゆるしが出たのなら、いつてお出てと、言葉のみ優しう、空嘯かるゝ口惜しさ、眞わたて首しめらるゝ思ひいかゞはせんと、ためらふ折柄、新参の下女が、奥様、お車の仕度が出來ましたと遠慮もなう、呼立つるに、虎口を逃がれし兎の思ひ、山茶花咲きみだれし門を出てんとして、後ろがみ引かるゝ心地、ふと覗かへれば、優しき春の君は、南天の實、面白う障子に寫れる、書齋の内椽に、たゞずみてじつとながめ居給ひし、其の情あるお眼には、露の雫の一滴……二滴……。

＊　＊　＊　＊　＊

あゝ今更におとろへし弟の姿よ、過ぎし夏の休みには洋服姿凛々しく、水清き小川の邊、柳の緑こまやかに吹きくる涼風に、晝の暑さを忘れつゝ、希望を語り、未來を話して、愉快氣なりし勇ましき弟よ、けなげなる弟よと、口にいはねど頼もしく、望を属せしこれが其の弟かと、哀れ一眼見し時より胸迫まりて、問ひつ問はれつせしことも半ばは夢心地、いふも泪、語るも涙、只涙のみ湧き出てゝ今更に幸なき運命にもだえつつ歎く折柄、塒に皈る群鳥の聲いと淋しく、遠寺の鐘の音、哀れに響けば、引留たさは山々ながら例の姑君なれば、家の事も案じらるればと伯母の言葉に殘り惜しくも立ちいづれば、生れて二十年、はぐゝまれし此の家、まゝごとに餘念なかりし松の木かげ、樂しき日曜の一日をすみれ摘みて遊びたりし背戸の芝原、あゝ思ひ出せば、過ぎ去りし稚兒まげの昔のみ戀しうて、たゆたふを、優しき伯母は、早くもそれとさとり、面をそむけて泪ぐまるゝに、いよゝ悲しく逡りがちなるを伯父はさすがに男氣の、岡田も待つてるだらう、其れに下女も新参ては定めて勝手が分らず困つてるだらうと、せき立てられ、泣く〳〵家路にはつきたれど、樂しかりし小川の邊の戀しうて、車は一足先に皈らせつつ、未だ暮れきらぬ冬の日の、身をさす川風の寒さも忘れて、昔なつかしき柳の木かげに佇みつゝ、はてなき思ひをたどれる折柄、いづくともなく風に連れて聞ゆる小犬の悲鳴に氣付けば、いつしか日は沈みて氷の如き十日餘りの月影は鎮守の杜に半身を現はしぬ。

心無き車夫は、最早や家に皈り付きぬらんと思へば、忽ち現はるゝ恐ろしき姑君の顔、眼先にちらつき、愕然として足を早めしも、先き程の小犬の聲心にかゝり

て行き過ぎんも本意なら思はるゝまゝ、立もどりて、川邊に立ちて、其處此處と尋ぬれば、枯あしの下に生後三日ばかりの、眼もあかぬ小犬二匹、母の乳房を求めてか泣き叫ぶ、何處のたれに捨てられしか、哀れの者よと、思はず膝に取上げつ、撫てさすれば、四足こごえて冷やかなり、兩手にしかと抱きしむれば、早やうれし氣に、寢むりたる可憐れさ、連れ皈りて成育くまんと、二三足歩みしも、夫が親しき友人より、渡英中の成育をたのまれし其の犬すら、足げにさへし給ひし程の犬嫌ひなる姑君、いかでかゝる事、ゆるし給はん、さは言へ、かゝる傷はしの者を此の儘此處に捨て置かば、飢ゑ死なんは當然なり、かゝる罪深き事を、あゝ如何にすべき、膝にほ無心に寢むれる小犬の小さきいびき、かすかに、あゝ、月は雲間にかくれて、川風ひやゝかに、枯あしはゆら〳〵と、何をかうなづくらむ。

(評) 行文流暢にしてあはれ深し。

○都

名古屋　みさほ子

お花さんは、姿色あの千代紙にあるやうに、花の振袖赤の帶、小鼓抱へて、金銀泥の舞扇、立派なお姫樣にして上げる、都へ一度お出でなと、彼の婆さんの勸め、あゝ私行きたい、ほんとに行きたい、それだけれども、行かれませぬ、行けば亡い母樣にすみませぬ、母樣母樣、慕はしい母樣、萩の下露はらはらこぼるゝ、秋の夕方、泣弱る虫よりも細い聲でのあの御諭し「何んな事があつても都へ出てゝはなりませぬ、都といへば美しい樣だが、實は恐しい鬼のすみか、なまじひ野で咲く花が、もしもあそこに出て御覽、蹈みにじられて挘しられて、散々になるのは目に見えるやう、お前は都を仇と思ひ、この美しい野山の中で立派になつてお吳れ、清い少女になつてお吳れ」と言ひ果てずあの世に御出でになりました、あゝすみませぬ、母樣、これから都と云ふ事は心の奥から追ひ出して了ひます、さうだけれども今日だけは、言ひをさめに、何卒々々許して都と云ふ事思ふ存分云はせて下さい、あゝ都、都、きたない藁葺、つゞれの衣、なはの帶して、冷たい田舍人から孤子よ乞食よと、嫌はるゝ私、どうしても田舍は大嫌ひ、母樣何うして、都がおいやなの、母樣は都の御人と、聞いてるのに、何うして都がお嫌ひなの村の惡太郎から、孤子よ父無し子よと嘲けられて口惜しいまぎれに、私の父樣はと、云つたら、それは〳〵こはい目なすつて、父樣は都の御人、えらい方、花ちやんりかうだから、都とか父樣とか云ふんでないよ、お前が二十にお成りになつたら、話して上げると、御

仰しやつたわ、あゝさうなのに、さうなのに、母様はもういつまで待つたつて御歸りはありはしない、天地の間ほんとの〱一人、父様の御名も知らず、都に行つたつて何にならう、こゝで靜に御墓を守り、淸い涙の中に一生を過しませう。

（評）戀しき戀を抱いて失せし人の恨み、父ありて父なき孤子の怨み、讀む者の袖を濕らさしむ。

○妻の自白

下野　新井翠子

妾は十七の時此の家へとついだ位ですから、他の御友達の樣に、温い血が湧いたとか、戀を味うたとか云ふ事はありませんでした。けれ共此の二月計り前に初めて戀と云ふ事を覺えました。實際を申上げると其時分親達に無理に遣はされましたので、隨分早婚の弊などとならべたてゝ生意氣だと叱られましたが、妙なもので、丁度其時、お友達の初子さんや芳子さんなどが、お嫁にいつて丸髷に赤い手柄をかける樣になつたのを見ると、羨しくなつて、何の考へもなく參りましたので…………。

しかし夫を持つて、一家を處理すると云ふ事は、其時思つた樣な樂しい、易いものではないと云ふ事を知つて、つく〲一人身の方が好かつたと憾みましたが、もう致方がありません。其上夫は極く無口な人で、妾が常に想像してた樣な愛の俤は見る事が出來ませんでした。お友達は旦那樣と芝居見にも花見にも樂しげにいらつしやいます、又好な衣服も作つて戴けます。けれども妾にはそんな事がありませんので、内々大の不平で遂には夫に厭な顔を見せる樣な事もありました。恁麽風で五年を過しましたが、其間夫は少しでも優い顔もした事がありませんでした、と云つて妾を憎んでもゐないのでした。妾が隨分烈しい事を云つても、てんで相手にしないのですから、妾はかへつて餘り夫の無神經なのに呆れた位です。丁度二月計前の或日の事、夫はいつもの樣に役所に出ましたが、出がけに、都合によると二日計り出張するかも知れぬと云ひ置きましたので、内々厄介者でも追出した樣で淸々しました。下女を相手に其れから氣樂に二日を過しましたが、其約束の二日が過ぎても、夫が歸て來なかつたので、始めの内は寂しいと云ふ感が起た計りですが、さあ夜となつて枕に就くとどうでせう、厭で〱仕方がなかつた夫の事が無暗に考へられてきて、今頃は何處にいらつしやるだらう、若しお變りがあつたのではあるまいかと、かう思ふと急に胸が烈しく騷ぎ出して、什麽しても寢つかれません。さうして夫が死んだ所迄想像が進んだ時は、什麽思ひ返しても其樣子が明に眼に浮んでやるせない悲しさが、むら〱と胸を襲うて來るので

す。さうすると夫がゐた時は、かうであつたが、あゝ今は……などゝ、一人で悲んで居ると、夫が戀しくつて／＼、居ても立ても居れません。さうして其れが空想であつたと氣がついたので、胸撫でおろして眠りましたが、戀しさは募る計りで、次の日一日は何事も手につかず、うつら／＼と暮して了たのです。で所在なさに夫の机の上にあつた日記を何心なく繰り廣げると、其日記の一頁毎に靜と云ふ字の三つ四つ宛記されてない所はないので（靜とは妾の名です）今日は靜は病氣らしいが什麼したのであらうとか靜は可憐なものだとか、色々と書いてあつたのです。妾は初めて夫の愛を知りますと、悔恨の涙は止途もなく流れてくるのです。

其夕刻夫は不意に歸て來たので『貴方！お歸りなさいまし、待てましたわ』と縋りついて、夫の日記を出しながら『貴方これ程まで私を……』と涙を零しますと、『靜さん私の心が五年振で解つたかい』と云つて初めて、笑顔を見せました。これが妾の初めて覺えた戀ですの、ほほおのろけぢやなくつてよ。

（評）嫁して後五年はじめて眞の愛を味ふ、事實ならざるが如くにして事實也、着想凡ならず。



おんぶ　横濱　落花一片

○他鄕のいたづき

岡山縣　ますの

いたうも風のふきすさぶことよ、他鄕になれにし身にもいとゞつらきこの夕べ。

沈痛の氣にみたされ幽暗の色におほはれたる十八疊の室には、我と心が影とのみさしむかひて、あたりは寂たり、ほの暗き隅によればせきくる露は睫に溢れて潸然たり掻巻に頭（かうべ）うづむれば涙は臉におされて枕の紙はしほたれてやまず、他鄕のいたづきは、かばかりものうきものか、あはれこひしきたらちね！何はなくともいさなどり生の父母共にいまさば、たゞ一杯の粥にも其心づくしは山海の珍味のそれよりもいとゞまさりて、やさしきなぐさめ言に病も忘らるゝならむを、夕げも未だ來らず、訪ひこん人もまたなし、三時ばかりおくれて夕げははこばれぬ、されどきたなとやうに、飯は此にと言ひすてゝ去りぬむら／＼と起る口惜しさは手にとる箸にそゝがれたり、ぬれにし箸をなげて褥に入れば、月もなく灯もな

き室のいとゞくらく、こひしき母様なつかしの古里よと、呼べど答へは松風のまつかひなしとさゝやくのみ、二階のとどろきはガラス戸にひゞきて、廊下を走るはすはなる足音、扉を閉ぢまた開く音は重き頭にいと苦しく、まどろまんすべもなし、今うちしは十一時なるらし、さても長き夜なるかな、空にふけゆく星はいよ〳〵さむく、鼠の聲も胸にこたへて、たへ得べうもなし、折からのあわたゞしうかしましきさわぎは、劇場行のかへりなるべし、世は我にのみつらきかと、人の情の今ぞしられて、嫌、嫌、嫌、よそはいや、母様なつかしと立上る足もとあやしく亂れてどうと仆れ、われながらあさましと、熱にもゆる手さきに枕さぐれば之も父母こふるか小犬の遠吠、春はなほ淺うして暗淡たる外もに嵐の音いとすごし。

（評）　故郷の粗食は旅館の珍膳に勝るとか、まして旅に病む身の、故郷慕ひ、母戀ふるは人情の常。

（又曰）　末段一氣の文にありさうなり。

○わが妹

岡山　千代子

父逝きて母ゆきて、はた兄さへ失ひて、いかで天にも地にも唯一人の妹いとしからずやは、なつかしからずやは。吾には餘りにはでなりと簞笥の底に秘めし友禪の、ならば妹が被布に仕立てゝ着せても見ばや、學校の行き歸り小間物店の前を通りて、あのリボン妹が下髮に結びて與へなば、いかに愛らしからむを等、もの見る度に可愛き妹の面影月に浮びて……さるを、さるを、相見ても言葉さへかはされぬは、さても如何なる罪の吾にありてか、また彼にありてか。毎朝道にて行き合ふ度に、しげ〳〵と吾面見守るに、吾もにこやかに打向へば、ふくやかなる頰に溢るゝ笑みを湛へてはづかしげに默禮して馳せ去る樣の愛らしさ、あどけなさ、貧に暮せる徴にや、身には洗ひ晒しの二子の袷に色あせたる紅木綿の帶を締めたり。さんぬる秋の頃にてありしか、三校聯合運動會に花の樣なる乙女數ある中に袴なかりしは彼の子一人なりしと聞きて、吾は己がまとへるカシメヤの袴直に脱ぎても與へばやと思ひしを、祖父君祖母君が、以ての外の御怒りに、夫さへかなはで……さるにても人の情の分けらるゝものならば、己が受くる半にても彼の妹に與へたや、祖父君祖母君が飽くまでも優しき御惠嬉しからぬにはあらねど、哀れなる妹見ては綾の小袖も錦の帶ももゝ々に妹と等しき木綿の袷には及ばぬものを、いかに亡き繼母君の吾に辛らかりしとは云へ、妹には何の罪もとがもなきものを、さりとは餘りの御憎しみ。いつそ思ひ切りて妹よと呼びて見んかと思ひしこともありけれど、思へば淺かりけり吾心。妹は身にこそ絹を

纏はざれ、頭にこそ美しきリボンを飾らざれ、心は唯天使の夫の如く、淸く美しく、世に悶ゆる姉ある事をも知らざれば、長く恨みをのみて逝きし父母ある事をも知らず、たゞ優しき叔父君叔母君を眞の父とも母とも慕ひて、世をもなげかず、人をも恨まで、安らけく樂しく過せるものを、却々にうちあけて彼が淸き心亂さんよりはと、燃ゆる心を强ひて抑へて終生共に語らじと誓ひぬ。

世の人は罵りぬ。情知らぬ姉なりと、友は諫めぬおのれが心は鬼にも勝れりと。あはれ妹よ、永久に淸かれ、美しかれ、健在なれ。

（評）たゞ一人の妹と、はなれ〳〵に、それと知らさで、暮らすに至れる徑路、今一際くはしく描かれたらばと。

○冬の蝶

九段　あくがれ人

淋しいとわびるのを咎めては下さいますな、日も夜も、只つめたい机によつて、ともすれば、涙ぐむ瞳を、うつむかせては胸に手もおきますので……、私は十九、まだこの後、幾年かうしてつらい月日を送らねばならぬのかと、しみじみ思ふと、もう心も胸もふさがつて暗い〳〵夜明けぬ國の、手も足も動かせぬ位の、小さい穴の中に、一人こもりたいと思ひます、花のやうなと人にもたゝへられた、春ほこらひの花姿、まことに十七の秋迄は、私は、母の自慢娘でした。

生田の雪枝さんは美人だねと、噂してゐるのをきいたことも、母につれられて歩く姿を、人がみかへつてほめてくれたのも、今は今はもう夢、……あゝお許し下さい、涙が出てきました、風も頰につめたくふるゝ秋のはじめ、さうおとゝして、……ふと脊柱が痛み出したのが初めなのです、秋を淋しう病院にくらして、手術をせねば生命にかゝるとの事で、やむを得ず、烈しい手術をうけましたが、あゝ月さむく世は冬に入ると共に、私は、𠈓あてなりしとうたはれた私は、……もとの身ではなかつたのです、この情ないせむしになつてしまつたのです、どんなに私は泣いたでせう、どんなに私は嘆いたでせう、不具!!!女としてこんな悲しいことがあるでせうか、靜かに更けてゆく冬の夜の、燈火もほのぐらいもとに、一人坐して泣いたことは何度だつたか知れませぬ、淋しさの犇々に身に迫るやうな心地して、思はずふりかへると、うしろの壁に映つてゐる影が、我ながらいたましいまでに小さくて、……併何と思つたつて、どうしたつて、昔の姿にかへれるではなし、何も運命なのですから、仕方もありませぬ、私は潔く運命に服從して、……いゝえ服從せねばならぬのですもの。

ありて甲斐なの廢人、世のためにも、人のためにも、私のためにも、決して生命長かれとはいのつて下さいますな。

けれど、神のみめぐみがまことに深いといふことを、不具になつて初めて知つた私は、幸であるのです、世にも人にも愛にも凡てのものに遠ざかつた廢人の家にも、猶、春の光はうらゝかにさして、溫い風も軒に來ますので、……神樣は私をめぐんで下さるのです。ああ神樣!!私は神樣の御手によつてよみがへりませう。片羽もぎれて、死なむとした蝶が、やさしい少女の手に溫められて、いきかへつたやうな私は、たとへていはゞ、冬の蝶てせうか。

（評）傷まし。

○雨の日

麹町　冷花女

なつかしきは春雨なるよ、夢のやうに枕時計の歌きゝて眼醒れは、しと〳〵と雨の音に、又も瞼重うなりて床離れ惡きは此の頃なり、湯上りを縁の柱によりて、あたり見やれば、苔の上に濡れ敷し梅の花片、老木の花も少なきはいと可惜しけれど、彼岸櫻のめぐみしは、うれし、乙女椿、ぽたり、と一輪落ちぬ、と見れば小鳥、つと飛出ぬ鶯にやありつらむ、漸々芽をふきし、山吹の下に若々と萌えたるは嫁菜らし、裏の畑には蕗の薹の丈も伸びつらむ。

雨はあがりぬれど、其儘の花曇りに日は暮れて、向ひ屋敷に琴の音發りぬ、讀さしの卷に、しをりして、立てば月は朧なり。

夏の雨はうれし、今晴て行く雲脚の速さよ、牽牛花の葉も、お白粉草の葉も生々として、楓の繁み、葉末に滴る露の玉涼しや蛙の得意顏に罷出たる憎氣無し、蜩の聲に夕陽、落たるころは、行水も終へて青簾卷き上げ、縁先に蚊遣してたらちねが昔語りや、月あらばと思へど宵闇なり、螢々と幼き聲。

寂しきは秋の雨なり、紅萩の濡れ散りたる哀れなり、うなだれし桔梗は、とりて一輪ざしにいけむか、秋海棠に雨そゝぐ日、靜に筆とりて歌想へば、亡き人など忍ばれて、とかくに悲しき事のみ思ひ出てらるゝまゝに、そと琴とり出て小聲に謠ふ、何となく人戀し。

桐の落葉に秋逝きて時雨となれば、また哀れ深し、風少し木の葉まじりにはら〳〵と降る朝なり、觀音堂よりかすかに讀經につれて、木魚のきこゆ。

親しき友は來ませり、晝下り四疊半に松風立つれば香の薫りも、うち濕りたらん樣にてゆかし、はては新にきうすども運び入れ爐を圍ひての物語り興は盡ず。

さらば、と傘を別にして急ぎ行く友を暫時見送りて、小川沿ひ歸り來れば堤にほゝけし枯芒風に折れて冷き

夕暮を鐘一つ遠くきこえぬ。

（評）俳趣あり。

○梅月夜

紀伊　文子

一

東風あたゝかきをり〳〵に薫りくる、庭の白梅の床しき香に語らう友とてあらぬさすらひの身の、胸のなやみをやらんとておばしま近く立ち出づれば、月は此宵も美しうおぼろおぼろに照らすなり、あはれ此月てそ思出多くも戀しきかな。

二

あはれ淺ましき人の子の、幸なき星の下に生れしを、身の運命と安んじはせで、なまじひに高き理想の花の影にあくがれて、ひとり旅路をさすらひの、情あつからぬ浮世にもまれ〳〵て、善きにつけ惡しきにつけ故郷なつかしう父母こひしう、霞に花の匂へる春の朝、岩間にせかるゝ谷水に暑さ忘るゝ夏の眞晝、月影さやけく虫聲かすかなる秋の夕、白雪つもりて木枯身にしむ冬の夜半、さては散る花ゆく雁に心をよせて故山の空を忍びしも幾たび、わけても亡き姉の懷しく淋しき夕など、一入昔忍ばる。



雨の日　能登　森田茂子

三

思ひぞ出づる、幼き昔、桃が蕾の春寒の夜、清き月影背にあびて佇み、各々鉢に手植の緋桃白桃蕾の數を誇り合ひ、さてはまた櫻は散りて幾日、杜若一つ咲きし夕葉櫻のもとに少さき若楓の枝を押へて、何れに月影の先き當るなど云ひ爭ひしを。

吁夢か現か、月日の小車めぐり〳〵て、姉逝きて早も五とせ、思ひ忍びてはたゞに戀しう懷しう、春の夜は樂しときくに、何とて我には涙のみ多き。

四

冬去りて嬉しき春はめぐり來つれど、歡樂永へに逝きて返らぬ夢と消ゆるもこれ憂き世の習ひとかや、我は泣かじ、かよわき女なれども、人の子なり。

西の空故山にいます父母の君さきくましませと心に念じて。

（評）多少の情趣あり。



二等

歌反古の蝶に化しけり春の風　安房國佐久間村奥山の里　文代女史

〔評〕着想天來の觀あり、西歐の詩を讀むが如し。

三等

紅梅やたがうつり香の捨車　島根縣那賀郡波子村　みどり女

〔評〕艷中の艷。麗中の麗。

四等

自炊子が米とぐ脊戸や露明り　越後國中頸城郡寺野村　藤原富子

〔評〕清新にして詩意深し。

五等

菜の花や嫁をのせ行く白き馬　下總國船穗村松崎　岩井よし江

〔評〕美しきか命。

秀逸

みの虫の浮世を覗く小春かな　下總　あやめ女史
雨の漏り雛の都をうつしけり　上總　森久子
春の夜や渡殿通る緋の袴　周防　河村小藤子
須磨の家古き雛を祭りけり　奈良　白藤女
賣卜の翁居ねむる柳かな　石見　星の子
櫻ちる芝生の上に坐りけり　埼玉縣　白梅子

陽炎や海苔干して居る赤だすき　横濱　阿久澤雨村
朝市や大なる鮭の鰓をとく　伊勢　植木くに子
黒々と烏生れて朝霞　京都府　足立俊子
雨やみて土手に蛙の談議かな　京都府　穴田松江
雁なくや月を追ひ行く根なし霜　下總　酒井さく子
花瓦斯や都大路の宵の春　岩代　丹治春見
春の宵猫の踊りし話かな　水戸　島田君子
傘さして上京行くや若菜賣り　下總　桃花女史
朝寒や鶏に餌をやる女の子　下總　岩井芳江子
春雨や肘枕して謠本　弘前　竹内のぶ子
霞けり唐崎の松浮見堂　備中　水泉子
寒梅やちらばつて居る謠本　千葉　露子
朧村日出てんとして霧の雨　京都、井上けい子

下馬札の斜にたてり桃の花　鳥取縣　門脇まさ子
冬ごもり炬燵の上に李の皮　長門　伊東紫子
紅梅の門におりたる車かな　下野　三輪龍子
鐘撞きの袂に櫻こぼれけり　弘前　工藤さよ子
引舟やしづ〳〵登る若き鮎　石川縣　砂川とも子
春の夜や行衛不明になりし猫　近江　道子女史
鶯の籠あらひけり春の水　備中　菅森定子
襖から鐘唸り出す五山かな　相摸　中里響花
小窓から炎の香や春の雨　水戸　島田小蘋子
春の風南の山を渡りけり　本郷　齋藤茂子
魚屋の無言で通る枯野かな　埼玉縣　田島菁子
渦くや靄の底を春の川　陸奥　柳田泉子
鶯の來ぬ日は寒き小雨かな　千葉縣　内藤とし子
春雨や物語り行く寺參り　大分　松本露子
卯の花の河三尺夕榮ぬ　若狹　津田杓汀
美くしう慕誘ひだす霞かな　品川　小林のぶ子
紅梅を銀の花瓶に活けにけり　常陸　大和田清子
家ありや若葉をもるゝ茶の烟　下谷　森　雨子
茶の花にとり圍まれし五戸の村　常陸　大和田清子
古城や訪ふ人もなし花散りて　越前　佐藤芳子
梅咲くや楯の庭干す谷の家　小樽　楓水仙子
春の川子等の笹舟流れ行く　小石川　森田欧子
金圓に人病ひあり秋海棠　越後　藤原紫子
桃てら〳〵柳は溷を洩く日かな　備後　白百合子
日は永うなつたと外す目鏡かな　神戸　足立ゑい子

花守の夢流しけり春の水　越前　白百合子
萩の露肩までぬれる茂かな　府下　森田志揺子
梅咲いて都を領す鶯の王　岩手縣　千葉なつ子
まん圓き山より出たり春の月　本郷　田中萩子
女老いて雛にものを怨じけり　上毛　かるかや
桃紅き宿にもつゞく春の川　磐城　村岡敬子
春の野を京の商人通りけり　備中　馬越昌惠
夕霞森をかゝへて眠りけり　肥後　和田千森子
渦もどりの冷たい風や星のかづ　横濱　喜代松女
春の雨甞がたきも來て寡れにけり　牛込　河村禎子
雁鳴きて陣中の夜の靜なり　埼玉縣　西田壽惠子
行列の人霞みけり大井川　日本橋　矢　名子
日あたりや庄屋が庭の寒椿　香川縣　山口榮子
春風は淺黄の野邊をふきにけり　武藏　落花一片
春の野や扇持つ子の京なまり　磐城　武者露子
我が門の柳は高し冬の月　下總　石渡花神
梅咲いて古殿の扉開きけり　巣鴨　岡部庭子
菊いけて軍書ひもとく老士哉　土佐　大原政美子
佐渡は見えず日本海の霞哉　美濃　長浪鷗子
明月や厂の遠音の聲に入る　周防　紅蘭女史
若鮎のよく上るなり月の瀬　神田　太田昭子
露に掃除仕殘す小庭哉　福井　眞柄銀子
大道に御幸の車かすみ鬼　石見　とし女
冬川の蛇籠に寒し夜半の月　兵庫縣　中島八重子
蘇鉄や土筆延びたること二寸　下總　長谷川なつ子

淀川や火橋かゝえて十三里　牛込　井口敬子
垣越しの手の愛らしや桃の花　仙臺　松村とし子
ほろ醉や流れに近き桃のかげ　大阪　北垣好乃
背負ふ子の影寫しけり春の水　松山　狐蝶女
山吹や染屋が門の細流れ　奈良　岸田花鶴女
待戀の栞りにならす扇かな　越後　山村芳枝子
さえかへる橋の袂やむきみ賣り　千代田　流星女子
遠慮する障りもなくて冬籠　安房　慈の山
水仙の冷たき裸か佛かな　備中　菅森露葉子
心太日よけの青葉蔭みなり　大阪　齋藤芳子
初午の太鼓異音や五戸の村　府下　寺澤みつ枝
稲代守娶は祇園の遊女哉　神戸　水越輝子
神に侍す巫女美しや春の宵　上總　松が枝富士枝
陽炎や燒け痕育む草の色　尾張　菅沼秋香子
鳳凰御城の内をのぞきけり　豐後　菜子
春の風草の匂ひとなりにけり　牛込　みどり子
春の川桃も流れて來さうなり　上野　櫻井しな子
夕の鐘一撞きごとに櫻散る　下野　栗原くに子
春風やかづき掛けたる青柳　信濃　節子
佛龕や常磐木壓す冬の森　日本橋　泉八千代
客多き髮結床や春の雨　周防　河村小藤子
春の夜を唄て過す二の替り　攝津　内藤宗子
春の海伊勢山ひくゝ沈みけり　三河　鈴木米子
月淡く土橋くづれてくひななく　安藝　ちと子
春雨や山の湯に來る村の者　薩摩　たま子

夜や寒し河豚食ひし人の高鼾　上總　小川美代子
雪空や北嶺より高し大廈　京都　梅子
遊獵の櫻かざして戻りけり　岩代　岸野常子
奥殿の梅が香高し朝の月　上毛　花波池女
梅の村夫婦は若き酒屋かな　群馬縣　河内とめ子
行涼に落花や人の太刀なとぐ　紀伊　北西みさを
春寒く日蝕映る小川かな　仙臺　村瀬かをる
足利の雪見の椽や銀閣寺　靜岡縣　菅靜子
羊呼ぶ聲も霞んで聞えけり　下總　長谷川しん子
時雨する夜を小按摩の素足かな　薩摩　かな子
金屏や紅梅匂ふ春の宵　伊豆　加藤霜葉女
枯枝に烏の鳴や冬の月　石見　石田まさ子
新らしき渡舟の棹や春の川　安房　小泉日影女史
春の潮乙女の足を洗ひけり　安房　松の舍
駕籠でこす箱根八里の霞哉　安房　鶴の舍
緋桃咲く門に入りけり角兵衛獅子　上毛　五十貝すゑ子
紅梅や琴の音低き四の對　下野　岡さゞれ子
長安の南十里や桃の花　埼玉　野口花子
手を打ちて鳴蘇しけり天主閣　肥後　成松千代子
朧夜や被衣着て出る小買物　伊勢　大原しづ子
春の雨辻占賣の通りけり　神田　樋口まさ子
枝折戸に辻占呼ぶや朧月　仙臺　松村敏子
冬空や杉十丈の鬼涙山　越後　中村直枝子
夕月や花に鞍おく女馬士　彦根　馬場みつ子
伸過て爪のあとある歟哉　伊賀　山村志加子

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○都の姉に友の結婚をしらす

山城八幡　鈴木幽香

其の後は如何おはし給ふらむ、春ながらまだ如月の山おろし堪へがたう候を、母様との御話はいつも御上のみに候、往來しげかる都大路も、人目も草も枯れ果てし片山里も、冬の神の御手には洩れはべるまじきを、日毎の御通學に候まゝよく／＼おいとひたまはりたく候、扨てさいつ日きこえ上候如く、花枝樣には昨夜めでたう御輿入れ遊され候よ、私は放課後伺ひまゐらせしに、早御化粧すみし後とか、いたう羞らひ給ひて、襖のうちにひそみますを、をば樣の御口添にて漸うお目にかゝり候、と見れば、前髪ふくよかに、美しかりし花月卷は、いつか氣高き文金に、雪をまき給ひし御ゑりのあたり、さゝ紅はゆる御口もとなど、繪姿その儘の花嫁樣におはし候ひき。例の紅梅かをるお室の窓により給ひつゝ「さな見入り給ひそ穴にも入りたう覺ゆるに」と、面背けませしが「さるにても、御姉樣のお羨しうて」と、沈みてのたまふに、何と申して宜しきやら、只「おめでたうおはするに」とばかり、姉樣、かゝる折如何申すべきか、次の御便に御しめしたまはり度候、さるからに、御召替との事、いたう惜しう候ひしかど、お暇申し、幾千代の御榮をこめて、手とりかはし候ひぬ、姉樣には、猶呉々もよしなにとの御事に御座候ひし。やがて、裾模樣の袂長う立やの字に結び給ひて、つゝましう設の車にものし給へば、幾輛の灯影ゆらめきつゝ果はわだちの音のみ微に、殘され候。折柄新月の影、門の柳に匂ひそめ候まゝ、直ちに入りて認め申候、母様よりも、よろしくと仰せられ候、先は、あら／＼かしこ。

（評）情景躍動せり、「さるにても御姉樣のお羨しうて」と未婚の人を羨みたる、恥らひがちなる新妻の面影見えて、をかし。

四等

○兄のもとへ

埼玉縣大里郡玉井村大字新堀　中村勝子

御手紙有り難く拜見致し候。

妾身の上に就てかく迄み心にかけ下さる御情身にしみて嬉しう存じ候、されど妾には如何に繰り返し〳〵思ひ候ても、子供迄ある間を振切りて歸るは誠に忍びず候、殊に嫁ぎの前夜、亡き母に諄々と說ききかされしみ言葉もあり、妾も縱令如何なる困苦に陥り候とも耐へ忍ばんと誓ひ候事故、立歸り候ては御位牌に對する顏もなく候。夫の壽筆もつ手に花かるたもてあそび、又浮川竹の浮れ女にみ心狂はせつゝあるも、皆妾の心のいたらざればにて、姑樣のつらくあたらるゝも尤もの事と存候、されば妾は飽くまで眞心を以て夫を諫め、姑樣に仕へ候はゞ、素より優しき夫の、迷の夢もさめ申すべく從つて姑樣のみ心も和ぐべしと存じ候。兄上樣の御心は誠に嬉しう候へども、右樣の決心故、何卒此の身の事は妾のまゝに御任し下され度、必ず〳〵兄上樣の御迷惑に相成り候事はいたすまじき心ぐみに候。先づは御返じまで、あら〳〵申上候かしこ。

（評）斯の決心あり、笑聲堂に溢つるの時、豈、泣きにあらじ。

五等

○母樣へ返し

しら菊

おん情溢る斗りの御玉章數知れず繰返し拜しまつり、つきせぬ御恩の有難さ嬉しさ、いよゝ猶身にしみ何と報い奉らん言の葉も覺え申さず候、扨も世渡りのみちは斯もつらきものに候哉、日頃母上樣のみ諭も娘時代にはさまで心にも止めざりしを、今日となりて自ら味ひ自ら其の苦をなめて初て深く〳〵悟り申候。良人の病も其後すぐれし樣は少もなくて日に〳〵弱りゆき、此頃はわけても肉おち申候、朝夕べの見とりに見るもつらく、慰むにも言葉つまり候、兼て此病は不治と聞くも何となう情なく、醫術の開けし今日さることもあるまじと强ひて思返し、自ら慰め居候へ共、思へば〳〵袖のかわく間もあらず候、悲しきうちにも月めぐり年うつりて、長引くまゝに、豐ならぬたつきの益々おしつまり候て、日毎にあらぬ暇ぬすみて勵む手内職のみにては細き烟だに立てかぬる有樣、こゝに打明ておはなし申上ぐるに忍びず候へど、晴れの衣などかくおちぶれし身に用もあるまじと存じ、數もあらぬに大かた賣拂ひ申候。あすは明日の神樣の守りたまふと心には信じ居候へ其女心の墓なくも先々のことまで思ひやりては心細く、涙の蔭に咽入り候ひしも幾度なりしか、されど人は一度辛きも味はざれば身の光そはじとやら申候まゝこは皆天よりたまはりし此身の務喜んで受くべきものと存候、筆にまかせて御耳に入れ度きこと數々に候へど、病床に呻く音の氣に懸り候まゝ半ばにて失禮致候草々。

（評）陰氣なる良女の心根、讀む母人の涙そふる種とやならん。

秀逸

○初産を友に

三重縣　帆山靜子

軒近き姫桃の花二三輪、薄紅の笑美しう咲きそめし木の間より見あげし空は、紺青に澄み渡りて銀色の月、夢の樣に殘りたる繪の如く美しき朝、可愛き産聲と共に今年十九の若き母となりて候。男子なれかしと願ひし甲斐なくて、生れたるは女子にて候。

折しも産屋の窓より見渡したる海原は、心ゆく計り蒼々と晴れて、ゆら〳〵寄せくる波のこゝ彼處、行き交ふ白帆は宛然白鳥の浮べる樣なるに、何處ともなく舟唄ゆるう響きて、げに麗けく靜かなる景色を、其儘春海と名づけ申候。

此朝の天地自然の美にあやかりてや、親の口より申さんは如何なれど、不器量なる母に似たりとも覺えず、淡紅絹の如き頬、和らかく清き眼光、花の樣なる唇に乳房求むる愛らしさ、唯々嬉しう可愛くて抱きしめてのみ、されどさすがに世なれぬ身の、何となう浦恥しく、袂に顔掩はるゝ事も候を、をかしと笑はせ給ふな。行末は天晴美しく賢き女になしとげんと思へば、學びやにありし頃は、唯浮の空にきゝ流せし育兒の法など、いたく必要を感じ、床の中の所在なきまゝ、取り出して繙き、今となりてと母に叱られ申候。

今少しひとゝなり候はゞ、寫眞とりて初の御對面いたさせ申すべく、今より樂しみ居り候。先づは御しらせまで、かしこ。

（評）乳兒の行末も名にし負ふ春の海の平けく安らけくあるべしめでたし〳〵。



御掃除　本所　海野柳子

○雛鶏の行方を問ふとて

備中　紅花女史

今朝しも手飼の雛に朝餉食うべさすとて、不圖まだ足弱き雛一つ、數に洩れしを見出して候。妹は朝まだき庭の泉水の側に、他の雛どもと打群れて落ち來る櫻の

花片啄き合へる姿見たりなど申し侍れど、いづれは覺束なの彼が行末、花吹雪とて優しき紅葉の足の痕踏み分けがたう候まゝ、裏の畑よ、垣根の外よと家內總出にて尋ねもとめ侍れど、未だにそよとの手懸もなう、さても何處に母戀ひわびて泣くらんかと、哀れにいぢらしう思はれ候。近頃はしたなき御伺ひにはべれど、お屋敷とは垣つゞきの、まして遣水の流すら相通ひ侍れば、もしやみ園の花の麗しさに憧憬れて、思はずもみ庭に迷ひ込みはせずやと、心細うも案ぜられ申し候。さ候はゞお許樣、御讀書のみ窓に近う黃と白に斑を染めし雙羽優しき雛の、覺束なげの歩みもて、鳥露々々と辿れる樣のお目にも止まるべう。其の時は妾に免じさせ給ひて、庭汚したる無禮の者よと御咎めなう、暫し小籠の中にお止めおき給はるまじや。御秘藏の菫荒らしはせてか、あるは御手飼の怜悧しきタマが戲れも如何かなど氣づかはれ候ふまゝ、取急ぎかくは。

（評）流麗。

○かるた會に友を招く

山梨縣　山田秋葉

生野の道の遠さにもあらねど、通ふ千鳥にことづてゝ申上參らせ候。

久しき前より一度はと、ちぎり置きにし歌るた合戰、今宵こそは都の辰巳ならぬ我いほに開かばやと存候。出陣の武士は名にしおふ正子樣春子樣などに御座候、何卒御許樣にも、來ぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの思ひ此方にせさせたまはで三笠の山に月出でぬ程に渡らせ給へ。

行くも歸るもたけやに御供せさすべければ…………淵と積りし物語は相見ての後にと日くるゝほどを待ち上げ候かしこ。

（評）巧みに百人一首の句を採り用ひたる、才筆と謂ふべし。

○詞友へかへし

尾張　菅沼秋香子

一

朝凪の海の面艶やかにて、遙か南、天に近きわたり、伊勢の山々、紫の霞の裡にほの見え、こゝ七里のみ空、曉の明星も光淡れつ。風ゆるう吹いて、朝の濱べ心地よく候。眞砂白き汀の邊、青藻の床しき薫して、波に追はれ波を追ひつゝ幽に鳴く千鳥の聲、やゝに小貝ひたして滿ち來る新潮の譜、如何に崇高なるよ。昨夜の悶の胸も、洒然と淨められ候。

さても御心籠めて送り給ひし御玉章、誠に忝なう、今こゝにて繰り返へしつゝ誦し侍り。慕はしき御面影を、幻の如う胸に描きては。

新潮に、藻の香ひろごる、曉の濱、

玉章誦すに、君しのばるゝ。

二

白帆片々、漁舟泛々、漂渺たる沖にゆらぎて、欵乃の聲細う太う、霞の中より洩れ聞ゆるに、漫ろと白鷗飛ぶ磯に向へば、一歩又一歩、簸々の音して、駒下駄の痕うねり〳〵に續き候を。仰ぐ東の大空赤ら引きて、希望かゞやく朝映えのいと美しきを知り給へ。懐かしき墨の香、麗はしきみ筆の跡、なか〳〵に納めかね、鬢のほつれ毛かきあげては、又再び繰り返し申し候。

　鷗飛ぶ、磯邊に朝の、興深う、
　給ひし文を、納めかねつゝ。

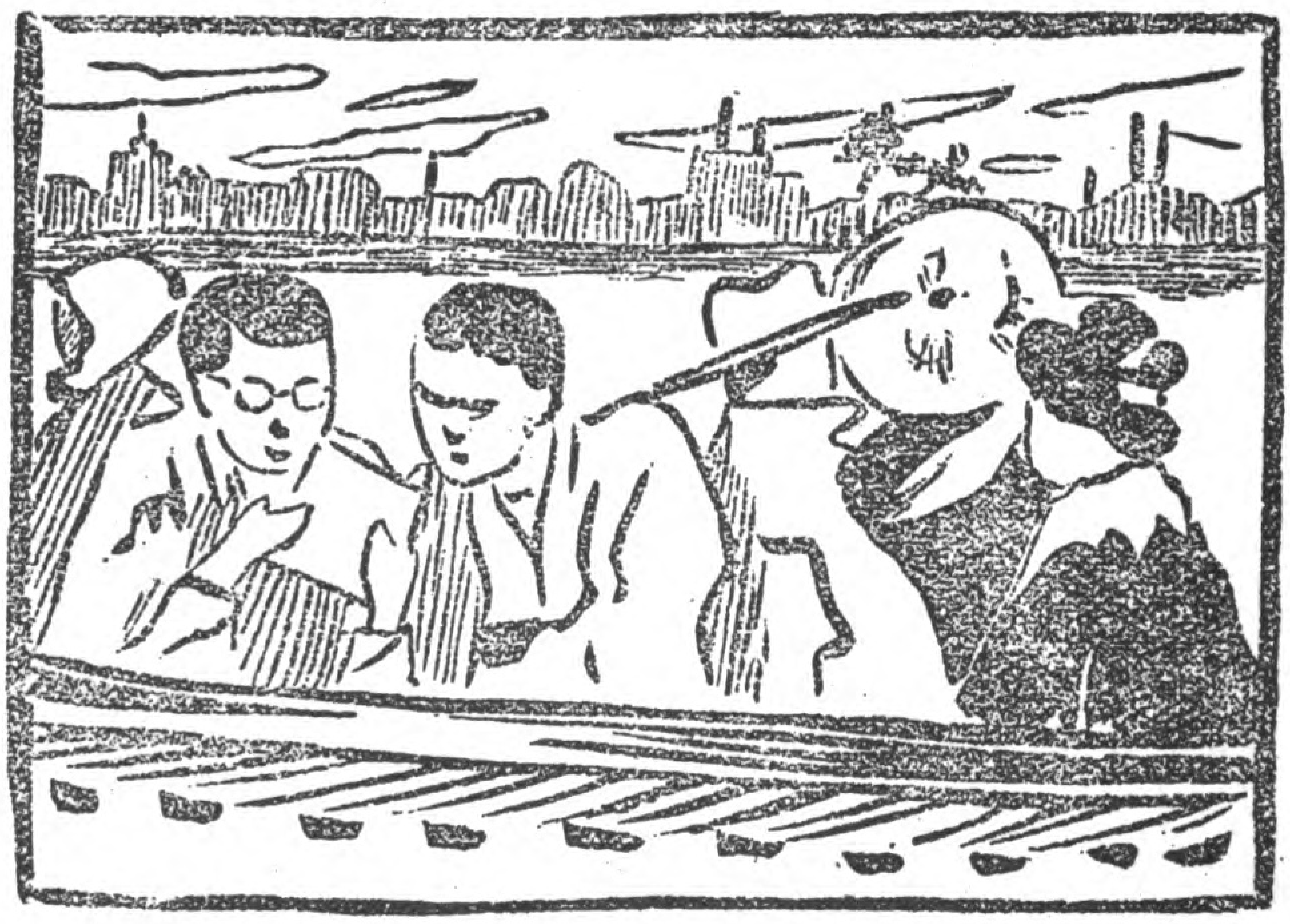
三

小松原ぬけて出て來し、海士三人、少女二人、舟の傍に立つ。魚漁るべく舟浮べんためにや。東天眞紅にして、やがて——あたらしき靈光投げつゝ、昇りましぬる日の神！。汀一帶黄金や撒きし。美しとも美し。殘り惜しうも御玉章を巻き納め候。さらば。今磯波の寄せ上げし、梅の花貝、櫻貝拾ひ取りて、新潮の譜、青藻の香、千鳥の聲、欵乃の音と共に、妾の眞心を籠めて、み手許に參らすべく候。

　蒔繪の筺に秘め給はんか。殘れるおもひはまた後にこそ、いざさらば。
　櫻貝、梅の花貝、送らなむ、
　幻に見し、君のみ前に。

（評）文字は美しけれど氣力足らず。

のりあひ舟　遠江　富城梅子



○春だより

藤原の里　花の人

○

山里の春は、さすがに遲く候ふもの哉。佐保姫の裳裾の馨、華やかなる夕映の雲に薫じては、麗はしき春光の、よう〳〵東風に甦りて候。わが讀書の樓、暖き障子に、老梅の影くねりて、たくましき枝振りのいと勇々しきに、昨日、今日、白き蕾の優しげなるそれさへ、ちらほらと見受けられ申候を、現なの鶯の鳴音、さゆらぐ梅の清香、わが里は今、長閑なる、春の夢路を辿り居申候。

春の淡雲、消えゆきて、世はかぐはしき、梅の噂、とりどりに候。

萌え出づる路芝に、駒下駄の音、繁くなりては、普光寺の臥龍梅、紅き化粧の、うつろひやすき性質とはしらでか、この四日五日を眞盛りに候。

若し夫れ、彌生の空に心うかれ給はゞ、君が御足を、この里にひき給へ！土筆とる里子等は松の木立を右へと指し申べく候。

○

麥二寸、柳二尺、桃源の春は今したけなはに候。白鷺の脛長う、さゝ濁して立ちしあとを、雪解の水、ぬるう澄みて、餘念なく衣洗ふ少女、姉樣冠りいと愛らしきが、落花の賦、清う誦するに、輿作が水車、ゆるう巡りて候。

まひるに近き頃を、牛の聲、睡たげに聞え申候。

麥生高う、雲雀の鳴音、こを春の聲とは聞し召さずや。

○

冬薔薇の氣高さは亡せ。鬼薊のすね姿は相應ひ申さずも、たんぽゝの黃、蓮華草の紅、いづれ春野の驕りとも見ん、日傘、繪傘、菫の香、甘きそが露、黃白の胡蝶の憧憬、こは春野の艶。

雲の色、山の影、草の匂ひに、春深うして。

○

しと／＼と降る春の雨、山里こそ、をかしう候へ、女蛇の目の優姿はなくとも。

琴の音、しんめりと、緋桃の雨に歌ふは誰が子。

軒の玉水、泉水に波紋畫きて、そと浮草搖れば、白き子猫の、一ひら、二ひら、淡紅花の花片脊負ひて、額の和毛紅うせられたる、誰が戲れと問ひ給はて、いづれは山里の春雨の色と推し給へや。

（評）綿々讀くべし。

○姉妹のやうにせる友の許に

紀伊　桃小路女史

よい天氣つゞきに麥の二番打忙しく、百性は御同然、お忙しい事とは存じ候ひながら、お邪魔を申上ぐる罪は後廻しと、先づや問題を提供すれば、この忙しい中の助太刀、一本賴まれまじく候や、例によつて私もお手傳申上ぐべく候、とこれだけ、御都合いかゞに候やらん。傭人は隣のおばさんより外になく、それが例の三五十八、五六三十五の慾の自慢話に薄つぺらな唇のみペラ／＼と仕事は捗らず、さりとて男日傭は四十錢麥五舛がものはテンと飛び申すべく候につき相成るべくは軒の鶯よきたよりをお聞かせ候へと、かしこ。

（評）輕妙。

新歌謡

編輯局選評

一等

ふじのすがたの晴れたる朝に三保の若松根をのばす

岩代國伊達郡小島村　菅野和子

目出度し、新し

三等

月の出入りも山から山へ汽車はまだない飛騨の奥

飛騨國高山欠之上町　武滿美代子

古態残れる地、新調あり

四等

根室名物港の氷海の上にも小屋が立つ

根室町大字有磯町　若狭はな子

風土は俗謡の好詩材

五等

白と紫あの花菫どちら姉やら妹やら

常陸高濱町東大橋　大和田清子

斯く歌へば菫もやさしくなる

秀逸

○赤城かげれば淺間が晴れる中の榛名は夕日する　群馬　かるかや

○幌の中へもひら〱〱と櫻舞ひ込む春の暮　小石川　野菊女史

○汽車は瞬間十里も行くに妾草刈一町も　長野縣　中村まさし子

○花にとまつた蝶々てさへもたまにや荒野の草にねる　石見　神の子

○萠えよ若草煙れよ柳嫁さ乘せたる駒かくせ　上總　松が枝雪子

○あれよ又なく藪うぐひすの一音入れたや笛の中　若狭　長谷川英尾

○若しもできればおつれとふたり月に行きたや十五夜に　鳥取市　山根綾江

○女波男波の其間より生れた樣なる春の月　廣島縣　河村たもつ女

○私や四十で汽車には一度一度乘たら目がもうた　津市　中村梅子

○浪華名所の天神橋は行きと戻りて二十分　大阪市　辻梶子

○裏を流るゝお堀の水は東京市民の使ふ水　府下　小室きん子

○七つ不思議の一つを問へば遠州灘打つ波の音　靜岡縣　藤本靜江

○積る白雪其のまゝ取りて雪なき國へ送りたい　陸奥　名久井せえ子

○さくら咲く咲くお里は曇る花の三月は風もない　上野　微音子

○星の數程雜誌はあれど月と見えるは女子文壇　福島　ふく江

○水田二町と畑が五反五人家内でらく〳〵と　出雲　世良富美子

○笛を合圖に姿は見えず出來る事なら汽車止めて　德島市　坂野白露

○わしの在所にや日曜はないが雨の降る日がお休み日　三河　中島霞子

○櫻くれなゐ柳はみどり野邊は一面おりぶいろ　滋賀縣　川島嶽子

○お宮まゐりの道者をけふもとめた山田の伊勢音頭　牛込　落合いつ子

○國が越後の名物なればわしの村では山家烏　滋賀縣　松ヶ枝

○折ればこぼるゝこぼれりやおしいとても土産にならぬ萩　後志　濱のや眞砂

○私しや田舍の小學敎師子供相手でおもしろい　美濃　無名

○四は愛宕よ東は比叡よ中に賑はし京の街　麴町　淺井千鳥子

○妹可愛や花束なげて草を褥にすや〳〵と　常陸　貝塚はろ子

○沖つ白波あとなく晴れて雛の品川時雨ふる　館山　紅白女子

○わしが米とぐつむりの上で可愛や鶯の初音する　相模　岩田小春

○町を過ぎ行くあの花電車花の樣なる人も乘る　備後　田邊水仙子

○與作藁打つ嫁糸を繰る裏のやぶでは鳥が鳴く　大坂　山田いな子

○佐賀も都よ電話がかゝり人のうわさにや師團立つ　佐賀市　副島松子

○妹はたらけ今年の暮にや乘かけ御馬で嫁にやる　北總　富美江女史

○眞んにうれしや前ゆく汽車にあすは私も乘つて行く　橫濱市　季子

○春も來ましたスミレも咲いた行つて摘みましよ七栄野へ　下總　相川みよ子

○今宵嬉しひ舞ざらへ然かも目出度い老松を　大和　白露子

○わたしや小島の一本松よ月がのぼれば影がさす　陸前　千葉はま子

○雪に閉れたる鵜岡人も今日の吹雪にや家ごもり　羽前　佐藤芳子

○雪で名高い越後の國ははしご入らずて屋根上る　越後　川田郁

○今日は桃狩り明日櫻見よ困る試驗も終へたもの　福岡　村雨

○春の女神がこぼした種か庭に三つ四つ白菫　弘前　工藤さよ子

○許しうけずに何故此處さ來たか今は里にも歸られぬ　秋田縣　佐々木千代子

○わしの村には芝居は無いが草と草とお角力取る　京都　白菊

○お約束した日曜は明日よ早く寢たいが眠られぬ　大阪　谷口きし子

○ゆふべみた夢御船に乘つてましして行手は佛蘭西に　常陸　香華

○わしが故郷に名所はないが一つ見せたい松がある　深川　元子

○前に新道裏には電車戀る世間は夢の間に　東備　坂東須美子

○周防名物は縞と紙と花の三月櫻鯛　周防　一丈青

○懸けて吳れたる心が嬉し朝の櫻に牛乳の壜　磐城　武者麿子

○私しや近江の蚊所娘蚊帳の名處八幡町　千鳥子

○高い富士淺彌生の頃を花の袴に烏帽子　備中　佐藤ひさ子

○櫻見るなら上野はおよし大和櫻は九段坂　越後　堀川弘子

○牧草刈りする私しが身にもさすが藁は刈りかれる　鹿兒島縣　貴島たか子

○かたい蕨の拳もゆるみすみれ花さく頃が來た　兵庫　梶原玉子

○里の乙女が鞠つく唄に眞似て舞ふのよ蝶胡蝶　近江　馬場みつ子

○妾しや野中の一本杉よあらい山かぜ身にしみる　前橋　無名草

○結ぶ手もない田植に帶の解けて羞かし水かゞみ　河內　吉川文子

○赤い襷に白手拭て唄てつみます一番茶　土浦町　琴江

本郷　きく子

○いつか一度は見たいと云つた花のお江戸は目のあたり　福岡縣　洗耳

○一等もろても深張りやいらぬ私しに似合ふは饅頭笠　大和　塗谷瓢生

○姉は江戸子妹は大坂私しや紀州のノシ言葉　尾張　菅沼秋香子

○朧月夜を妾や里歸りあれさなつかし橘の家　相模　中川かれ女

○櫻狩り來て舞ふてる袖に花がちら／＼ふりかゝる　下野　栗原くに子

○春の女神の化粧の水が垂れて咲いたか花すみれ　牛込　和田てる子

○妾しや角帽洋服よりも笠に褄着る人がよい　下野　梅澤皆子

○花の吹雪は雲雀にちるよ欄に倚りたる京の娘　府下　森田きよ子

○いつも嘉例の白米あげて今年もつくりましよ富士の山　安藝　手島まさ子

○わしがお國で名高い物はかきに蜜柑にともの酒　安藝　箕岡すゝき

○妾や菫よ貴君は桃よ花でたとへる歌の友　伊賀　山村りやう子

○咲いた花なら散るのは常よ妾しやつぼみて他家へ嫁く　紀伊　出口さかゑ

○雪は降る／＼もう五時間も今じやあたりは銀世界　加賀　舘芳香

○友は東にわたしは西に別れて歸る岐路　横濱市　植木秋月

○私しや十一奉公に出たが文字が見えぬとてもどされた　福井縣　竹下濱尾

○母の供して吉野の山にさくら花見がして見たい

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○靈性と人生

上總千代田村　山田沖子

一

デカルト曰く、『我思故我在』と、自我生存の意識を説きて一語明斷、扉を排して直ちに野を觀るの概あるを覺ゆ。

『思』とは何ぞや、曰く、人間本來の要求たる精神的活動の謂也。換言すれば『理想の追求』是也。我等は是に依て靈性の存在を知る可き也。

二

思ふ、我等は人生の本然に於て精神的要求の瞭々たるものあるを。則ち人間の生命は、單に骨肉皮の組織上にのみ安住するものに非ずして、別に幽妙至玄の力の存在に俟つ也。我等は是を靈性と呼ぶ。靈性は猶珠數を繋げる緒の如し、是無くんば個人的自己は全く其統一を失ひて、忽ち散落すべき也。

夫れ斯の如し、我等の肉躰は肉躰それ自身の爲めに存せずして、靈性を擁して初めて其存在に意義あるべき也。所詮肉躰の現せるものは自我の影也。常住慰安の眞自我は、獨り靈性に於てのみ認め得べき也。

三

紛糾せる世態は個々の人を驅つて、各種の理想を追求せしむ。之を理想の差別相となす。されど人は其の本性に於て一致する所あるを以て、此の差別の理想以外一切の同胞に共通せる理想を有す、之を理想の平等相となす、かくて差別の理想は特殊の職業に關し、平等の理想は直ちに人生其のものと接す。

更に一歩を進めんか、理想の差別相は生存の方便也。其平等相は生存の究竟目的也。彼は

相對にして、是は絶對也。絶對の理想は人生其のものの理想也。哲學倫理宗教、其外觀は各異なりと雖も、其歸着せんとする所は一也。然も此の理想たるや、無音無象、一代聖哲の論議、時に猶群盲の象を撫するの觀なしとせず、是を以て模糊として夕靄の如く、飄乎として幻影の如し、空想中に出沒して變幻の妙を極むるも、捕捉するに由無く、偶々吾之を摑めりと云ふもの掌を開けば、多くは是れ空のみ。

四

人生の理想は一切衆生の歸趣也。此故に百流の江河を收めて洋々たること大海の如く、千重の峰巒を下瞰して高遠なること須彌山の如くならんを要す。斯の如くにして初めて我等の渴仰の本尊たるを得べく、從つて永遠の精進を期し得べき也。されど飜つて思ふ、人生の理想は極めて卑近なる分子を以てならざるべからず、何となれば我等は人生の行旅にありて、歩一歩理想の實現を期し、其處に幾分の自己充足を得ざる可からざれば也。蓋し、所詮此世は現實の世界也、我等は現實の人間也、理想にして徒らに其壘を高くせんか、我等是に迫らんとして進む時、踵を上げて天に戻らんとして、空しく煩悶すべければ也。斯の如きは一見矛盾に似て實は然らず、思へ、不二の山高しと雖も一歩づゝを登るに難なく、東海の水深しと雖も一杯づゝを掬するを得べきにあらずや。我等の要求する理想も亦斯の如く、一面神の如く崇嚴に、然も他面我等と親しく握手するものならざるべからず。怪むを止めよ、卑近は高遠の第一歩也。



揷草　赤坂　伊知地德子

五

あゝ我等人生は、色あり香ある理想を想望し、期待し

憧憬し、努力す。是を以て電光石火の時日も足らずとなさず、有限の肉躰を無常迅速の間に處して、然も猶優に無限の生命を認め得る也。唯是のみ、我等は常に靈性の命を奉じ、靈性の指示する理想に對ひて、向上一路の進脩を敢てせんとする也。我等の誇る所は唯是のみ。一切萬有の中に伍して人類の獨り燦として虹霓の觀を呈するものは、唯如上の自覺を有するが爲めのみ。

（評）「自我存在の意識を說きて、明晰、屏を排して直ちに肝を截るの概あるを覺ゆ」の語、うつして以て君の文の評となすべし。

四等　○增鏡を讀む

愛知縣海東郡百島　欽哉

眞の歷史に非ず、されど小說にあらず、然も趣味深きは增鏡なるべし。何を以てか之を小說に非ずといふ。增鏡は潤色多く、又詩的なる敍事を以て滿さるゝも、決して事實以外に多くを敍せざる也。是その小說に非ざる所以。若夫れ之を歷史とせむか、そは未だし。歷史は時代を畫くものたるべし。然り、眞の歷史は社會の總てを寫すものたるべし。上流社會のみが決して社會の總てに非ざる也。水面に表はるゝ者のみが決して珊瑚に非ず。增鏡は獨り雲の上の事のみを記せり。直衣束帶の大宮人が生活を寫せるのみ。是を以て吾人は敢て眞の歷史に非ずとなす。されど其文や典雅流暢、而も浮薄に流れず、纖巧に失せず、加ふるに悽愴の氣、時に人を刺すが如きものあり。讀むに從つて益趣味を添へ、そゞろに人をして卷を掩ふ能はざらしむ、殊に新島守の一節は千載の下なほ吾人をして憤慨の念に堪へざらしむるものあり。請ふ暫くこの新島守に就いて論ぜむ

ア、蜻蛉州三千年の歷史一の汚點なし。然るに何事ぞ濁浪一世に横流し、陪臣不義の劍を提げて帝命に反し、汗馬京師を指して西し、關東の荒武者高潮の如くに攻入り、三上皇、九五の尊を以て絕海の孤島に御袖しぼり給はんとは。

思ふに新島守の一節は作者が最も意を注ぎしものならむ。其の結構と筆路とに於て吾人は甚だ作者の伎倆を多しとするもの也。殊に新島守の前におどろの下の一章を書きしは、大に讀者を動かすに力あり。何となれば、おどろの下に於ける上皇が詩歌管絃の遊に日も足らず、尾の上の松も霞の洞に千年を契ると見えし有樣は、やがて上皇が浦の苫屋の慘狀をうつす前提として、人をして感慨一段の深きを覺えしむるもの有れば也。さあれ、山もと霞む水無瀨殿時代の上皇の御心は如何に長閑に、はた花やかにおはしましけむ。春風千條の

翠を吹き動かす時は、出で、黄鳥の聲を愛で給ひ、皎月天心に冴え渡る夜は、高欄に歌ものしたまひ、或は小弓に、或は歌合せに、雙六に、殿上人と嬉戯し給ひしも、あはれ世は長しへの春ならず、藐姑射の山にも悲しき秋風の吹きそめたるを如何せむ。射山の春は花の如かりき。しかも亦花の如くもろかりき。東關に一たび急を傳へてより、西風遂に競はず。嘗て歌合せに勝敗を爭ひし月卿雲客、吟咏になれし身のいかでか弓矢を以て闕下を守り奉るべき。見奉るもあさましき網代車の御出で立ちにて、隱岐の島へこそならせられしか。榮枯盛衰しら浪に身をば任する千鳥だに此世の無常をかこちてか、鳴くねも悲しく聞ゆるなり。一眸萬里氷をしけるに似たる海上に月の明けきを御覽じて、懷舊の情に錦の御袖しぼり給ひぬらん。吁、「我こそは新島守よ隱岐の海の荒き浪風心して吹け」、先には娛樂の爲めに歌よみ給ひし御身の、今日は滿腔の悲憤と萬斛の熱涙と、發して此咏をなしたまひぬ。這般の照應、暗々裡に存ず。誠やおどろの下をよみてこの章を見れば、感慨更に深きを覺え、榮枯忽ちにして地を易ふるの樣、眼前之を睹るが如し。

三上皇いかに英邁の龍資をそなへ給ふとも、決して隙なき北條氏に乘じ給ふべくも非ず。然るに後鳥羽上皇の銳氣正に天を衝くが如きものありて、却て浪を平地に起し給ひしの觀あるは、げに悲みてもなほ餘りあり。

ア、世を擧つて、幕府あるを知りて皇室あるを知らず一天萬乘の君、白雲遠き浪の彼方に成らせられ、鳳闕の殘礎空しく哀れを留め、椒房の夜半雨は細し。荒磯岩に玉と碎くる激浪も、遂に濁れる世を洗ふに由なく、徒らに配所の上皇をして、轉々世路の浪の澎湃たり鞺鞳たり、人情の表裏、掌を返すが如く、昨日玉樓の身今日離れ小島の島守よとの感あらしめぬ。ア、數行の紅涙一封の書、七條院の御文は如何に上皇の御胸にこたへたりけむ。天慶の將門、純友の亂、さては保元の亂、天祖は常に當代の帝に與し給ひけるを。霞の洞の花は、またこむ春にも咲き出づべきに、西轅寂寞遂に歸らず、千秋の恨つひに解けず。あはれ草莽の臣子、新島守を讀むにあたつて、髮冠を衝くの概なきを得んや。然りと雖かの泰時が出陣に際し、若し錦旗親しく陣頭にあらはれなば如何にと問へるに、義時が正に君の御輿には弓を引くべからずと答へし一段に至り、吾人は覺えず卷を投じて歎じたり、ア、眼底一滴の涙なき義時も猶君の君たる所以を知れるか、流石に忠義の血の流を失はざるか。

吾人此に至つて蜻蛉州の眞に蜻蛉州たる所以を知れりア、增鏡は尋常の歷史に非ざる也。されど吾人に幾多の教訓を誨ふるの歷史也、吾人の義烈の血を熱せしむるの歷史也。

（評）史を讀んで眼光紙背に徹するもの。

五等

◎書窓雜感

上野國利根郡久賀村須川町三九 森下方 かるかや

◎我初め大きなる田舍家に人となり、多くは其の八疊の間に起臥したりき。中頃居を移し、同じく八疊に一友と住めり。而して今やまた一人、さる人の二階なる三疊の間を借りて住めるなり。幼き時家を廣しとも思はざりし我は、今三疊の狹さも馴れては苦にせず、窓下に小机、壁際に行李本箱、その間をわが天地と觀じて、覺めては歌ひ、夢にほゝ笑むが常なり。可笑きは人間ならずや、綾羅をまとひてもなほ國を奪はんと謀る女あり、褌一つとなりても、樂みはと唸る女房あり。小に居れども心長閑に、大に在り猶飽くを知らず、滿足すれば眼中に王侯もなく乞食もあらず、面白いかな。

◎讀書に耽りたる時、夜は更けて沈々、側なる炭火白みゆきて將に滅せんとす。玆に至りて駭くは遲し、また炭をつぐも再び燃え熾らんこと容易ならず。若し急激に炭を加へんか、一點の螢光は忽ち失ふべく、之を煽ぎつゝ靜かに加へゆきて、初めて漸く熾なるをみる、而も火力未だ大いなる時に炭を加ふることの易きと孰れぞ。あゝ吾人が過失を矯むるや將に此の如くならざるべからず、迷ふこと愈ふかくして、これを覺醒せしめんこと益々難きを知る。

◎墨を以て記したるとインクを以てしたると、美しきは紅紫のインクにてものしたる方なるべし。然れども一見して前者は重々しく、後者には輕浮の嫌ひあり、且つ墨はよく百歲の風雨にその跡を殘せども、インクにてものせる文書の生命はよく幾時ぞ、時ならずして色褪すべし、世にお世辭の巧みなる女あり、その多くは輕薄、日を經ずして色さむるの類なり。

（評）何人も言はんと欲して言ひ得ざる所を捉へたり、才筆々々。
（又曰）最後の一節は、あらずもがなと思ひて、全く省きたり。

◎漫錄

上州 花波女史

○人生の活動を阻害し理想の向上を呪咀する最も惡むべき罪惡は、平和を願ふ心なり。平和の希望は人生の最も憫むべき弱點なり、最も卑怯なる意志なり。

○吾人の生命は無限の過去と未來の中に存するが如くにして、吾人の存在は常に永久の疑問を以て取り卷かる。疑問は即ち吾人の存在にして、理想は即ち疑問に對する吾人の武器なり。

○吾人の生存は實に永遠の疑問なり。さればかくて煩悶は現はれ、かくて健鬪は現はれむ。煩悶と健鬪とは最も光榮なる存在にして、生命は此處にありては常に謹嚴なり、熱誠なり。

○吾人は唯だ健鬪して、疑問の中に、煩悶の中に、悲慘の中に斃れんのみ。何ぞ悔ゆる所あらむ。勝は固より望む所にあらず、敗れて屍を馬革に裹むも功は猶ほ高し。

（評）痛快。

短文

編輯局選評

二等　○鶯

埼玉縣秩父郡三田川村　近藤とく子

私が女學校を卒へて歸省した時庭で鶯が鳴いてますから家のかと思つて妹に尋ねましたらもう二十日ばかし庭へきて鳴いてるとの事に私可愛くつて毎日それをきいて樂しんでましたが或時私が琴のおさらへをしましたらそれつきり影も形も見せませんでした。

上手か下手か。

三等　○子鼠

本鄕區弓町一ノ二十五　朝井千とせ

徒然なるまゝ古き歌ほごの箱持出して日當りよき椽にてすゝを拂ひ、こはれたる蓋取れば「アラマア」中には未だ目も開けぬ子鼠が四頭、吁どうして是が交番へつれて行かれやう。

ペストも寂滅。

四等　○きぬ〴〵

大阪市南區天王寺　知る人

絣紬の着物に羽織海老茶袴は學生らしく縞の着物に黑繻子の帯は下女らしく、行の短かい柄のあらひ着物は田舍者らしく、小紋縮緬の長袖着物に鹽瀨の華美な帯は令孃らしいと、母さんはいはれる、わら人形も衣裝からとか言ひます。

これある哉、文子文壇獨特の單文。

五等　○蝶の宿

岩手縣盛岡市志家卅一番地　さざれ石

私は蝶位好きなものはありません、ですから毎年蝶のために花のお宿を作つてやります。去年は内の廣い畠へ一ぱいに黄金の菜の花を植ゑてやりました、今年は百合の花を植ゑてお宿を作りませう。

千羽、二千羽。

秀逸

○風呂

福岡　洗耳

山から落つる懸樋の水を朝の間から一ぱいためて、三軒て交る〲立てます。一番に

お父樣方、次に芳雄さんと春ちやんと私、終に母樣方洒水は下の段の石を踏んで谷間の淸水で。

ふるゝはつらき人の世の衣。

○梅　本郷　き　く　子

昨年母樣と買物に往きまして歸りに買つて來た梅の一本兄樣には直ぐ枯らすだろうつて笑はれましたが一生懸命丹精したお蔭か此暖かい春の日光を嬉しげに徐々笑ひ初めました私は毎朝起きると直ぐ雨戸を開け放して新鮮な空氣と此淸い床しい梅の香を共に吸ふのです

見さんも感服す。

○蕨　周防　河　村　章　子

叱り人はあるまいかと見まはしつゝ、そつと枯草を集めて火を放つと、小兎があはてゝ飛び出した。遠近に雉子の聲する春の暖かい日、燒木杭を掘つて見ると、如意のやうな蕨が五本。

今日はな燒きそ……。

○古下駄　信濃　藻　の　香

土地の豪家と人達にいはれるけど母樣は下駄の穿き古しを皆集めて、よく洗つて、緒が切れて居れば、御自分でくげて、緒をすげて、貧乏の人達にめぐんでおやりになります、お母樣が工合のお惡い時は、私が代理を致します。

質素なる慈愛の生活、讃歎す。

○私の名　大分縣　平　田　つ　み　子

私の名は私の行ひ一つて善くも惡くもなるのです。

座右の銘。

○支那人　牛込　落　合　逸　子

妾の家の隣りの鳳翔館と云ふ下宿屋には支那人が澤山止宿して居ますが其の中に吹風琴の上手な人が一人居ます。夕暮になりますと必然やりますが何時でも歌の譜は「勇敢なる水兵」です。妾は唱歌と合して居ますが『未だ沈まずや定遠は』になると、言ひ知らぬ感に打たれます。

少女は知らず亡國の涙。

○朝寢　茨城縣　石　塚　し　づ　ゑ

「今年の鶯は訥だ」。と弟の聲がする。隣家からは機をる音が拍子よく聞える。日は最早餘程昇つたらしい。呉竹の影は黑縮を窓に、さや〳〵と朝風に戰いでゐる。春を病む身の力なく寢亂髮を掻撫てつゝ漸う蓐を離れた。

午前十一時。

○樂しき今朝　滋賀縣　三　上　辰　子

まあ此雪丸町の道をやつとのことて校門をくぐつた乳

離れした樣な兒童等が雪中を走り來て禮する愛らしさ今日は寒いのねよく遲れずにと言つた時先生しましよーか雪投げをと何と樂天ではないですか。

忽ちにして雪合戰。

○これも自然　赤坂　紅葉の里

從姉は、大の白粉きらひて、叔母が、やかましく、云ふと、母樣白粉つける位なら死んだ方がいゝわ、と云ふのを例としてゐた、けれどおかしい事には私が或日遊びに行くと、その白粉きらひが、白粉つけて居た。

何事かあるのです。

○待つ樂み　府下　森田　文子

私は今年十二才て子守奉公に參りましたが、お子さんの大人しい際には茶摘み眞田編みなどを致しまして一錢二錢づゝためたお錢が七十五錢、是て里の母さんにお好きなものでもと藪入りの日ばかり樂みに待て居ります。

里の土産も買うて來よ。

○花の名　上總　撫　子

妾の御母さんは花が大好きなので、生れた六人の姉妹は何れも花の名て、一番の姉さんが萩子、次が菊子、其の次が百合子、四人目は藤子て、五人目が梅子、妾は尻切れにはチットよすぎます。

次が鹽子、さくら子、あふひ子など。

お洗だく　長岡市　みさを



○二冊の本　丹後　鹽見千代子

私は三年の間、京都の女學校に居りましたが、其間に方々の教會で、牧師の說敎を、一一筆記しました所遂に二冊の本となりました、それを此頃は、丹後富士の麓の茅屋で、一生懸命に、修飾して居ります。

意味深き回想。

○大嫌ひ　仙臺　月　子

いやに成人ぶッて無邪氣でない子供いやにつんけんして奧樣ぶる方いやに臺所などにくちばし入れる旦那樣いやに生ハイカラな男學生いやに氣取ッて生嚙りの英語などこれ聞けよがしに御饒舌する女學生などは、私大、大嫌ひ！

旦那樣恐縮。

○こかけの池　讃岐　國越茂子

丸龜から高松への途中、綠の色深き松並木の一帶、水

靑く波靜かな淸き淸き池の此方の岸から彼方の岸に、細く長く切れつ續きつ、丁度天の橋立もかくやと思しき處がある、聞けばこかけの池とか、私は此處へさしかゝる毎に、此汽車の今しばしといのるのです。

名所以外に名所多し。

○妾の心　和歌山縣　桂　月子

妾は、現世を次の頁とする、眞宗寺の娘であります、けれども妾は如何してもこの樂しい價値ある現世を、見くびつて西方淨土を、待つことは出來ません、で妾は妾の信ずる所を飽くまで實行して後には奥村五百子女史のやうな立派な人になりたいと思つて居ます。

佛家の女人、時代を知る。

○十八時間　京都　濱部郭公

私の隣の家は絹糸を撚る家で朝は未だ暗い内から夜の十二時頃絶えず車を廻す音がして居ります勞働時間を勘定すると一日十八時間京都から東京迄最も遲い汽車が行く時間と成りまず、世に名高い西陣織物は斯る職工が油汗を流して始めて出來るので御座います。

時間と空間。

○紅椿　嵯峨山の麓　利子

幼き友の澄ちやんと時ならぬ汗を流して淸水山から取て來た紅椿の花、今淸水川の畔の草葉の上に座て數へました。總てで十五、二つは川水に流し壹ダース丈は花輪にして澄ちやんの頸飾にのこりの一つは崩して筑紫の友と北海道の友とに。

花の別れ。

○鋏　名古屋　小山かく子

私が使へば切れない鋏が阿母樣なら能く切れますので其理を問ねますと『兩方の刃を、しッくり合せて一致させないからです、二つの間に隙があれば役にたちませんよ』私はこれを意味深い教訓だと思ひました。

賢母。

○百花　山口縣　河津才子

浪子さん、いくら生花練習用造花の見本などにして美しい心を養ひたいといふたつて、裏畑一畝とも云に、梅、櫻、牡丹、ばら、百合、撫子、菊、其他色々の草花を栽培して、どうしますかあなた。

註に、新年號の浪子樣にとあり。

○眠る時　横濱　みき代

父さん母さんお寢なさいましと襖を閉めてさて自分の寢間へ來るとふつくりとした暖い夜着が延べてありますあゝ今夜も快く眠れるんだと思ひますと何とも云はれぬ感謝の念が湧いて來ます。

いつもの事却つて忘れ易い。

○時　計　　福井市　秋　花　子

柱時計、置時計、懐中時計、以上の中第一者は俗にボンボン時計と云ひまして、おもに商店で小僧さんの居眠を監督します。第二は眼醒しがおもて、若夫婦や學生に愛用されて居ます。第三は金銀兩種で一般に用ひられて居ますが金側となれば紳士貴婦人の持物。

說明に過ぐ。

○山上の朝　岐阜縣　中島重子

御來光じや〳〵としわ枯れ聲で叫んださうすると石室の中に居つた人々は俄に戸を排して出た一瞬間東海の一端髣髴たる中から征矢を射る樣な威嚴ある太陽が昇つた一時に言ひ合せた樣に皆んなの首は下つた。

海拔一萬尺。

○妾の養雞園　香川　惠　女

私は盃から、三十羽餘りの雞を飼ひました、種類は、ミノルカ、日本、シヤム、英國、チビ、チヤボ、アンダルシヤン、等で、卵は平均一日に、十六七、そして餌は、飴糟、糠、等を與へます。

雞雛守。



春の村家　上毛　青木守子

○胸の動悸　神田　齋藤　春生

前號の女子文壇を、春になつてから買つて見ると、思ひきや、小說の一等敍事文の二等短文の一等は自分の作であつた。こんな拙作がと、今更の樣に讀で居ると文壇社からの賞品が屆いた足も下につかないで胸がどきどきするばかり、折しも目醒時計がけたゝましくチン〳〵〳〵。

夢がさめた。

○御祝の時　佐世保市　中尾結子

御祖母樣は今年で八十七歲なのですから來年は丁度八十八の米祝で御座いますす其時姉の子供富ちやんは御手をひいて金光神社に御參詣すると申しますから私は無用の金を省て赤の御下着を造つて上げ樣と思ひ升。

子供にかへる。

○ひなすゞめ　　鈴木青手子

小屋の日向りのいゝわら積みの上、いつも〳〵雀が來るので其の追ひ手の私は今も追ひにいつて、暖さによわされてそこに居ると、何かもじもじ動くから、そつとわらを取ると、まあ、それは〳〵可愛らしい肥つた丸顔のひな雀二羽、妾を見上げて「チー」。

一羽の雀の言ふことに……。

○柿　　鵜飼静子

私の處は柿が名産地であります。さすがにあちらにもこちらにもそれは〳〵きれいな柿が恰度すゞのようにてきて葉が一枚もありません。私はいつもそれを見てなにかよい句を作りたいものと眺めて居りましたがその柿は今は皆釣柿に。

澁柿變じて甘柿となる。

○大黒柱　　岩代　根本松江

私の家に一抱にも餘る欅の柱がありますが、四十年來磨き抜いて、今では鏡の樣に光て居ます。毎年お正月には其れに松の大枝を結び付けて、其葉に毎夜御飯を上ぐるのです。

地方の建築美。

○花の中へ　　名古屋市　宮脇とし子

『美子やお前姉樣は何所被行たの』堪へ難き寂さ、昵と抱締て悟云ふと『お花の中へ』と許、散行花に送られて、逝三日前、幼き姉が柩を送た其悲愁も知らぬ子の……誰に敎はつた此一語。悟て妾の涙の痕は乾く間迚無い。

明治の子供は生れながらに詩的。

○香水　　京都市　菊子

今朝から末の妹、大變おとなしく遊んで居ます故、何して居るのかと見に行きますとあゝ折から霜にやせた菊花や早散り初めた山茶花の落花を妾の一番大切な、香水の中へ入れてはふり、そして薫をかいては、嬉しそうに。

花の香水。

○神の力　　青森縣　高山武枝子

室咲の梅の花、いかにも誇りがほに椽前に開いて居りましたが、消えのこる雪の中より勢よく芽をいだしたる福壽草、わたしは人のちからで花咲くことは厭ひてすといふ顔つきてありました。

大自然の力。

○小春の朝　　岐阜市　篠田とみ子

今日は暖かそうと折戸口へ出たら目についたものがある、かへつて咲いた薔薇の花一輪おゝいゝこと、本て

よく見るキッスをしてやろうとかけよつて見たら、而もその中に雨蛙が一匹安らかに寢て居る。

蛙とキッスはたまらない。

○去年と今年　　攝津　とね　はる子

去年は娘さんであつた、姉樣、今年ははや、赤ちやんが出産た。去年はいろはのいも知らなかつた、菊ちやん、今年は、おみかんちようだいなど、書くようになつた。去年は、ぬかぶくろも、滿足にぬへなかつた、私も、今年は、大人の衣服を縫ふようになつて、眞にうれしい。

時間の力。

○年勘定　　茨城縣　石塚　しづえ

日當よき南座敷に母と二人去年の小使錢を算し居れば富美ちやんの倉皇かけ來て、母さん二百七十四よ、家の者の年皆で、違なくつてよ。祖父が七十四祖母が七十父さんが四十五母さんが四十姉さんが十九て兄さん十五私が十一と。そらねつと算盤片手に自慢顔。

延長二百七十四年。

○出　勤　　備後　あ　や　子

此頃の冷いのに、十五町の道を通ふて居るのは、づいぶん、難儀な樣である、けれ共私は、一番樂みてあるあの寒い日を缺げずして毎日通學する、すなほな、兒童に、おけいこしてやるのが何より樂み。

○油　菜　　上毛　河内とめ子

毎年麥許り作つては、田にも惡し收穫も少ないから、油菜なら田にも善し收穫もあらうと、私の發起で今年は、三反畝へ悉く油菜を植付ましたが、此頃は眞青に中々葉ぶりがよいものですから、父も大層喜んで、收穫の三分一は、私のお小遣に下さると云つて居ます。

令に良貴。

○針を吞む　　周防　をみなへし子

姉樣私はなあこんなに針を吞でどうして生てる事が出來樣、吁々、もう私は死るのだ、吁々、姉樣どーかして頂戴な、其時姉樣は私を起したのです、吁々、今のは夢、夢であつた。翌朝になつて、私は縣廳からの、裁縫教師となる辭令を手にしたのです其の時の心は。

まさ夢。

○我校の制服　　仙臺市　三好まさる

木綿の筒袖で夏は霜降地、冬は黑で袴は裳に二本線は白でつけ、袖口のリボンの色は、四年はブリユー。三年はオリユーブ、二年はオレンジ、一年はピンクで來學期から設くる補習科はホワイトにするとか、そして胸にはニッケ製の櫻に東の字の入つた徽章を下ます

此種の通信を誌友倶樂部に歡迎す。

○田園生活　富山　みわ女

女子文壇が七日、お針の先生まで一里、リボンが半里着物が一里、高等へ出た女は妾一人、魚は月に二回吉爺が乾物を持つて來るばかり、豆腐は三回角の仲屋で造りますが夏はお客樣を見てから酢屋へ走ります。寧ろ山中生活。

○紅梅殿　高知縣　田内いれき

『あら、姉樣貌……』はたと妙なる琴の音は止んだ。如月の日の光り丸窓の障子に、美くしう影を流して、早咲きの軒の紅梅風なきに、はら〳〵と、散る。

○故山の春　越後　村山芳枝

「擧頭望山水、低頭思故鄕」＝李白

戀しき廣陵の里！、なつかしき休養の場所春はまたかへり來りて、野の花は野邊に山邊に錦織らんとす、あゝ戀しき故山、人なつかしき鄕の春。

○れむい時　備後　今四初枝

れむい時に起される位つらい事は無い。

私はあるれむい夜店でうと〳〵して居ると御免九文の足袋を下さい、はい九文半はございますが九文がありません又うと〳〵して居ると九文半の足袋を下さいなゝ、九文はあるが九文半はない、と云つたら。

○變らぬ　備中　山本千影女

私が十三の時姉樣が十七で大人らしく有りましたからたれてもあんなに成るのかと思つて居ました光陰は矢の如くいつしか四年を送つて私も十七と言ふ年が來ましたなれどやつぱり本の心は少しも變りませぬ何時もとんで遊びたいばかりです。

○鐘の音　大坂　松田部喜子

晉鐘の亂打は胸騷がしく、陣所の鐘は勇しく、遠寺の晚鐘は物淋しい、此れ等しく鐘の音ならずや。

○たのしき日　福岡縣　永野吉子

土曜の日は晝から姉樣と二人して御部屋の掃除姉樣かぶりてほこりたきして居らつしやるは姉樣筒袖で雑巾かけるのは私本箱の上も机の上もお床の飾も塵一つないお部屋の中で姉樣は裁縫私は其そばでおさらへ氣持のよいたのしい氣はみちみちて居る。

○前栽もの　橫濱　美名登

今日里から大根蕪菜等が屆いた、これは古鄕の前栽に出來たものである坪數はあまり廣くはないがまだ色々の物を植ゑてある、中でもこの大蕪は每年父の自慢ものでまた隣村迄も評判をする。

○田舍と東京　本鄕　なばな

妾はお正月に里に歸りました、それで東京と里とを較べて見ますと里には自然の花が澤山にあります。

東京には植木の花が澤山あります皆さん蝶々が天のお使としたならば、何の花を好みましよか。

○羨やましき事　神戶市　高田こぎく

我は不幸にも幼時父を失ひ母一人にて養はれしが其母も今は東の都へと旅立妾も目的ありて主をもつ身となりぬ他人の父よ母よと子は親を親は子を睦まじく語るを見る程羨やましく感ずる事なし。

○樂しき我家　德島市　秋野花子

少さい辨天樣の御宮のほとりに海に面して茅屋がありますこが私の家で父樣母樣祖父さん祖母樣それに姉さんと私とが晝はせツせと働いて夕には皆が揃つて樂しく晚饗を食べて夜はお宮のお神樂が鳴ると寢につく。

○お湯貰ひ　成田町　渡邊よし子

昨夜、妾と妹と弟と、そしてヂヨンと四人連てお叔母さんの家へお湯を貰いに行つて、歸りに柿を澤山貰つて來ました。

○池邊の不思議　常陸　香花

昨日はたいそう暑かつたので池の岸の芝生の上で書見して居ましたら弟の確雄麥稈帽に運動シヤツの扮裝でやつてきて汀に佇んで水の面をみて居つたが急に姉さん御池の水にひだがよるとさも不思議そうな顏付私は

思はず吹き出した。

○おち葉のゆくゑ　伊豫　須山倭文子

入濱の森の大榎に落ちた葉が梢に踊つたかとばかり鳥が群れてゐる折から森をよぎつてごーぜんたるひゞきと共に汽車があらはれた村のこなたへ來るとけたゝましい笛の響！榎の葉はばつとあたりにちつた…ちつた黒い葉の其行衛やいづこ!?

○胡蝶　下野　菊地楓女史

あたゝかい春の日、読書にあきて庭に出ますと、まア何うしたのでしよう、黄色な蝶が蟻に引かれて行きます。妾は蝶を拾ひ上げて、櫻の下へ埋めてやりました其の夜てした、妾も蝶も美しい天女となりました夢を見ましたのは…。

○冷水摩擦　京橋　今泉磯千鳥

若人に「最氣持の宜い事は」と問はれたならば、私は必「冷水摩擦てす」と斯の如く答へます。夏に冬に冷かなる水にて體を摩擦する時の心地！　噫私は一生忘られません。春夏秋冬！一日も休まず励してからは風邪すら引きません。

○姉さん　京都市　田島かほる子

霜白き夜、下弦の月は寂く凄う窓内の病人を照して西に落ちむとす。おゝ月の下にゐます母はいかに、弟はいかに。古郷を出て此處に看護婦たる事五年、私の姉さんは、その看護婦である。

○椿　丹波　幽閑子

あんまり閑寂なので里へ托鉢にても御出掛けなのかなと思ひながら庵の生垣の外から「庵主さん。おゐやすか」。と聲をかけて見ると返事はなくて「ごほん」。と咳が洩れた時。そこな無縁佛の傍の椿が一つバサリと裏を見せて落ちた。

○尼寺　高知縣　森岡頼子

私は今日隣りの尼寺へ行きましたら、椿の花のほろ／＼と散る下て、主じの尼さんが、此程寺入りした七八つ位の可愛らしい娘の子の髪を落して居りましたので、憐な我身の上と思ひ合して涙がこぼれました。



野良がへり　長門　原田春子

○すきときらい　相模　一紅

桜は霜柱にとじられてみぞれの中にかほる梅と落葉を錦のしとれとして温かに來ん春を夢みる菫とが一番すきて私温室と云ふもの位嫌なものは御座いません。

○楽しき一日　留萌村　白百合子

昨夜から降り積た雪が深さ凡そ二尺。それに大人てさへ吹き飛ばされ相な此地獨特の大風。今日はきつと生徒の出席数が少いだろーと思つて、教壇へ立つとオ！勤勉なる教へ子よ。空な席は僅かに一ツ二ツ。最も楽しいのは此日の授業。

○試験　長門　尾嶋松代

號鈴と共にどや／＼と教場へは入つて來たやがて國語の教員がやつて來た　何時もニコニコな其の顔が　今日は夜叉の様だ、塗版に問題を書かむとて白墨を取つた、妾が心中はさながら怒濤の荒れまはる様だ、願はくば容易ひ問題であれ。

○錢の頭　長崎市　峯時子

私の市中では節分には　カナカシラと言ふ魚を是非お膳に付けてお祝ひ致　しますそれに付ては　面白い意味が有りますお錢の頭に成るとやらで昨今は一例のやうになつて居ります私も今年の節分には大きなカナカシラを買つてお父様のお膳に据けました。

○嬉しい心　磐城　武者露子

妹等が騒いて居たのは之れだなと近よつて見ると黒い庭土て拵へた小山其の廻りには丁寧に柳の垣が出來て居て正面の門の處には菫の花が植てある。萎れた海棠の一枝は丘の頂きにたてられてそれには何か書いた紙片何げなくひろげて見れば『てふの御はか』。

○當はづれ　本郷　なゝしぐさ

ガタリと郵便箱の音、ソラ父様からだとかれて日をくつて待て居た折柄ひとりてきめて女中から受取る間ももどかしく手にとればまあいやな！古着やの廣告。

○歸郷　　近江　菱田秀子

なつかしい友と二人がをしき袂を分ちて上京してから丁度今年で五年目最初二三年間は文の往復もしてをつたがそれから後こちらから幾度手紙を出しても返事は只の一度もこん此度卒業して歸つたらまめてまつてゐて下さるだらうか。

○三日の夜　　京都府　竹葉女史

雛壇にお供へ物して御燈明を上ました、蕾活けた緋桃の花、と見るポーツと薄色になつて、觸ても落ちそうな雛様のお顔がそれは〳〵すき通る程白い。

○美しい花　　東京　とき子

お机の上の花が淋びしくなつたので何にかほかにとお庭を見れば此二三日の暖かいので綻びかゝつた紅梅、清の散らない様に一枝折つて花瓶に挿し、お化粧の水をやつて何うか美しい花を咲かせたい。

○乳兄弟　　はりま　自然の子

お隣りの千代さんは、牛乳屋の牧場に居る小牛を指して「私とあの牛と兄妹よ」と云ふた。なぜときいたら「あたい牛のお乳で大きくなつたんだから」と淋しそうな顔して居る。それも其はずあの牛が生れた時分千代さんの母はなくなられたのである。

○仕立直し　　南多摩　金子信子

父様のお下が母様の、武雄のお下が頭坊のして私はいつも姉のお下りばかりよ、夫が近々の内に姉様とお別れして私一人になるのよ、新らしい物を戴くのは嬉しいが何だか姉様とお別れするのかと思ふといやだわ。

○秋の行く道　　滋賀縣　松ヶ枝

毎日家を出て第一眼に付くは太作の納屋裏に有る未だ青い青い柚、其から治助の院家にしから鈴なりになつた柿の木二本、區長殿とこの赤く顏をあらはしたざくろ、近頃柿もざくろも取りつくされて今は只柚のみ淋しそうに、葉の中から顏を出して居ります。

○亡兄　　大分　和子

惜然として庭に立て居ると私の後毛をソット撫た風に何とも云へぬ匂がした夫も其はずで亡き兄の一番秘藏にせられたばらの花が咲たからてあるあゝ此花の爲に何度も兄様のお叱りを蒙つた今てはもう叱つて頂かれぬ何故あんなに私は欲しかつたてあろう。

○涙の色　　九段　あくがれ人

一月二日の晩只一人の子の山夫さんがお寶を賣つて母様十二錢だあげやうといつた顔を見て友達の處へ行つたなり歸りが晩いのを案じてゐた、敏子さんは泣いた。涙に色があるならばかつて相愛の夫が戰死した時にも人に涙を見せなかつた敏子さんのこの時の涙は紅てあられればならぬ。

○憧憬　　越後　たき子

「まあ、危ない！」と、今しも無心に火鉢をかきまわそうとする奘ちやんを抱きとむれば、彼の紅なるが火とも知らずまた手をのべて摑うとする。

あゝ、吾理想と云ふも、希望と云ふも。吾奘ちやんのそれのやうてはなからうか。

○眞心　　長崎市　木原すい子

私は一時も忘られぬ乳母と新橋て別れた時、御婆様又何時か御目にかゝりますと、云い知れぬ悲しさに泣て此方八年過ぬ今日迄私のすきな淺草のりを毎年々々送てくれます、噫此眞心に如何してむくいたら。

○手向草　　栃木縣　田波ため子

佛壇が常に新しい四時の草花によつて飾られてゐる位愉快な事はない。晴た朝ご香を焚に行た時、白玉のこぼるゝ緑葉紅花の吹き起す床しい匂の奥から祖母の位牌が可愛孫と言ひ顔に笑つてゐるなぞは何とも言へない心地善いものである。

○早や五十日　　三河　長坂よし子

去年の春父上が、植木屋さんから御買ひになつた此紅梅、其時僅か八花咲いて居たのみてあつたが、今年は父の施肥と手術とによりて、此様に澤山咲きましたが、悲しい哉、父上はあの世の人となられまして、今日は早や五十日。

○栞　　廣島縣　今西初野

私しあるあたゝかい日、庭の櫻の木の下て文壇を讀んて居たのよ、すると

ばら〳〵と風もないのに櫻の花が二片三片本の上へ、あら栞が出來たわ。明日も又文壇を開いて見た、まあうれしい事きれいな押花が、記者樣一つ上げましやうか。

○かた栗　　盛山　工藤いつ子

長閑な春の日も早暮方となり、小さなコダシをみれば口も合わぬまで片栗が充滿。綠濃い葉は夕食の時お浸しにして母樣へ、うす紫の可愛い〳〵花は束にして妹のみやげなのである。

○夕ぐれ　　京都市　梅　子

お夕飯の仕度もすんだ、鮭の燒物大根の味噌煮きお父さんの二合のお仕着せ迄入れて表へ出ると、赤い〳〵夕日を活々した顏一面にうけてにこにこと鍬を肩にしたお父さんは彼方の大根畑に見へた。

○みとり　　青森縣　三浦愛子

もう若菜も籠一ぱいに摘めたから、早く歸つて病母樣にお夕飯をあげようそして此みづ〳〵しい初若菜をあげたら屹度お悅びなさるわ…あゝそうよ、早くあげてよろこばせ申そう、してあのお優しいお笑を戴きませう。

○此の石　　登　後　菊　子

子供の肥るの早い事、冬季休みに姉の家に遊びますと此間生れたと思つた子が走りまわつて、自分で拾ふたと圓い石をくれますもの、それが秋に殘つて今紙の重に妾は此の石を見る度あの子の福々しい顏が見えて。

○我　家　　肅　城　山川玉林子

庭は雜草蔓延、虫の棲家に、壁は落ち軒にはペン〳〵草が茂り、雨の降る日は漏るので片隅に縮まつて居られればならぬが、月の夜は愉快です、皆樣泊りにお出てなさい寢しながら月が見へます。

○癈物利用　　鳥取市　上山千重子

封書小包…五厘、一錢、二錢、三錢五錢…、總て郵便物の切手と見ると姉樣と私は爭ひ鄭り取ります、そして兄樣のお嫁樣が入らせられるまでには、立派な屛風に作らうと樂しんでまのと。

○國旗合せ　　茨城縣　山下ふく子

妾は正月の二日に親友のお光さんの家を訪ふた。其時は皆お友達が四五人私を待つて居て、往くと直ぐ、國旗合せをしようと云つて光ちやんが鳥の名と定めよう、光ちやんは公爵佐武ちやんは眼高。遙さんはホウホウ。淸ちやんはサカホヤ妾が鯨と名づけ皆顏見合せた。

○節分の豆　　八王子　井澤菊江子

私は、お祖母樣に聞きまして每年節分には豆を十二火鉢の中に並べ其燃えて黑くなる時が雨白き煙の上る時を風に赤くなりて消ゆる時を晴と定めて天氣豫報を知りますの本年は一月晴れ二月の風三月晴れ四月雨五月晴れ六月雨と月晴れ八月晴れ九月風十月晴れ十一月雨十二月晴れ。

○紅　　長門　谷　滑　水

私は紅が一番好き、私の袴は紅てある、薔薇の紅は濃艶てある。櫻の紅は清淨て、天を彩る夕雲の紅は雄大てある、朝日の紅は崇高てある、あア紅なる哉。只悲しいは不出來の學課に引かれる棒の紅。

○我　妹　　德　島　秋野久子

名はお花ちやん、お年は五つ、お顏が丸くて、お色が白くて、頰が赤くて、私が何かおもしろくない樣な事があるとすぐ愛らしい手眞似をして鴇ぼつほ、を歌つてくれます私ほんとに天使のやうに思ひますわ。

○嬉しい事　　茨城縣　日下部　千代子

妾昨年お母樣に女子文壇を取て下さいとお願いしたのまだ早いと仰有たのだから雪子樣に拜借して讀みましたの、今年は初號から取つて下さる事になりましたの妾何より嬉しくてよ。

○水　仕　　麹　町　淺井千鳥子

寒中に洗濯する程つらい事はない。お兩親と御一緒の方はお湯でもなさろうが、親もなく他家に居る身のそうも出來ず、世には自分と同じ人もあらうと思ふて、昨日も洗濯を致しました。今朝田舍の乳母から手紙にて、お水使ひにお困りでしやうが何卒お辛棒を……。

○おなさけ　　名古屋市　北村よれ子

母樣からとて屆いた重い包、開いて見れば暖さうな綿入が二枚と羽織が一枚、そして私の大好なお餅が澤山袋入りはきなこにお砂糖、お雜煮の料とてか鰹節までそへて、お手紙よまない前に先づ熱い涙は頰をつたいました。

新笑話　編輯局選

三等　○體溫器　　横須賀町汐入　堀江茂子

奥樣「竹や何をしてゐるの、はやく體溫器を持ておいてな。

竹「はいあまり冷たくて坊ちやまがお可愛そーと存じまして一寸火鉢で溫めて居ります。

四等　○淋しい　　相州三浦郡浦賀町尋常高等小學校　小永井みね子

某商店の新參小僧店前にて

「東京は賑やかだつて云つたがなんだか淋しいなア」

主「なぜよ。あんなに人や電車が通つて田舎よりいくらいゝじやアないか」

小「だつて知つてる人がないだもの」

五等　○田舎女學生　　静岡　山本静子

田舎の二人の女學生が初めて汽車に乘つてあゝ三等の汽車でもこんなに早い位では一等の汽車は眼の廻るほど早いでせうねと話しをして居た。

○夫人　　長崎市　山口蝶子

「友女」あなたは近々にお嫁にいらつしやるそうですね「ハイカラ女」いや嫁じやないのよ夫人にだわ。

○學者の考　　大阪　齋藤芳子

大學敎授深夜歸宅し門前にて「ハテ考へた事があつたが、何てあつたか知らん、困つた事をした、（三十分計り頭を惱ましたる後）左様、今夜はすぐ寢ようと思つたのだ。

○二十五時間　　神田　川本澗月

甲「此の頃は一時間ぐらゐ日が延びましたね―」

乙「それでは一日が二十五時間になりましたね」

○お釋迦樣　　大阪　美加味初枝

妹「あの姉さんお釋迦樣は三月の雛の節句を御存じてないのですネ―」

姉「何故」

妹「何故つて、御生れなさつたのが四月八日で御沒くなすつたのが二月十五日ですもの」

○下駄　　横濱　美名登子

甲「あなたのお下駄美い事ネ失禮ですが何程」

乙「これはあづまやで三十錢でした」

甲「マアお安いのネ」

乙「デモ兩方で六十錢取られましたワ」

○下女の言ひ分け　　名古屋　中島正子

東京の妻君下女に向ひ「御前は田舎物で行儀を知らないから困りますねー」下女「奥樣私は田舎じやありません名古屋です」

○按摩　　越後　山田きさえ

巡査按摩に向ひ　巡『こら左側を歩かんか』按摩『目が見えないと思つて巡査の聲色まで使ひやがら』

○落第　　京都　濵部郭公女

甲「君ちつとシッカリしなけりやいけないじやないか又落第したんだネ」

乙「ナーニ學校は喜んでるだろう、一年間の授業料を寄附したんだもの」

○火事　　遠江　絹村かつ子

先生生徒に向ひ「火は少しても火事の子と思ひなさい」

生徒「如何なる理由ですか」

先生「火事の源は皆マッチ位のものだからさ」

生徒「では實驗をなして下ださい」



読友倶楽部

○花（課題）

○妾の園藝部と、さだめられて居る處は庭の片すみ二坪ばかりの處です、こゝには四季折々の花が植ゑてあります、只今は桃、ふそうか、あふひ、カンナなどの花ざかりです、妾はこの中のどの花でも一本五厘で母上に買つていたゞきます、そして其の御金がたまつた時妾の好きな書籍と植物の種子とを買ひます。

臺北　春　雨　子

○私の室の中に咲いてるのは、棒に水仙です、是が花の内で一番すきなのです、たとへお友達は變つても、この好きな好きな〳〵水仙と桃とは變りません、そこで此莨き香をいつまでも殘したくて私はこれの香水を製りますそはエーテル油と云ふ液に此等の花びらを浸して置きますと直ぐ溶解して香を吸ひ取ります　そこで花びらを引き上げ此水を温めますと揮發し易いエーテルは無くなりあとには香水が殘つて居るのです。

白　水

○花はどの花でもやさしい心を持て居りますから妾は何の花でもきらひな花はありません而し白ばらを一番好みます　私のうちの庭はいつも白ばらの絶えるとがありませんから毎朝取つては花甁にさし机の上にのせて眺めては花の樣に心をやさしく致したいと日頃思つて居ります。

沼津町　飛　奈　久　枝

○妾の理想の花は大方西洋草花で、ばら、パイオレツト、チユリツプ、遊蝶花、小蝶花、カーチーシヨン、白百合等です、この中水蝶花は妾の親にとりました、夏の夕方それ〳〵遣り水した後小い蝶形の可愛らしい花が漸々開いて行くのを見るのは一つの日課でした、花は無限花序で咲いて行くのは向上主義をあらはして居ます。

藤　井　水　蝶　花

○兄さんは菊を愛します私はばらを愛します其次が朔てす百合や木犀は匂ひがつよいので大きらひです。

私の髮には時きらはずいつもばらか菊がかざして有ます　今は兄さんがわざ〳〵東京から送つて下すつた白椿をさして居ります　兄さんのすきな菊は温室に咲いて居りますのに兄さんは加奈陀からいつお歸りてしやう。

新　田　ば　ら　子

○私わ梅と百合との二花は愛すべき花と思ひます　わ梅は霜をもいとわず多くの花にさきだち白く紅く色をそゐ香いにも花にもほこらず咲くべき時に咲く有樣實に乙女の鑑です　又百合は暑い〳〵、私共の學校の暑中休の頃でも咲かねばならぬ時は美しく咲きます　此の二花は人の目を樂しましむるのみならず人をして勤に勵む力を増さしむるよき花と思ひます　また花についてはいろ〳〵有りますが今日はこれて失敬いたします。」

佐久間　たま江

○私は靈の花が一番好きてございます　春野に咲きみだれて目にとまるのは薹でございます　菫は少女らしくよい香がしまして　なんとなくやさしく見えます　次ぎに好きなのはぼたんでございます　力ありげに稱々として　ぼたんを友として居りますればからだは健康になります　次ぎは床の間の寒梅でございます。

新潟縣　土　田　り　た　子

○私は野菊が一番好きてすよ、優さしい花です事、自由自在に生活をして、そして人に可愛がられて、私もほんとに野菊のように成つて見たいわそれから庭に咲きますばらなんか品行がよいばかして、ちつとも自由にはなれませんもの。

大　阪　と　き　子

○大なるあでやかなる花よりも小なる花がすきてす秋の頃野邊の片隅に一人淋しく優しくはた床しく咲き匂ふ野菊の花を其中でも一番愛します吁其心の清く尊さよ散歩のかへるさにはいつも手にし机上の花瓶にさしてスケツチをしますよ。

久留米　中　島　き　よ　の

○薄紫のヂキタリスは朝顏と一寸似ていますれ、山吹躑躅櫻は散りやすいから嫌い、同じ百合でも、鬼百合車百合は餘り好かない、野百合、姫百合か藤、蓮華、白梅、菫。

神戸市　秋　月　子

○朝顏の芽を出して五六寸の時二本のつるを紙よりて結び置くとつるとつるが遂に付き合つてし

まう其時一本のつるを切りすてると後が二本で一本のつるに養分をおくるから（花は通常のより二倍の大きさに咲きます。

○　能登　森田　蔭

美かりし霞ののどかに晴て、ぱつと金箭放つと見えて美しき朝日は出てぬ、春の一日は明くなりたり、「御花よかつたかいれい、」と天なる鈴の音の如き聲もて小ざる脊負ひ其中には春の美しき桃香の花、或は色もうるはしのすみれの小束、或は青き春草の若緑をふけるを入れて草履軽げに町中を賣行く十二三の少女はこれ吾七尾の花賣女なり。

○　名古屋　胡蝶

つい此頃友人と山へ行きましたら道を取り違がへ小一里も奥へ行きました其時まだ見た事のない花を見ました色は紫大きさは梅ぐらい倫度（ピロド）の様な光を持た甘い吸ひつく様な香りの有るそれは〳〵美くしい花を見ましたあまり珍らしく思ひました故根ごきにしたり押花にしたりして歸宅後皆様に見せて問ひましたが一人も知た人は有りませんてした記者様教へて頂戴。

○　麻布　細谷　星翠

美はしの花よ自然の子よ深山に歌ひつ谷に薫りつ海の彼方の氷の島も蒸氣の川や流るらん熱帯にもひろまず臨せず露たはてほゝ笑み出づる其姿よ嗚呼實に汝は神秘の影ぞ況てや御空に閃めく夜半の姿をや、あはれ何にか例へなむ、實に汝こそは天津乙女の化身なるかも。

○　信濃　相原　敏子

私の好きな花澤山ありますのよ先づ朝顔、コスモス、翠菊、石竹、天人菊、金雞草、瓣子花、菖蒲、香レンリ、金魚草、矢車草、射干、ガウラ、秋海棠、亞麻、るかう草、美女櫻、桔梗、撫子、はるしやきく、雛菊、ふろつくす、百日草、貝細工、鳳仙花、日車草、含羞草、ちきたりす、るこう朝顔、月見草、日向葵、玉けいとう、亞米利加白罌など最も大好きです。

○　播磨　古月女

妾の内の庭にはさつきが五本ありまして一ばん大木は枝が四方に廣がつて圓くなつて居ます直徑が一間もありまして赤と桃色の染分けに咲きます、外のも四角や三角の形になり或は段がついたのもあります、皐月はあまり詩的な花てはありませんがそれても五本が次第々々に開花する永い間はよい見物てあります、冬は眞白いかへり咲き、人は時ならぬ花と歌ひます。

○　山城　鈴木　幽香

花の京に花こそ多けれ其が中て、夕闇にほの白うかほる山梔の花、私は其の床しい香と、氣高い姿とが誠になつかしうて堪りません。そして此花の咲く毎に、あの浪子が何とも知らず都へ歸る其折の錦が、ありありと目の前に、描かれるのてあります。

○　周防　はる子

白百合の花は温雅しくて好き、薔薇の花は麗はしくて尊く梅の花は雅まで氣高ふて倫理の先生の様嚴かに思はれる。牡丹芍藥も品よけれど、萩や海棠の花は何人かの麗姿の仄見ゆる様にて、櫻の花を見ると身も心も錦の糸の様に透き徹りますの、けれど妾に一番希望と慰藉とを與へますは書齋に懸けてある油畫の桔梗の花。

○　石見　三明　千鳥子

嘗公様の御好だと云ふ梅が父上の大好母上は雪の銀世界に僅か花ばかり姿したる水仙が大好昨年兄上が亡くなられてから姉上は櫻を好まれ妹は萬菊を毛せんにすると云つて紙にあつめ私はほんのりの海棠が大好です。

○　島根縣　山里　紅子

私は今迄好きな花嫌な花がたくさん御座いましたけれど、木に咲く花や草花はもう見あきました、是からは遊んで果ない大空に咲く花を見たい物と明けても暮れても他の花を見る毎にかく思ひます。

○　豐後　安部　富士子

あら貴は皆様も御好はしれた事てすわネー。私田舎者のくせに大の〳〵花好、わけて菫は昨年の十月種を播きまして二ッ葉の折下に小砂まじりの土を入れて、其上に落葉の土となつたのを入れました鉢の中にうつしましたの、そして肥料にはあの豆腐の粕「俗にオカラといふ」ものを腐敗さしてやりまして朝夕慈しんで育てました處此頃てはそれは〳〵よい芽が出ましたの、だから此三四月には私の爲に美しい花を咲かせてくれる事と今から樂しんで待てゐますわ。

○　香川縣　藤　子

私の好きてそして氣の毒に思ふのは藤の花です、夏の初めいとやさしげに友もなく誰一人としてしたうてくれる物もなく、たまには農夫のために鐵もて切りちぎられる氣の毒の花。

○　紀伊　登　美子

私は大戀花が好きよ それていつも花を机の上に置いてあるのよ そしたら夜ふけた時も花をみて

唯一の友として學んで居ろのそのうちで もすみれと櫻とが一番好きなのよゆりの花がきらいてすわ。

○ 大阪市 草の子

妾は各國民の愛する花二、三を擧げませう日本櫻、英吉利は薔薇、其中 英國は薔薇、蘇國は薊、愛國は酸漿を好む樣て御座ります。獨逸は矢車菊、佛蘭西は白百合、伊太利は雛菊、支那は牡丹、西班牙は蜜柑、希臘は橄欖、埃及は蓮、印度は罌粟。

○ 筑前 浮れ雲

妾は櫻が一番好てす、そよふく嵐に、ばら〳〵ぱらと散初めし時は自分にも、わからぬ奇々妙妙な感じがします。

○ 牛込區 岩谷緑子

兄樣の館から、そつと花子さんの お寫眞をだし、赤、黄、紫の蝶々花をたんとつめて置きました。兄樣がみまして、どんな顏をなさるてしやう。

○ 岩代 わかぐさ

妾は赤黄や緑などの 色よりも、單純な白が好てす。てすから花も、白百合、白藤、白牡丹、水仙、薔薇も白、櫻よりも梨の花や李の花がよく消え殘る雪に、白梅の匂ふなどは、わけてうれしふございます。

垣根に白き卯の花、池面に匂ふ白蓮、庭石の傍の白つゝじし、桔梗も白く、秋は白菊、妾の庭は殆ど白て飾られて、年中白銀水晶のやうてす。

○ 京都 白ばら

語らざれど、言はざれど、妾が唯一の 慰藉の友は四季の花よ 殊に梅の奥床しきと白ばらの氣品の高いのと其の妙なろかほりを 姉樣と私は非常に愛しますの、去年姉樣が仙遊へ御嫁に入しやつた時いつまても 二人て愛好の花を眺めて居た時の心を忘れぬ樣にと 姉樣は白梅、私は白ばらと雅號につけました。

○ 下總 小堀みち子

私は草花の中て一番 百合が好てす、其の種類には 山百合、鐵砲百合、鹿の子百合、姫百合、立田百合等あります、嫌ひなのは 蕀のある草やあのあざみの樣にとげのある花、いくら 美しい花てもとげや毒などがあると花の仲間にも 又人にも好かれません。

○ 長岡市 秀子

お花!!! 私はなにが好きつて 花程好きなものありませんわそうして 何花とかぎりません木の花ても草の花ても 大きくても小さくてもなんでも花となのつくもの 皆んな好きてすから私の文机の上に一年中花を絶つた事御座いませんの 今挿してあるのは 室咲きの櫻と玉椿の赤い實のなつた小さな枝が二本おゝ大好きの花よ。

○ 北海道 白菊子

姫百合は私の理想の花てす 背戸に行くと澤山咲いてますの 毎日行つては詩集を繙いたり唱歌を歌つたりしますと仙境もかくやと思はれますそれに其馨の芳しい事と 姿の清く氣高い事とは 仙にこんな花はありますまい 素直な葉の陰に靜に自分の品性を保てる樣は 虚榮のない婦人の清操も思はれます 私はこんなお友達の殖えるのを願います。

○ 越前 新保勝子

十坪に足らぬ裏庭に、日頃丹精して 時々いろいろの四季の花草造つて 居ります、此の頃は水仙もすんで、菫の草が 蕾を破りました、まれに蒲公英も咲いて 見えます、櫻は八重に緋桃の花も一入美しう咲いて、まには 床の一輪生にも挿して、やさしい 花の姿を眺めて、獨り書讀み筆とるも、自ら氣が晴々して、幾たびか 精神の慰藉を與へてくれます。

○ 膽振 白雪女

夏になるとあの桐が 花をもちますれ、私あの花位嫌な花がないのよ あの花の香をかぐと氣もちが惡ふなりますの、外の花は皆大好き。

○ 澄子

この世の中て、一番私を、慰めてくれるものは、花て、其中ても、露のこぼれる ような、白ばらを一番好みます。そして、庭の花室 には、ばらやすみれや、パンジーや、まだいろ〳〵の花を植て、私の机の上の花瓶 には、いつても、花のたえた事はなく、今は香ゆかしい 白梅が挿してございます。

○ 北多摩 野菊

私は大の花好きてお 友達に花狂とまて言はれました、美くしい花さへ見ますと きつと押花に一輪してをきます、そして 机の上にはいつも一輪指にさして をきますもし花のない時は自分て編物て作てさして置ます あゝ花は何と美くしいやさしいものてせう 氣のすぐれぬ時なぞ眺めてますと自然氣がせい〳〵として 實によい心持ちになります。

○ 陸奥 山住露江

私は花なら何ても 好きてすが中にも野菊と菫を愛します梅や櫻は大變きれいてすが 然し野菊や菫はさほどきれいてありませんけれども やさし

くしほらしい中にも何となく氣高いところがあつてほんとに可愛らしい花です私はいつてもあの花を見るとそう思ひます野菊や菫のやうにやさしいしほらしい婦人になりたい・と・・・・。

○　京都市　信子

昨日迄南天と葉牡丹が私の室に挿してありましたが今日柳と取換えました庭先の梅は丁度此頃が咲きも揃はず散りも初めずと云ふ好い見頃です今朝も鶯が來て鳴てました。

○　牛込　佐藤よし江

血を吸ふ針のやうな雑草のかげに咲いて見せて、その針の中へ散つて見せる運命……！。自分が私に夏の領境を飾つた徳を誰れに知られうともせず、一生を寂寞の裏として深山の渓流ににほひ笑む汝れ……水晶に似たる玉露に彩られ、默して彼の天空の神秘と對して居るさまはさながら古の隱者のやう、あゝ高潔なる花聟よ！に神は汝が名を白合百と呼びたまふ。

○　日暮里　秀子

寄宿生活なしつゝある時は己が好める草花も一寸眺むる事すら出來ず只運動場に出てゝはいまを盛に咲き初むる一本の紅梅を眺むるのみ其さへ今よりチラチラ散り初め後はさくら花のひらくをまちつゝあるのみ。

○　牛込　川上清子

或る暖い日曜の朝食後妹と摘草に近傍の野原へまいりました フト傍を見ますと紫の花低ふさも樂しげに菫が咲いて居りました。

○　埼玉　朝霞子

例へば、「あるく姿は百合花」と、云ふが如くに、妾は非常に百合が大すきである、何となればいくら大きくなつても、小しもほこらず、頭を下げて居るではありませんか、ですから人間も、此の花の様に、必ず自慢をしてはこの花に笑はれますからね。

○　橫濱市　繁子

そうですね私は嫌ひな花はありません、其中でも好なのは野百合、野菊などです、そして植木屋にある花より自然に野や山に咲いてるのを好みます又香のよひのを好みます、又自分で庭のすみになんか植たのは、より以上愛します。

○　羽後　みや子

女子は人間社會の装飾、花は自然界の装飾となりて其愛せられ慕はるゝ美の點に於ける品位は兩つながら相俟つて一致せるものゝやう、單調なる可き社會を複雑ならしめ乾燥なる可き自然界を趣味多からしめたる點に於ても、先天的に呼合せる結果は、永しへに美的觀念の精髄を發揮して天地の春を融和せしめ人の子の胸に愛の光明を抱かしめて多大なる慰藉を供給しつゝある花其物の精神に對しては實に熱き泪を以て感謝の意を注がなくてはなりません。さるを尠少なる苦痛の爲に感謝の泪を捧げて花の温情に酬はざる人の多きは實に慨しい至りてムいます。

○　向島　てる子

妾の好きな花は白百合となでしこです何故ならば白百合は清く尊く恰も白衣の天使のようてして何所となく威光がありますなでしこは女らしくて上品で日本婦人の國風をあらはして居ります。

○　佐賀　貞子

諸嬢さまあの自治の歌に「芙蓉の花の精をとり」とあるのは御存じなんてしようねほんとに私あの芙蓉こそ理想の花なんですわ。

○　飛驒　あやめ子

白百合は氣高く、白菊は香りがよく、水仙は操正しく、あやめは優美に、各々特色がありまして、花として美ならざるはありませんが、其の中にも妾の理想の花として愛して居るのは、せうせうと降り注ぐ五月雨の中に獨り活々として居るあやめすて。

○　石狩　初子

紅、紫、黄、桃色様々の美い葩、或は直に或は首垂て優く清い姿、人をして醉はしむる高き香。あゝ此艶麗な花は扨て怎麼心を持ち、如何な美妙なる希望を仰ているのであらう。

○　千葉縣　柴田まさご

私の一番好む花は菫であります彼女は立派な美しい花として所謂貴人の床の間に飾られて多くの人に賞ばれもてはやされるやうな花ではありません然しながら彼女は私の理想の女子であります彼女は人なき山奥にはた田舍道に優しき笑顔を見せて多くの人の厭ふ、ひれもす働く農夫を慰め然も謙遜で己が姿を恥ぢて居るやうなさまは實にしほらしいてはありませんか。

○　橫濱　花子

妾は妾の名が花ですから、凡ての花が皆好きです。けれど彼岸花は嫌い。何故なれば、あんな綺麗な花を持て居ながら、人に害を與へるからです。美しくしたはしいのは、白萩の花。譬にするのによいのは、蓮と、薔薇。

○記者曰く、課題「花」に應じられた文章は

未だあるのですけれど、以上五十篇だけ此處に發表して、殘り分は増刊に廻しました、惡しからず思つて下さい。又新課題は本號限り文藝遊戯に合併して了ひますが、其代りに「各地通信」欄を設けます、詳細は一二四頁に出て居ますから見て下さい。

諸嬢と記者

○記者樣私は三號からの愛讀者ですが姉のすゝめによりこれから投書いたしますから神かけてよろしくお願申上げます　當選しましたかりにはお禮として記者樣に何か編物を差上げる樣にと母も申して居ります　母は女子文壇を私どもより愛して毎月の一日が待ちかれて御座います（たけ子）（記者曰、母君までが女子文壇を愛し下さるとは何より嬉しく承りました、記者も亦神かけてたけ子さんの家庭に光榮あらんことを祈ります）○記者樣私は今度はじめて誌上で記者樣と御話する事ができますので誠にうれしう御座います　私生來よくできもせないくせに作文や和歌がごく／＼すきてすので　短文新體詩和歌のまれ事の樣なのを投書しましたが私沒書になりましてもかまひません　本誌にあらわれる樣にいつまでも／＼勉強に勉強して投書する考て御座います（名古屋靜子）（記者曰、勉強に勉強してお作りになれば斷じて出ないわけはありません、氣長くお作り下さい）○記者樣私れ小學校を了へたのみて皆樣のようにはなれませんがせめて紙のはしに私の名が出るよーに祈つてます　出るてせうか（松江市灘町古志ます子）（記者曰、先づ此通り出ました）○投書はペンで寄ては惡くありますか御教を願ひます（靜岡縣富士郡上非出村井之頭佐野久作方佐野粂子）（記者曰、なるべく墨て書いて下さい）○記者樣私は新しい愛讀者てすが小學卒業したばかりの誠につまらない者て御座いますが諸姉の御上手な文章や和歌をどし／＼と御投書なさるのが實にうらやましいので御座います　私も是非一度投書したいと存じ新歌謠を二つばかり御恥しいけれども投書致しました（信濃木曾福島町橋本今江）（記者曰、初めは新歌謠なども好いか知れません）○妾は二年以上お世話になりましたがこれからもひきつづいて永久に女子文壇とはなれぬ考てす益々女子文壇の發達と記者さんの健康を祈ります（新井琴子）（記者曰、何うか藝術の爲に自愛して下さい、なほ本誌の花として榮えて下さい）○記者樣妾初めてお目にかゝりまして御めん下さいどうぞ以後御世話れがひます　私は明けて一昨年當地の高等女學校へ入學しまして此三月になれば早三年になりますが文章の拙ないことつたら自分ながら恥かしいのです、それに學校で作るのなんか一學期て三つ位といへば最上てすから取わけ下手なんてす、また書くことなんかも、それは／＼隨分下手てす、今からだん／＼投書して見たいと思ひますから何分御れがひします、私は學校と思つて居りますから違つて居りましたら、どうか敎へて下さい。（越後中頸城郡高城村字南會所大井健吉方林つい子）記者曰、左樣、女子文壇學校ほど多數の生徒を有して居る學校は外にありますまい、何しろ幾萬と云ふ數てすから行屆かぬ所はお詫をいたします、月謝價に十錢、是も天下に一つてせう）○妾等數名は一昨年より女子文壇を購讀し二葉會といふのを組織しております　投稿は皆、字のお上手な松野みどりさんに代筆させるのですが差支へはありませんか（飛驒船津町二葉會）（記者曰、二葉會の綠いや榮えんことを祈ります）○記者樣之から少しづゝ投書して見ようと存じますからどうぞ以後よろしく御れがい申上ます　八犬傳の一卷と云ひますのは何程致すものですか御敎へ下さいませ（岐阜夏村百合子）（記者曰、帝國文庫中の「八犬傳」なら六十錢てせう）○記者さま、妾には何の樂しみもありません、懷かしい嬉しい兩親樣には歸らぬ旅路にのぼられ、力と賴む唯ひとりの兄上樣には三年前召集せられて青葉の兵營に御つとめて居ります　妾は色香もなき野末の花て御座います、無二の友なる女子文壇の月桂樹を手折らんと硯の海に漂はさせる覺悟ておりますからどうぞ記者樣よ燈明臺となつて頂戴よ（仙臺市八幡町柳原樣方門間まさ子）（記者曰、大船に乘つた積りて餘り悲まずに文藝をお樂みなさい）○記者樣に一寸伺ひます、妾は文章は至つてまづいの、だから、和歌や俳句を投稿して居ましたが、それても誌友の一人に加へてくださるてしようか（弘前市、華枝）（記者曰、勿論誌友てす）○記者樣おたづれ致します誌友になりますには誌友諸嬢に住所氏名を御紹介願はればなりませんのですか（熊本一女兒）（記者曰、誌上へ住所本名を出さればなりません）○記者樣に御導れ申ます　私れ誌友の皆樣と繪葉書や寫眞の交換をお願ひ致したいのですか是れ等の物を送りますのは、やはり封じて一錢五厘の印紙一枚て其まゝ投函しますればよろしいのですか

(大阪府東成郡榎並村大字野須本西時子)(記者曰、封じた以上は一錢五厘で行きません、小包にするか、手紙同様の切手をはらねばなりますまい)○小說や作文はぜひ實名を書かなければいけないのですか次號でおしらせくださいまし(長野KM生)(記者曰く、原稿には本名を、紙上へは御都合で匿名でも差支ありません)○但馬の早崎芳子さんにお答へします、原稿用紙をお用ゐにならずとも普通の半紙へ何の原稿をお書になつても差支えありません(記者)○丹後の吉井保子さんにお答へします、あなたは女中となつて人に使はれて居らつしやるのに投書をしやうとは好いお心掛てす、勿論投書して下さい結構てす(記者)○小倉市の井上常子さん、小學校を卒業して二年になるが投書の勝手が分らぬとのお言葉、投書と云ふとむつかしいやうてすがつまり學校の作文を作るお考へて文章ても作つてお出しなさい(記者)○神戸の高橋ゆき子さん、圖畫を西洋紙へ鉛筆て畫いたのはいけません沒書します、やはり薄い紙へ墨て書いて下さい(記者)○岐阜市の篠田おとみさん、金華山の頂上から長良川へ飛込んだつもりて投書なさろとは初めての男氣感服てす(記者)○廣島縣佐田たき子さん、岡山市高田千枝子さん、栃木縣愛波格子さん、大和すゝき子さん、山口縣守富い智子さん、斐太住繖葉さん等から寒さ見舞や投稿の挨拶やら一々お答へ申しませんが確に拜見しました○長崎、てる代、深山の梅花、淡路、千鳥女史、福島女史、浪子、紅月女史、大阪、瀧子、弘前、蛍澤さよ子、芳枝、藤の家女史、石狩、白菊子、小春、以上の諸嬢のお言葉は皆承りました、一々お答はいたしませんけれど仰せの事は分りました○廣島の加藤初代さん、お寫眞は紙上へお出しになつたら何うてせう(記者)○縣代子さん、交際、交換などこちらて分けてもよろしい(記者)○扇城の人やま川さん、餘りに沒書に許りなさると腹立まぎれに困る程澤山に投書しますぞとの仰、然う怒らないてしんぼうして下さい、限りある紙面てすから皆様に御滿足を與へると云ふ事は出來ません、記者もお氣の毒とは存じて居ますがまア少し宛ても多くの人に紙面を割かうと思うのてす(記者)○下總の無名女さん、原稿ばかりて用事の文句が少しも書いてないならば三十匁迄二錢て大丈夫、安心して郵送なさい(記者)○長野縣赤木の一女さんにお答へします、御親友の貞子さんと一しようにお撮りになつた寫眞と云ふのはお送りになれば載せます、二錢切手を貼つて御郵送下さい、寫眞の裏か、別の紙へ「乞返送」と認めて書いて下さい紛れますから(記者)○遠州の紅百合さん、ありがたう、御地方へ參れば伺ひます(記者)○皆さん、宮城縣志田郡松山町松本よし子さんは誌友として皆様と交際したいさうてす一寸紹介(記者)○鹿兒島縣加治木の森山たの子さん、瀧の繪ハガキ二枚ありがたう(記者)○安藝、元岡茂女。日本橋、谷。和歌山縣、小林しづ子。下野、愛波格子。千葉縣、しらぎく子。岡山縣、守屋白雨子。甲府、清水もとじ。府下、千代子。神戸、安達絹枝。伊勢、心配女。淺草、よし子。大阪、片山忠子。岡山市、小梅。仙臺、文子。京都、荻原ひさ子。下野、清香。芳枝。佐賀、いせ子。淡路、鹽谷照子。鳥取縣、桑本きさ子。河村林子。三河、淺井千賀子。京都府、吉田澄枝。播磨、田村孝壽子。藤の家女史。丹後、松本美どり。豐後、竹田町姉妹。以上の皆さんの御ハガキ又は御書は凡て拜見いたしました、一一返答は申しませんけれど、お尋ねになつた事は皆宜しい、勉強して下さい(記者)○增刊「つぼ菫」の「編物造花交換」欄終りより二つ目の高橋節の分は本人に關係なき由なれば取消す。

諸嬢の交際

○記者さんはじめ皆様御變りはありませんか、大分暖になりましたれ、だがまだ鶯は鳴きませんれ、都の方の梅はもう咲きましたか、私の家のはやつと昨日一輪咲きましたばかりてございます。もう學年試驗も迫つたのてうか〳〵して居られませんれ、學課に追はれて投書も思ふまゝにてきないので常に殘念に思つてます、もう今年て高女も終へるのです、人は星よ菫と狂ひ廻らふが、やれ上京して桂の冠えて歸ろうとも自分はなつかしい母上と愛らしい妹とこの可愛い女子文壇を友として自然のまゝ永野川の畔三峯山下に生を終へたいのです、學校を退いたなら投書も思ふまゝにてき様と思ひます、どうぞ記者さんはじめ皆さん御勵み下さいましな、不束ながら自分も出來るだけ勵みます、左様なら、皆さん肉筆や船來繪はがきに自作の和歌(新派)なり新体詩なり、一首御書きになつて送つて頂戴、永久に御交りを(栃木町入舟町しまだ淺吉方福とみ子)○皆様私音樂大好きてすの音樂好きな方と御交際がしたいわそして面白い樂譜や唱歌の交換をしませうれ私補習科てすよそしてクリスチャンてすから信者の方とも御

交際したいのよどうぞよろしくれ（岐阜市外加納町一丁目菅沼信子）○女子文壇愛讀者の諸姉樣妾も本誌愛讀者の一人でありますから末永く交際を願ます又玉章や繪葉書の交換を乞ふ（大阪市西區河波座中通貮丁目三十番寺脇方川島おい子）○私は四海の浪に漂ふ南豊安岐川の畔に住む賤女です此頃より入壇いたしましたから皆樣御交際を願ひます懷かしき御手紙を賜はりませ必ず御返じは申上ます尙脊籍の交換も願ます（大分縣東國東郡西安岐村近藤げん子）○誌友の諸姉樣方よ妾は昨年小學校を卒業致したばかりの不束なる者ですが家の都合により他の學校に通ふ事も出來ず只文壇を友として淋しい田舍に月日を送つて居りますから何とぞ永久に御交際して下さいな誠に粗雜ですけれ共必ず御返事申上げます（陸前登米郡登米町鈴木ゑい子）○誌友の姉樣よ妾は姉もない又其上に去年父にわかれましたのよだから淋しくってこまりますから此たび愛讀の一人となりましたから御交際下さいなどうぞれ（千葉縣佐倉町新町吉田秋子）○岡山縣の愛讀者諸孃よつとめて御投書下さい私は岡山といふ字を誌上で見るのが唯一の樂しみなのですから（沼津町城內鈴木たかみ）○誌友の諸姉上樣私も誠に不束物ですが以後は永久的に御交際下さい（紀伊那賀郡麻生津奥富子）、○敬愛なる誌友の君方よ打絕て御無沙汰申上ました相變らず御文通下さいな何誰樣をとはず必ず御返事差し上ますから終に至り誌友諸君の幸福をいのる（東京下谷區日暮里女子音樂體操學校寄宿舍新井秀子）○妾は當縣第一高等女學校第一年生ですが今度本誌の愛讀者の末席に加りますたから末長く御交際を願上ます御寫眞や繪葉書の交換も致します諸品御送りの方へは當町風景繪葉書十葉位の所を以て御禮致します（羽後橫手町柳町三ツ梨鎌一郎方北島かち子）○賢明なる諸孃樣と以後御交際を願ひます（千葉縣上總肥君津郡[illegible]村寺尾野瓊韻女史）○おなつかしい誌友の姉樣御變りもありませんか私は至つて淺學の信州の山の中に育つた山家女でございますがどうぞお手紙下さいませな語る友もない淋しい身の上をお憐み下すつてきつとすぐに御返事差し上げます何卒々々末長い御交際をお願ひ申します（信州北佐久郡小諸町依田芳枝）○妾しはごく田舍の者でございます私の地方は寒中の間は雪が七八寸も降りつゞきます其の樣な田舍な所ですから樂しいといふ事は少しもありませんが今は雪も降りませずつもりたる雪は皆きへてしまいまして野邊はたいそう靆しうなりましたからどうぞ記者樣少しお遊びにお出下さいれ待つて居ります又諸孃樣へも御傳言下さいませたのみます（福井縣武生町三十六先織さだ子）○私も本誌愛讀者の一人ですの妾の里は奥山で鳥も通はぬ深山に住む無才無智の者で私の望みは美しい繪はがきとかそんな事は好みません成るたけ玉章にて御交換を願ます（陸前國栗田郡大河內原町大字小山田丸山久子）○懷かしい誌友の姉上樣方私の望みを御遂し下さい、それは葉書にて短文か和歌を御認めなすつて送つて下さること、必ず〳〵折返して御返事します。だけど短文は一題、和歌は三首以內に願ひますよ（東京府南多摩郡玉村落合寺澤みづ枝子）○秋田縣角間川町女子文壇愛讀會第四回を、會員奈良八重子君の別邸に會合す。集る者合せて二十三名、午前十一時より始まりて午後の六時まで。電燈室內を輝かせり。會長松田せい子君、風熱の爲めに來らず。明治四十年二月廿八日會場に於て認む（幹事通信）○賢こき誌友の姉上樣妾くしは今年十九歲になりました誠に無學なものですが、ドーゾおみすてなく御玉章やヱハガキの御交際をして頂だい。それから丹後の方でいらしやるお方は是非御文通下さるか誌上で御住所をおしらせ下さるか必ずおねがひですよ（丹後國加佐郡西大浦村中田七吉田澄枝）○妾しは詩歌俳句等を御好みなさる御方と末長く信書の交換を願ひます（越前丹生郡吉野村余田區片山ち里）○永久に繪端書、玉章の交換を願ひます、早速お返し致しますよ（陸奥弘前市北川端町一八成田たま方河村華枝）○誌友の御姉上樣へ妾はいなかにすむ淺學な不束物でおはづかしいは此度誌友の御仲間へ入れて戴きました宜敷末長く御交際願ますそして和歌私大好ですから和歌玉章御美しき御寫眞の御交際も願ます造花編物ぜひ御送り下さい私造花の寫眞掛や其他さいく物編物なども少々手許に有ますゆえ御品により品々差上ます玉章や私の寫眞は言ふに及ばずきつと上ますくれ〴〵も永久的に御交際願ます左樣なら（府下南葛飾郡船堀村字東船堀三十一番地牧野くに子）○本誌愛讀の諸才媛樣妾は山村の一人にて今迄は三島に居りましたが今回學の道を辿り終り候て鄕里に歸り候に付き御交際相成度殿方は一切御斷申候（靜岡縣富士郡上井出村井之頭佐野久作方佐野峯子）○萬天下の誌友諸孃よ、よろしく御交際を願ひます（福岡縣嘉穗郡

礪波村大字秋松林まつえ）○妾がはかなき名の文壇誌上に掲げられしより 幾多誌友諸姉様よりの御申込にと寄せられし美しき 繪端書の數々は積んで山の如く 御厚志に背くこといとゝさはなるに一々の御斷りも仕らで止みぬるみだり 心の妾を御察し被下度諸姉様の御芳名は 幾永却に忘れざるべく御斷まで草々 （東都へ遊學の途にのぼる前日櫻木きみ子）○誌友の姉様方よ私は和歌が何よりも好きてありますからたゞの葉書てよろしうございますゆへ 和歌を御書きになつて御送りくださらばきつと返歌いたします （熊本縣球磨郡深田村桑原つゆ子）○皆様私も愛讀者の一人てすからお玉章交換をねがひます （伯耆米子糀町長谷川みつ子）○皆様、私に御玉章上梓の栞をそえ御送り下さる方には 女子の友に名古屋新聞をそえ御 送りします、二品に貴女の御寫眞をそえ御送り下されし方には 女探偵新小説文藝倶樂部のどれかを御送り申ます 必ず御送しますゆ故に御送り下さい （三河國幡豆郡三和村字江原淺井千賀子）○親愛なる聖友諸姉様益々親密に御交際して下さい 願ひます若し御玉章にて御交際下さるお方は必ず本名を用ひず宛名は雅號を用ひて下さい 號は（星水）と申します（京都本町新六丁目吉田玄龍様方松井靜枝）○情ある諸姉様よ妾も愛讀者の一人て御座いますから以後よろしく御願ひ致します 岡山の片山里に住んでゐる誠に不束者てすけれど どうか御交際を願みます （岡山御津郡大野村大字大安寺吉井多美子内白梅女）○敬愛する天下の諸嬢様よ私くしは當地朝顔園秘藏の朝顔種子澤山もつて いますから朝顔のお好きな お方は郵券十錢封入遊ばして御申越なさい 上等種子五種を分與いたします尙端葉書雜誌の御交誼もお願します （山城田邊町北川喜久子）○皆様妾は先月下名の所に移轉いたしましたから 今後相變らず御文通下さい（陸奥國西郡深浦港大字追良瀨若生なか子）○記者様はじめ皆々様、永がく お世話に成りました。妾は此度一身上に 大變化があつて、此戀しき、したわしき女子文壇に お別れせなければならないのです。記者様妾は實にかなしいのですが、之れも運命て 仕方がありません。又女子文壇にお目にかゝれる日を 待つより外に仕様がありません。（横濱市南太田町長谷川花子）○お情深き諸姉様より種々雜誌や新聞お惠み下さいまして、有難頂戴いたしました、多數の中なればお禮洩れの方が御座いましたら お許しなつて下さい、妾は此三月初めに 從兄姉を便りて北海道に引越すことになりました （陸中江刺郡藤里村二九七光子）○妾歸郷して居た後、へ多數雜誌が參りましたが不在中友が開て 遂に御住居の書てある紙をなくして御返事を致さなかつた お方があるかも知れませんが御免し下さい 今は學校をひけて古郷に居ますけど 三月末には上京して好みの道を學ばれる樣になりましたから 其の時又誌上で交際を願ひます 妾只取りを致したのじやありません 今は小御門神社の下刀爾の岸に居りますが家ががんこて古風なのてすから 生意氣だ交際なんてなど云はれますから 御ゆるし下さいその積り上京してからどん／＼ 願ひますよ （下總前日吉倉内橋爪はま子）○妾は郷里に居る頃からの壇友てす 昨年のくれに渡滿してから一そう本誌の趣味を覺えましたどうぞ 皆さんこれから御交際を願ひます 男禁制てすから初に御寫眞の御交際を願ひます 今日妾は寫眞をとりましたから御寫眞御送下されば 此度妾のも送りますから親密に願ます語る友なき獨り身に吹く嵐さむき今宵などのような時 誌友からの音づれてもあるようになつたら どのように嬉しいてしよう（清國大連本局幹部官舍松木内長谷きぬ子）○眞誠なるお方と 繪葉書、寫眞、編物、栞等の交換いたしたいんてす、 又書籍の交換なも 願ます（東海道原驛原杉山彥七方杉山香花）○赤阪の齋藤茂子様御なつかしふ御座いますわね 貴女は妾の名を御忘れ遊したかは存じませんが 私は小學校て君の下の級に居りました 不束な女て御座います宜敷誌上て御交りを御願申ます （青山角田千代子）○誌友諸姉上様妾も本三月よりの愛讀者てありますが 何卒玉章繪葉書の交換を願いますきつと御返し致しますよ （山口縣熊毛郡高水村河谷いち子）○誌友の姉様方私は陸奥の山中に住み毎日見るものは雪聞くものは 松風の音實に淋しく暮して居りますから 何卒玉章や繪葉書の交換を願ひます 但し手跡の疑はしいのには御返事差上ません （青森縣三戸郡劍吉村お永島方山住雪江子）○誌友の諸令孃様方。妾は福岡縣豐前の者て御座いまして、昨年はる／＼、此地にまいりました。異郷の事とて、親い お友達もなし、ほんとに、淋しくくらしてゐますから、どうぞ繪葉書や 音信の御交際を願ひ申ます。ことに、福岡縣のおかたは 是非御交際を御願ひ申ますよ（臺灣桃園廳大嵙崁内槐庄吉田喜勢子）○光雅の諸孃様よ 妾も交際家の一人に加名致しますから繪葉書文書編み物の交換を願ます （山口

縣熊毛郡高手村山部寄宿內結城しな子）○私は悲慘なる運命の下に泣いて居る不運兒で御座います都合あつて親とも思つてゐた女子文壇を去らなければならない事になりました只今迄厚き御同情を給はりし諸兄姉樣よ以後卒ひに御健全にましませなほ幾多の姉上樣何卒御機嫌宜敷さらばよ（福岡縣柳河高等女學校北三年足利はる枝）○滿天下の誌友諸姉樣妾は今度から新入生の一人として加入しました、どうか御交際を願ひます（若狹遠敷郡國富村丸山師田順枝）○嗚呼本年四月二十五日は妾が夢寐の間も忘るゝ事の出來ぬ姉上が逝きにし四周年の命日に當る心斗りの冥福を祈らん微衷哀れ同情に厚き誌友の諸孃よ各國有名の名所又は風景繪葉書を封入としてお贈下さるか葉書に人界無常の悲劇か人事轉變の果敢なき有樣などを吟詠せられし詩歌又は新体詩を認めてお惠み下さいませ妾は追善の紀念帖として永く諸孃の厚情を感謝し併せて姉が紀念の小說雜誌文學書類百二十部の內より諸孃のお望みに從ひお惠みの繪葉書相應の品にて必ず返禮致します（肥前佐賀市上芦町花島方秋山靜子）○誌友の皆樣每度うるはしき御手紙下されありがたう存じます深く感謝しますどうぞ今後も宜しく御交なれがひます又寫眞、編物、ジオラ、玉章、繪葉書（但し未使用で）雜誌右いづれも御交換を乞ふ（秋田仙北郡淸水村寺田あや子）○東京青山の青山女學院、巣鴨の明治女學校、麴町の成女學校等へ通學（又は寄宿）の方は何卒御交際願ひます、そして學校の樣子精しくお聞かせ下さいませ、お禮は三十九年度の雜誌にていたします（尾張國知多郡龜崎町井口豊子）○誌友の諸姉樣私は田舍育の不才淺學なる者ですが末長く御交際願ひます（豊後大分郡東大分池邊勝子）○誌友の姉樣方御交際を御願ひしますよ（高岡市御馬出町五九梶川つた子）○皆樣妾は北國の片田舍に住む不束者ですが此度末席に加りましたから皆樣方よ何卒末長く繪葉書や寫眞の御交換を願上ます妾も當縣の高等女學校の第三學年生ですから可成女學校御在學中の御方と願上ます（羽後國橫手町柳町三ツ梨健一郞方大山入甚子）○皆樣の中で日本畵を御修業なさつた方があるなら何卒御交かん下いまし末長く御交際下さい私は南畵でありますから水彩の方とも願ますが御かへしは日本畵で致しますから其の御積りて、白菊を送て下さつた方々誠に有がたう順々に御禮致しますから御無沙汰は御ゆるし下さい（本所龜澤町加賀彩鬪女）○妾病氣中は皆樣から見舞狀や色々と產物送つてありがとう御座いました御陰樣て先日退院致しましたから以前の通り文通して下され又造花や刺繡寫眞の交換願ます病氣全快の祝として下記の小說進上致します先着の御方より廿人樣紅葉全集（第六卷金色夜叉）雛子不如歸仇と仇橫戀慕想思怨浮沈奕丈夫うき瀨人の罪血薔薇病戀愛次郞島醜子夫人流失娘以下十冊（志摩國鳥羽町赤崎淺井方笠井孝子）○都合により御交際を謝絶致します誌上にては相變らず折々御月にかかります皆樣御機嫌宜しふ（埼玉縣秩父にて近藤とく子）○誌及御姉君方此度橫須賀に移轉致しました故相變らず繪葉書文通にて御交際を御願ひ申ます（橫須賀汐入四○○大西その子）○皆樣暫くてした德島の秋月ですが此度當地へ來りました以前御交際を願ふた時は姓を多田と申しましたが林と改姓致ましたから宜しく御交際下さい（麻布材木町松岡方林秋月）○妾は諸雜誌も讀んで居りますが「女子文壇」程妾の理想に合つた物はありません配達してくるのを恰も飢えたる犬の食物を得し如く帶封をツーと裂くのでありますよ記者樣はじめ諸孃よ宜敷誌上にて御交際下さい（佐賀縣南鹿島村つる子）○諸孃の姉上樣私は先月から愛讀者の一人となりましたから繪葉書や玉章の交換を御願します（山口縣熊毛郡三丘村和田澤文子）○私は二月六日午前の汽車で大磯へ轉地いたしましたから澤山の方に頂いたおハガキの返事も差上て相濟みません何れ追々申上ます（日本橋區通旅籠町八番地森富美子）○奥平野は祥福寺のほとり鐘の響に起臥するもの、慰めたまはる優しの方も在さば何ほどかうれしからむに（神戸奥平野三四山崎方山茶花）○一時的でなく永久の御交際を願ひます（山梨縣甲府市淸水もとじ）○皆さま玉章繪ハガキ寫眞編物などの交換をねがひます（神戸市東川崎町四丁目百五十三沖本政子）○諸孃樣、私は此度滿洲に參り誠に淋しく暮して居ります皆樣の中で信實を以て玉章繪ハガキ寫眞の交換して下さる方があれば必ずお返事は差上ます（大連關東都督府郵便電信局官舍內、高橋榮子）○消い〳〵御交際を致したいと思ひます繪ハガキや封筒を送つて下さい皆樣空吹く風と御聞捨てなく願ひます（信濃北安曇郡北城村橫川壽枝）○皆樣いろ〳〵の品をありがたう相變らず願ひます（兵庫縣武庫郡西灘村ノ内岩屋ホートクラブ內、野間ひさ子）○私は昨年の十月に母を失ひました、何うぞお

交はり下さい 物產の交換などいたしたいものです(熊本縣立高等女學校寄宿舍內、手島ゆき子)○皆樣私は初めて此處に出ますが御手紙や繪ハガキの交換など致しませう(熊本縣飽託郡横手村中田清次郎宅渡邊のり子)○私は繪ハガキのみを望みません只のハガキでも玉章でもよろしいけれど末長く御交際を希ひます 殊に近國の方に(滋賀縣甲賀郡三雲田川四百三十一番地井上つゆ子)○皆樣ながく御交際下さい(小倉市東濱岸通りしらばら女)○私、東京の諸姉樣と手紙の交際をしたいのです(越後村上町長島とみ子)○二十才以上の方と玉章や編物の交換が致したいと存じます(鹿兒島縣川邊郡知覧村前田ひな子、朝限のわ子)○私は徳島縣の出身で今は大阪に住居して居ます よろしく御交際下さい、繪ハガキでも、玉章でも(大阪南區瓦屋橋西詰四入ル北角山口樣內若栄女史)○横濱の齋藤とし子樣御住所をおあかし下さい、御交際を願ひたい(佐世保市下川浦千四百三十五石井すみ子)○新しい愛讀者ですけれど何分皆樣御教示下さい(愛知縣丹羽郡扶桑村大字柏森六十二、宮塊さと子)○妾は兄弟がありましても男子計て女は妾一人ですの夫故皆樣何とぞ 繪葉書御玉章下さいましそして一時的てなく永久になさつて下さると云ふ御方(東京市本所區向島須崎町一四五松上てる子)○親愛なる誌友の皆樣よ妾は至て不束者ですが繪はがきや レターの御交換を願びます 妾の第一に望む處は一時的でなく永久的にレターの御交際を(靜岡縣沼津町城內飛奈久枝)○松村さよ子樣ドシ\/\投稿遊せな全く河內が少ないのは殘念ぢやありませんか私は北河內ですのよ攝津の方はなか\/\さかむてはありませんか 御同國の諸姉樣振つて下さいましな そして每號誌上に河內の名がある樣したいものですれ(白露子)○皆さん妾も始めて誌友の一人となりましたから以後何卒お見捨なく繪葉書や玉章の交換をして下さい、粗品なりとも必ず\/\お返し致しますから(能登國西湊村字小島リノ十八番地、天涙子)○諸孃樣方私此の度が初めて投書いたしますが私も愛讀者の一人で只今田舍女學校にて身を修めて居る者で御座いますどふか以後よろしく御願ひ申し上げます(佐賀寄宿舍艮子)○諸孃樣妾が初めて御目にかゝりますが以後はいろ\/\の物お送り下され屹度相當の御禮返します(和歌山縣那賀郡中野上村土井德之助方能子)○皆さん!妾は今度下記の處に轉任することになりました。なほ舊に倍して親しいお交りを願います。また繪端書や御玉章の交換もネ(岩代國信夫郡大森村大森第一小學校內、丹治はるみ子)○おなつかしき皆さま二十才前後の方と親しく御交りを願ひたう御座いますが御同意の方は次號て御答を(北多摩郡菊)○早速有益なる書籍雜誌、または御親切なる慰問狀をお惠み下さいまして、ありがたう感謝します、攝津のちかよ樣、兵庫の成田ゆき樣の御住所が消印の爲によくわかりませんから教へて下さい、御禮狀を上げたいから、また北海道の落葉さまも住所を知らせて下さい(越後中蒲原郡兩川村五十嵐美波)○諸姉樣、御壯健でいらつしやいますか、私は桃の里に住む誌に不束者ですがどうか末永く御交際下さい(滋賀縣甲賀郡柏木村大字北脇七百八十五番地 川島嶺子)○誌上のみな樣したしく御交り下すつて深く\/\御禮いたします今度都合によつて當地に移りましたから一寸おしらせ致します(横濱市西戶部町六百六十五番地菱沼方しげ子)○愛讀の皆樣よ誠心こもれる玉章て一上涯おつきあひ下さいませんか(埼玉縣兒玉郡東兒玉村大字根木平野三重子)○皆樣繪葉書、雜誌、玉章、地方新聞などの御交換を永久に願ひます 又妾は朝顏を、愛植する一人でありますが 諸孃さんの中で種子を、お持の方は、お送り下さい 切に願ひます(近江國八日市町中野小島邸內武村琴音)○誌友の皆樣妾は病の苦に不堪悶へ狂ましたそは信仰なき罪の子でしたからです 神は實に救ひます一度バプテスマを受けてよりは とみに苦な忘れました所禱後のスが\/\しさ 遂に昨日退院の嬉しさ神に感謝します 繪葉書下さつた皆樣以後は大に交換を祈ります更宿所(大阪今橋五ノ一〇四北川花蓮子)○私は至つて無智無學の者ですが繪葉書遊花玉章の御交換などし\/\と願ひます又お寫眞もれえ(靜岡縣遠州濱松田町四七番地中村露子)○親しき誌友の諸君達!每々御親切なる玉章、繪端書お送り下さいまして、深く感謝致します、妾其他に縣立病院の看護婦にて交誼を愛讀なさるお方て 妾と交際して下さる方はないてしようか(播磨飾磨郡廣村田村幸子)○諸孃樣方よさむさの御障りはなくてよ當地方は御存じの名物とまて云ふ滿洲風リユウ\/\と吹きしきりかよわき肌は千切れるばかりまあー何ともたとへ方はありません あの雞卵なぞまで石の樣に凍ふるのですもの それからわ四方の野山には樹木をてはなし 元より草などは枯

れはて丶言葉は見るとは皆無てすのそれに此頃は內地よりのたよりはなし何所としてたのしみはなし只折にふれては生わかりの支那人を合手にはなしするより外はおもしろき事はありませんどうか皆さんあわれと御思召たまはゞ珍らしき書物やうつくしき栞なりとめぐみくだされてわらわの心をなぐさめたまわれかし（在大連關東都督府郵便電信局幹部官舍高橋榮方美代子）○私の一番すきなのは地方の皆樣に御手紙いただいて御交際を願ふのが何よりすきよ（京橋南新堀二ノ十二木村のぶ子）○誌友の姉樣方よ妾は不束な者てございますが何分よろしく末長く御交際を願ひます（福岡縣嘉穗郡穗波村忠隈佐藤貞子）

繪葉書交換

○皆樣美しい葉書澤山御送り下さいまして有難う御座います皆返事差上ましたてせう、東京の菊花月子樣御姓名がわかりませんので返事差上兼れます御住所及御本名御知らせ下さい小島治女子樣御返事有難う存じます御寫眞やゑはがきの御交際をして下さいなそれは一度きりてなく永久にてすよさようなら（栃木縣河內郡羽黑村高等小學校內金田きん子）○皆さん美しい繪はがき深山難有う、今度は肉筆或は舶來の立派な繪葉書に自作の和歌なり、新躰詩なり、英文なり、ヘンて丁寧に御書きなすつて頂戴、必ず相當の品て返禮致します、先着七名樣へは松葉形栞を添へて上げます（栃木町入船丁島田淺之進方福富重枝）○どうか繪葉書の交換やレツターの交際を願ます（大阪安堂寺橋通り一齋藤芳子）○誌友の姉樣今度誌友の御仲間入をさしてもらつたのてすが宜敷御交りを願ひます そして繪葉書や御寫眞の交換を願ひます（山口縣玖珂郡灘村五六七河本春子）○社友の皆樣妾は繪はがきの交換が何より好きてすよ皆樣の中て一時的てなく末長く交換して下さる方はありませんか相當のものてすぐに御返し致します（姬路東魚町藤本てつ子）○外國製にて水彩畵の細密な風景ゑはがきの交換を願ひます（福井市佐佳枝上町岩永商店內水蝶花）○皆さんわたしも愛讀者の一人よ、どうぞ御交際下さいな、また繪はがき交換をどうぞ交際して下さいなそして寫眞繪葉書（內筆のも）玉章編物等の交換を願ひます（石見國那賀郡美又溫泉場中山かん子）○なつかしい誌友諸姉樣何卒永久に交際して下さいれ、また繪葉書の交換もれ、皆さん粗末なのてよろしいから交換して下さいまた玉章もれ（能登西湊村字小島リノ十八番地河崎玄宗方大森天涙子）○誌友の諸姉樣方よ妾は南信の草深き所にすむ不束者てすが何卒繪葉書の御交換を願ます必ず御返事は致しますから美くしいので下さいな（長野縣下伊那郡會地村大字駒場安川才一方近藤一江）○美しき繪葉書の交換を願ひます種類は選びません（大分縣宇佐郡封月村木之江正文）○諸姉樣、妾も繪葉書の交換をお願ひ致します、どんな繪葉書てもようございますからなるべく俳句を書いて下さいまし（仙臺二十人町七四針生方松村とし子）○お姉樣方私左の雜誌不用て御座いますから上等の繪はがきをお送り下さる二十五名樣へさしあげます、女子文壇女學世界婦人世界帝國畫報但し舶來の品ならば別にお禮を致します（相模國三浦郡浦賀町大津長塚代志子）○妾は遞信省發行戰役紀念葉書及び錦帶橋嚴島等の名所繪葉書を持て居りますから、各地方の名所繪葉書と交換して下さい（山口縣玖珂郡伊陸村、井坂禎子）○なつかしき女子文壇御愛讀の諸孃よ昨年に引き續いて繪ハガキの交換を願ひます妾は貧家の子女てすから質の善惡はとひませんても只だ一回の御方は好みません永久に友誼を厚ふする目的なのてす（越後國中蒲原郡庄瀨の里河內米子）

▲おことわり　例によつて投書が非常に多かつた爲め「圖書換讀」と「寫眞編物交換」の全部及び「繪葉書交換」の殘部を次號にまはしました。

剽竊詩文の注意

▲第四號の分　○成田、三橋蓮哉。和歌四等「まどゐして」は三十九年十二月中の『萬朝報』より○越前、蘆披子。和歌秀逸「亡き君が」は三十九年三月發行ハガキ文學增刊號『みつ潮』の天位田中靜潮君の作を剽竊。

▲第三號の分　○滋賀縣、磯野しづ子。新歌誌二等「花のこよみを」は雜誌『きさらぎ』第三號の鈴木金屋君の作を○京橋、矢代あづま。新體詩秀逸「歡樂」は有明氏著『獨絃哀歌』中の「歡樂」を剽竊せしものとす。

○今回注意を與へられし諸孃は○伊豆、注意子○北越、河內よれ子○尾張、菅沼あきか子○信濃、有賀まさ子○向島、芳江子○山口縣、井坂禎子○越前、千里子

記者通信

文學顧問

前々號に豫告した「文學顧問」欄は愈よ次號から發表しますが、諸孃も成るたけ遠慮なくおたづね下さい、文學書類の事、古書及び新版、解題、文學又は詩文の意義、學校の案内、詩人文士の事、作文作歌上の疑問、事柄は何でもよろしい、文學に縁故のある事ならお答へします、それから前號に豫告した「紹介」欄は此の文學顧問欄へ合併してお答へする事にいたしましたから左樣思召して下さい。

各地通信

是は從來の課題に代るものです東京は勿論全國各地の諸孃が御通學なさる學校の現況（生徒の數、校風、課目、特色、評判、集合、運動會の事など何でも）村又は町又は市の現狀、地方文壇の現況、行はれる新聞雜誌、近頃の出來事、風俗、習慣、天候、景色等何でも通信して下さい、十行内外の文章に限ります。

寫眞募集

諸方御影の寫眞は御承知の通り毎號發表して居りますが、御入用ならば用濟次第御返却いたしますから、どしどしお貸し下さい、諸孃が手箱の底深く祕めてあるのを出して偶には新風にもあてる方がよろしい、それから景色の寫眞ですが是も御所有の方はお送り下さい、都合で返却します、好い景色ならば優遇して出します、本誌は諸孃の機關雜誌ですから成るべく愛讀諸孃の力に依りて美くしたいものです。

文藝遊戲　午後六時（新課題）

▲今度の文藝遊戲は「午後六時」と云ふ題です、一口に云ふと諸孃は午後六時に何んな事を見聞し且爲したかと云ふ事になりますけれど▲少し詳しく說明すると午後六時前後の一家の樣子、自分の行爲、或る日の午後六時に起つた出來事、例へば私は何月何日の六時には家族と一しよに夕餐を終へて散步に出やうとしたとか、こんな色の雲を見たとか、都會に行つて居たとか、芝居を見て居たとか、日はいつでもいゝのです午後六時の事を成るべく寫生的の文字で書て頂きたい▲午後六時と云つても正直にきつちり六時の事を書かうと時計と睨みツくらをしてソラ六時だと筆を取上げて下さいと云ふのではありません、六時前後と云ふ意味に取つて下さい、五時半の事でもそれは猶豫します、四時の事になつたり七時の事になつたり二三時間も違つてはいけません▲若し午後六時と云ふ題で新體詩、和歌、俳句、上品な川柳のやうなものが出來たら面白いでせう、勿論採用します、一つ考へてうまくやつて下さい▲それから此題で書かうと思へば豫め心がけて置いて或る日の午後六時前後の町の樣子とか、景色の變化とかを觀察して見るのも作るのに都合の好い方法でせう▲賞品は例の通り五等まで、原稿は明瞭に認めること

（しめきり四月二十日）

懸賞品發送濟報告

第二號に發表しました當選諸孃のうちで故障のないお方だけへ左の通り三月五日に賞品をお送りしました。

流行絹張洋傘　津田眞佐子

新柄反物　病葉子　志千代子

流行帶留

○下川まさ子○佐々木貞子○紫雲女○藤原竹子○中島縫子

縮緬半襟

新井琴子○服部水仙子○紅薔薇女 ○宮脇とう子

化粧品

亮子○山村りやう子○山田くに子 ○甲斐ふい子 ○佐野さだ子

◉輕便圖書切符（七十錢）○門脇まさ子○太田秋津子○水口菊子○牽女史○大井靜枝子 ○わかくさ子 ◉同上（五十錢）○河野楨子○富美子○河村小藤子○しらゆき ◉同上（三十錢）○桑原露子○てる子○吉原靜江子○北本欧子○ 酒葉花舟子○岩谷絲子 ◉同上（十錢）○小川くに子○工藤いつ子○五十嵐英波子○鈴木すみ子 ○德永花都子

別種 ◉輕便圖書切符（五十錢）田中文子 ◉同上（四十錢）大谷しはす ◉同上（十錢）安部ふじ子

▲發送未濟の分 あやめ子、神戶の高橋紫峰、下野のきむ子、の三氏は原稿と同じ紙面にて至急住所姓名をお知らせ下さい。

these students of the world meet together, but have they any means to encourage their close relationship?	能はぬ事と存じますが，併し御互の親密なる關係を愈々建固にせん爲に何か方法が御座いますか。
A. Certainly they have. Have you heard about the conference which is to be held in Tokyo from the 3rd to the 8th of April?	甲：御座いますとも．四月三日から八日迄東京に開會されます大會の事を御きゝに成りましたか。
B: My sister said something like that.	乙：妹が其様な事を申して居りました。
A: The Federation Conference is held every two years. The leaders of all countries gather together.	甲：此同盟會大會は二年目毎に開かれまして，諸國に於ての，先導者が一所に集ります。
B: Are women delegates coming from abroad for this conference?	乙：婦人の代表者も外國から此大會へ臨席致しますか。
A: About thirty-five are coming representing about ten different countries.	甲：三十五人程，十個國を代表して今度の大會に參ります。
B: Is every body allowed to attend the meetings?	乙：誰でも自由に集會に出席して宜しいので御座いますか。
A: No, the number is limited, and so only fifty Japanese women are invited.	甲：數が制限して御座いまして，只五十人よりか，日本の婦人は招待されません。
B: From all over the empire?	乙：其數は全國中からで御座いますか。
A; Yes, they are trying to get these fifty from Hokkaido to Kyushu.	甲：此五十人を北海道より九州までの中から選拔しようと皆努力して居ります。
B: It is most interesting. Please tell me more when I bring my sister with me.	乙：大相面白い御話で，今度妹を伴れて參りました節，何卒最と御咄し下さい。

heard something about it, and she wants to know more in details. I told her that you would be kind to tell her about it but she is too shy to come.

いますˊ妹が何とか其麼事を他所から聞いて參り，委敷知り度いと申ますゆゑ，貴女が快く話して下さるから伺へと申ましたが，羞しくて參られないので御座います。

A: You must bring her with you next time. I should like to meet her. Yes, there is a very big organization called the World's Christian Student Federation.

甲：今度は御伴れになつて下さいˊ仰有いました通り大組織て，萬國學生基督敎青年同盟會と云ふものが御座います。

B: What a long title that is!

乙：何と長い名稱てす事。

A: Very long, but very easy to say it. This movement was started about twelve years ago in America, and then the Christian students of Europe joined and formed a federation. Gradually those of India, Africa, China and Japan also joined. Because of the union of Chiristian students of the world, it is called the World's Student Christian Federation.

甲：長いてすが，云ひ易い名てす。此大運動は十二年計以前に米國にて組織され歐洲の基督敎青年學生が加入し，其から，印度，亞非利加，支那，日本の學生も加入しましたˊかく世界各國の基督敎學生が連合せし團體てすから，萬國學生基督敎青年同盟會と申します。

B: How many members are there?

乙：幾人計り會員が御座いますか。

A: There are included over 101,000 students and professors in twenty-eight different countries.

甲：敎師，學生の兩會員は十萬一千人の上て，廿八個國を代表して居ります。

B: Are women students included in that?

乙：女子の學生も其數に這入つて居りますか。

A: Yes. It was only two years ago that they joined the organization.

甲：唯ˊ此團體に女子も加入致す樣になりましたのは，只二年以前の事てす。

B: I know it is impossible for

乙：勿論，此大數が集合するは

to others. There are times when the best thing we can do for a man is to make him laugh. But there are other gifts which we should seek to impart. Sometimes it is cheer to a disheartened spirit. Sometimes it is comfort for sorrow. Sometimes it is the inspiration of a fresh thought which we have found. We should make sure at least that to every one we meet we are ready to impart some gift which will do him good. No aim in life is nobler than to be a help to others.

(selected)

に施し且益さんと欲する於て，時には人をして哄笑せしむる之最大の良策たる場合往々これあり．他に與ふ可き物進實に各自數多是を有す．此進物や時には失望失意に對しての鼓舞快意となり，或は悲憂に對しての慰籍となる．又我等の受けし志想の新感動となりて發する事もあるべし．如何にもあれ要は，日々逢ふ人毎に益あらしむる物を分與せんを忘るべからず．人生行路に於て人類の輔助たり得るより高潔の目的は他にある事なし。

The Student Federation

A: I have not seen you a long time. Now have you seen?

B: I was in bed a week with the attack of influenza.

A: I am very sorry to hear that. Have you recovered from the attack?

B: Yes, I feel rather weak yet, but I feel all right.

A: The ays are getting warmer, and so I think you will get stronger very soon.

B: Yes, thank you. I came today to ask you about a certain federation. My sister has

學生同盟會

甲：屢く御目に懸りませんてしたが如何て入來しやいますか

乙：インフルエンザに罹つて一週間計床に就きました。

甲：其は眞個に御氣の毒て御座います．最う御全快に御成りなのてすか。

乙：ハイ少しく疲勞をまだ感じますが，氣分はもうすつかり宜敷御座います。

甲：追々暖い時候になりますから，直きに御壯健に御なりてす。

乙：難有う御座います．實は今日參りましたのは，某同盟會に就き御伺ひ致したいて御座

英文（四）

津田梅子閲　河井道子述

The Violets

Did you know the violets
　Were weeping in the shade,
When the bright-eyed morning
　Came blushing down the glade?
O, the pretty violets,
　Bowed with dewy showers,
And sweet as if a bird's song
　Had been turned to flowers!

Did you know the sunbeams
　Come creeping, creeping near,
And, when they saw the darlings,
　Whispered: "We are here?"
O, the gallant sunbeams!
　How very kind were they,
Stole on tiptoe, softly,
　And kissed their tears away.

(selected)

菫花

皆さん日影に　菫花
泣いて居るのを　御承知ね.
パチリとした眼の　朝姫が
羞らひ森から　來ます時。
眞個に綺麗な　菫さん,
露が重くて　うなたれて,
小鳥の歌が　可愛らしい
花になつたと　思ひます。

皆さんたん々々　光線が
側にくるのを　御承知ね.
可愛い菫が　見付かると,
「サー來ましたよ」との　內證言.
本當に愉快な　光さん,
實にあなたは　親切ね,
靜かにこそり　側へ來て
涙をキスで　止めるから。

Gift

We ought always to desire to be a blessing to those we love. We should make sure, too, that it is the best we have that me impart

進物

我等親愛する人々の祝福たるべきを常に希望すべし. 又我等他に分與すべき物あらば, 我等の所有せる最上の物たるべし. 他

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

讀め!!女學雜誌界の覇王!!見よ

第五巻第四號 四月一日發行

女學雜誌 日本の家庭

一冊金拾貳錢 郵税金壹錢 六冊金七拾錢 十二冊金壹圓參拾五錢

▲學者と家庭……紫英堂主人
▲兒童研究と婦人の地位……朱鷺子
▲子供の教育に就て……田中樂春
●幼兒の歌(日本女子大學教授鹽井雨江)
●春の歌(三宅花圃撰)
▲被勞の恢復　沼田笠峯
▲家庭と園藝　木村小舟
▲子供の特質と其教育(東洋大學講師)高島平三郎
▲家庭と掃除(醫學博士)遠山椿吉
▲高尚遠大な理想(東洋大學講師)中島德藏
▲通俗教育問答(獨乙協會校長)大村仁太郎
▲家庭と神經衰弱と(精神病院々長)門脇眞枝
▲社交上の贈答　岸田菊伴
▲家庭教育　蛭田育英
●挿花(日本女子大學教授兒島晩翠)
●家庭小説(病瘦歸客)
▲手輕西洋料理……ゆふづき
▲惡まるゝ由縁……幡幽泉
▲春の家庭……朱鷺子

東京神田 表神保町 同文館


四月一日より
第十三回新柄陳列會
寄せ切れ見切り反物大賣出し
懸賞裾模樣圖案展覽
營業科目
新柄呉服太物類
歐米流行洋服類
鞄及旅行用具類
舶來小間物化粧品類
帽子洋傘履物類
室內裝飾品類
食堂及び
寫眞場の
設けも有之候
三越呉服店
日本ばし
駿河町

(宮本製本)

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



醫學博士
瀬川昌耆先生賞詞

幾多賣藥中内外に名聲を轟したる中將湯の婦人諸病に偉効ある事は産科婦人科專門醫學博士諸氏の證明に徵して明なり余も本劑に關して多數の子宮病「ヒステリー」月經不順等諸症者に服用せしめし結果着着良好の成績を得たることを實驗せり故に余は「中將湯」は婦人藥として最良の者　るべきを確信す

中將湯

見よ

主治功能

- 子宮病
- 血の道
- 逆上痛頭
- 腰足冷込
- 下腹痛み
- 胸先差込
- 白血長血
- こしけ
- 婦人神經
- 氣ふさぎ
- 癇高ぶり
- 夜眠られず
- 産前産後
- 古血の滯
- 難産流産
- しびれ水腫
- 月經不順
- 月經滯り
- 月經痛み
- 血ぶとり

此外

凡て子宮血の道産前産後月經不順より起りし諸症に用ゆれば血のめぐりを調へ帶下を止め欝を開き自ら心氣を爽快ならしむ



定價

一日分十錢	二週間一圓十錢
四日分卅五錢	三週間一圓六十錢
一週間六十錢	五週間二圓五十錢

本舖へ御注文の方は病人の御容體詳しく御申越あれ

注意　持藥として御服用の御方は五週間分御求め被下候得者至極御徳用に候

中將湯本家　東京日本橋通四丁目　振替貯金口座壹六八〇　津村順天堂本店

中將湯本家　大阪堺筋大寶寺町南　振替貯金口座參壹六貳　津村順天堂支店

女子文壇　最廉無比　定價金拾錢　郵稅壹錢

（東京秀英舍印刷）